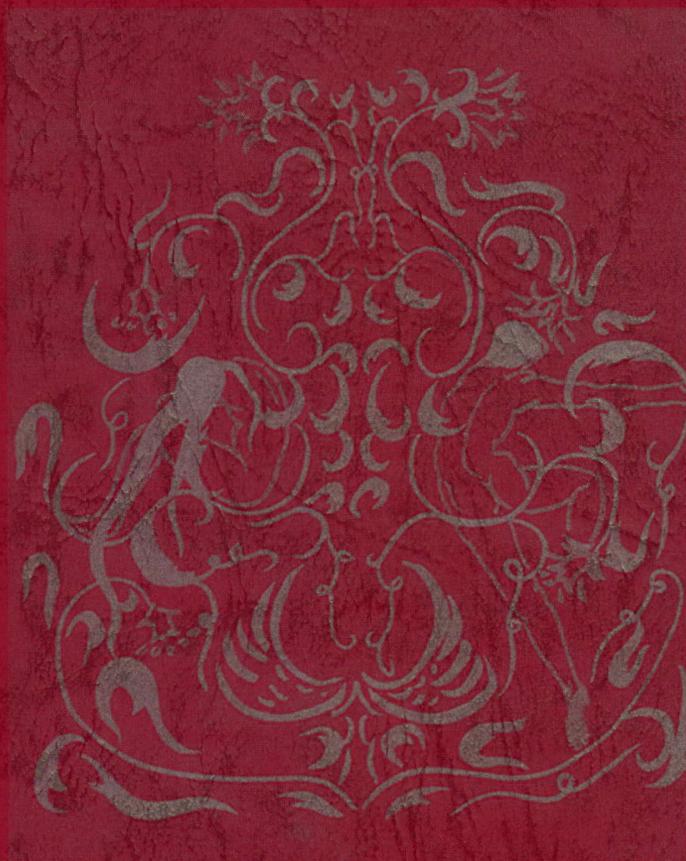


# あつぎの女性20人

——聞き書き集——



さがみ女性史研究会「さねさし」

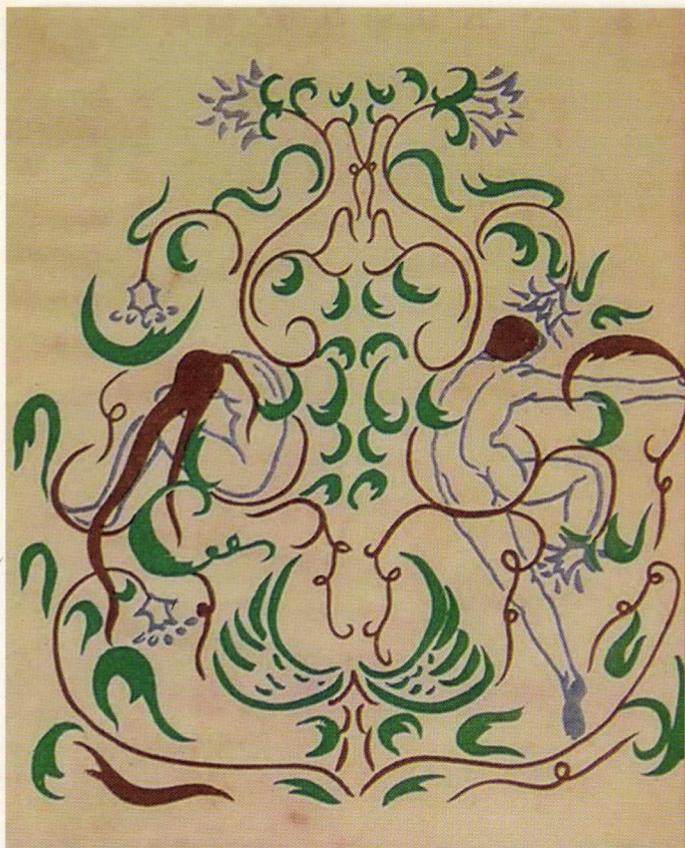






# あつぎの女性20人

— 聞き書き集 —



さがみ女性史研究会「さねさし」

口  
絵

『武相の若草』二二二号（一九二六年六月一日  
発行 江口秋彦氏の画）の表紙画です。  
版元はすでに無く、江口氏の消息も不明です。  
ご存知の方は、連絡いただければ幸甚です。

## 『あつぎの女性20人』刊行に寄せて

さがみ女性史研究会「さねさし」の方がたに初めてお目にかかったのは、かながわ女性センターで一九九八年九月に開催した「新ミレニアムへの伝言―第七回全国女性史研究交流のつどい in かながわ」の会場でした。全国から女性史の研究者、学習者ら六〇〇人が集まり、わたしは事務局長として一年がかりで準備した会の進行に気をとられていましたが、厚木の皆さんの強いまなざしが印象に残りました。それから半年後、「さねさし」が発足したと聞いて嬉しく、わたしも微力ながらお手伝いすることになりました。

神奈川県は地域女性史の編纂が活発な地域です。県民女性を中心になって県の女性史を編纂するという斬新な方法で八七年に『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち』が刊行されて以来、『多摩の流れにときを紡ぐ―近代かわさきの女たち』（九〇年）、『共生への航路―かながわの女たち<sup>45</sup>、<sup>90</sup>』（九二年）、『横須賀の女性たち―近代 女性の年表』（九八年）、『消したくない史実―地域新聞にみる西湘の女性たち』（二〇〇一年）と続きましたが、『あつぎの女性20人』で初めて県史の女にも光があたり、神奈川の女性像がトータルに見渡せるようになりました。祖母から母へ、母から娘へ語り継ぎ、読み伝えていくオーラルヒストリーは、地域の貴重な文化財産です。

もつとも、住民が作る女性史といっても事情はさまざまで、自治体に関わるものはそれなりの援助がありますが、自主グループだけで作るのは、製作・出版費用はもとより、会場を借り

たり、コピーをしたりといったことも含めてさまざまな苦勞がともないます。そのハードルをこえて「さねさし」はみごとにチームワークをつらぬかれました。

「さねさし」の由来になった『古事記』の歌、「さねさし 相武さがむの小野に 燃ゆる火の 火ほ中に立ちて 問ひし君はも」に見るように、相模の女はいにしえから激しい情熱の持ち主だったようです。明治の自由民権期に県内で唯一、女の民権結社愛甲婦女協会ができたのも現在の厚木市荻野地域です。その心意気を汲む話者お二人、往時に思いを馳せながら語っています。農業と家事と子育てと職業と、一人で何役も兼ねてこられた方のお話などからも相模の女の秘めた強さが伝わってきます。そしてなによりも、この聞き書き集を完成したメンバーに、古代から近代をくぐって現代へと、相模女の熱い思いが地下茎で繋がっているのを感じます。

この光芒の季節を持続して、聞き書き集にとどまらず、通史、年表などを加えた厚木女性史が書かれることを願うやせつ。

二〇〇四年の春浅い日に

江刺 昭子

## はじめに

『あつぎの女性20人』は、わたしたちが編集した聞き書き集です。

一九八五（昭和六〇）年頃から、社会では男女共同参画が叫ばれ、女性たちにも社会参加の機会が増えてきました。わたしたちはいろいろなところで学ぼううちに、これまで歴史のなかで埋没していたごく普通の地域の女性たちが、どのように生きてきたかを知る必要を感じました。

その後、厚木市に女性史の講座を要望しました。一九九八（平成一〇）年一二月、厚木市パートナープラン推進セミナー「地域を支えた女性たち」が開講され、講師は女性史研究家の江刺昭子さんでした。終了後、「女性史を学びませんか」との呼びかけに賛同した一〇人で、さがみ女性史研究会「さねさし」を発足させました。

資料の収集や聞き取りの記録から取り組みました。話者を募るために、市の広報や公民館だよりで呼びかけをしたり、知人からの紹介でお願いをしました。明治、大正、昭和初期生まれで、もと愛甲郡で、現在の厚木市、愛川町、清川村でご健在の二〇人の女性にしばらくしました。更に、職業、生活環境なども偏らないように配慮しました。

わたしたちは、聞き取りも本作りも初めてのことで、戸惑いの日々でした。話者宅への訪問の日時を調整し、テープを起こし、原稿の下書きをし、慣れない作業の連続でした。たびたび足を運ぶうちに、親しく心を開いていただき、貴重な体験を伺うことができました。あれもこれもと思いつながら、限られた頁数に削らざるを得なかったことが心残りです。

二〇人の話者は、その青春を、結婚を、子育てを、戦争に翻弄された歴史の生き証人です。それぞれがおかれた環境のもとで、したたかに、たくましく生き抜いてこられたそのエネルギーが熱く伝わってきました。

貴重な時間をさいてお話ししてくださった話者や、そのご家族に心から感謝申し上げます。

この本を出版するにあたり、未熟なわたしたちを根気よくご指導下さった江刺昭子さんに厚くお礼申し上げ、発刊の言葉とさせていただきます。

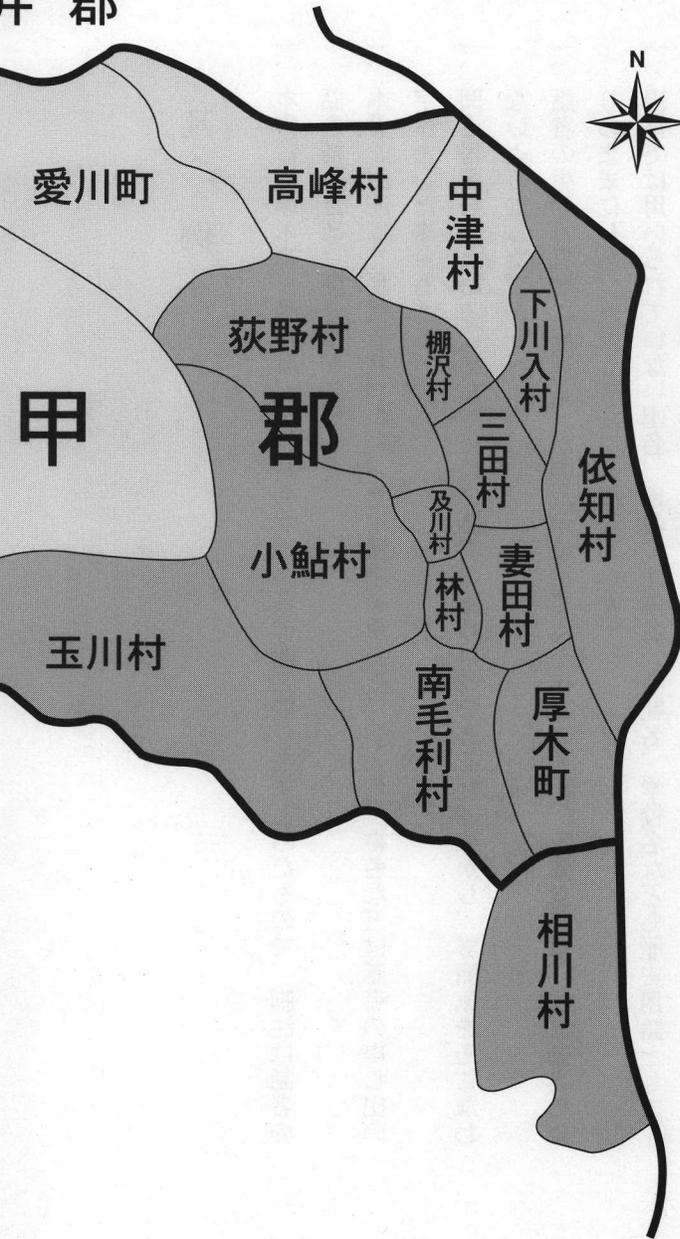
二〇〇四年四月

さがみ女性史研究会「さねさし」

## 凡 例

- 一、本書は、厚木市、愛川町、清川村の女性からの聞き取りをまとめたもので、脚注は話者の話を補うために聞き手が加筆した。
- 一、本書の記述は、現代仮名づかい、常用漢字を用いた。個人名、書名などは話者の申し出の字体とした場合もある。
- 一、聞き書きをまとめるにあたっては、話者の語り口をできるだけ生かし、雰囲気をそこなわないようにした。
- 一、話者の生年月日順に配列し、話のなかに出てくる年月の表記、年齢などは、主に話者の語りのままにした。ただし脚注は西暦を用いた。
- 一、現在では用いられていない国名、地名、団体名、会社名、学校名なども歴史用語として、できるだけ話者の語りのままとし、脚注で補った。
- 一、当時用いられていた呼びかた「女中」「女工」「未亡人」「小僧」「小使い」なども歴史用語として使用した。なお、わかりにくい方言は（ ）内に説明を入れた。
- 一、参考年表は、話者の生きた時代背景を補うために付記した。

井 郡



高座郡

甲

郡

# 愛甲郡行政区画図

津 久

1945年8月現在



## 凡 例

- 郡 境
- 町 村 境
- 1956年以降の厚木市
- 1956年以降の愛甲郡

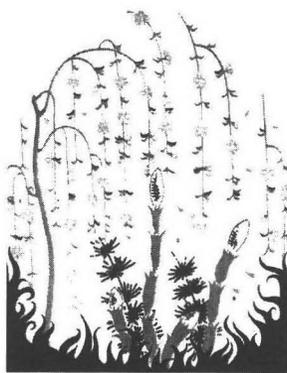
# 目次

『あつぎの女性20人』刊行に寄せて	女性史研究家	江刺 昭子	1
はじめに	さがみ女性史研究会	「さねさし」	3
凡 例			5
愛甲郡行政区画図			6
あつぎの女性20人			
「君が代」を英語で歌うおばあちゃん	前 場	コウ	12
民権家の祖父母を誇りに思う	大 下	トシ	22
これからが本番なんです	鈴 木	トヨ	30
肩上げを下ろした日から教壇へ	中 野	タエ	39
元気のみなもとは厚木高女	鈴 木	ゆき江	50
女優及川道子の付き人として	後 藤	フミ	60
番台は、お巡りさんの気分で	川 口	せん	71
無医村の医師から保健所長に	中 倉	千鶴子	81

老舗「菊屋政房」を継ぐ……………	山本多満	91
土建屋の社長を二六年……………	大野テイ	100
政治家の妻になろうとは……………	甘利千代子	111
想いを小説にして……………	小島すみ	125
二人の息子を満州の地に……………	清田とみ江	137
わたしを育ててくれた生活改善グループ……………	石井ミネ	147
母とわたしと、助産婦二代……………	金子喜美子	158
視覚障害者とともに……………	沼田美恵子	170
旅館は女商売……………	古根村喜代子	180
「お千代さんは働き者」といわれ……………	熊坂千代	191
磨けば光る心と教室……………	山田富美枝	204
厚木の花街を支えて……………	篠田道子	217
参考年表……………		230
主な参考文献……………		236
協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち……………		239



あつぎの女性20人



# 「君が代」を英語で歌うおばあちゃん

一九〇三（明治三十六）年  
九月二五日

中郡高部屋村日向生まれ  
厚木市七沢在住

前場ぜんば  
コウ

「レットウ ミカドス エンパイヤス サンド チリエル サフサンド ヤツ  
テンサフサンド ヤツシャルロー アンデスノー インザブルックレス ロツツ  
ストーン アメラズモク」。これ、なにかわかりますか。「君が代」ですよ。わ  
たしが小学校三年生、兄ちゃんが五年生くらいだったかな。どこかで聞いてきて  
「おコウよ、英語の君が代、聞かせんから覚えろよ」って言つてね。今でもよく  
覚えているの。平成一二年一二月、キングレコードが「君が代のすべて」を出し  
ました。その最初にわたしが歌う「君が代」が入っていたの。それで「君が代を  
英語で歌うおばあちゃん」なんてテレビや新聞に紹介され大変でした。

## 学校に行きながら手伝い

わたしは兄一人、弟二人、妹六人の一〇人きょうだいです。今、残っているの

### 英語の「君が代」

日向（地名）の大松の大尽と  
いわれる家の息子が、東京で  
英語の教師をしていて教えて  
くれた。

### 新聞記事

二〇〇〇年二月一四日付の  
『朝日新聞』に「厚木市の老人  
ホームで九七歳の女性が口ず  
さんでいたのを収録」と紹介  
されている。

はわたしだけです。「長女だ」という気持ちで親に反抗せず、よく言うことを聞きました。いつも妹たちの手本になるような心がけていました。朝は麦飯のため、つぶし麦、ひき割り麦のしたくをしました。

学校へ藁わらのかますに入った肥やしと教科書をやせうま（背負いっこ）につけ、背負って行ったりしました。帰りには畑に寄って手伝ったんです。田んぼでは苗とり、草とり、稲の茎のずい虫とりをし、手も顔も真っ黒になつて働きました。

親は農業のかたわら炭焼きをしていました。持ち山から、くぬぎやこならの木を切り出し、土窯や石窯で焼いていました。平地では、ごず焼きで家庭用の炭を作っていました。子どもたちも薪や炭を運んだり、箱や俵に詰めたりして手助けをしました。夜は一つランプの下、おふくろさんはポロとじくり、おやじさんは草履つくりです。おばあちゃんや炭俵を編んでいました。その縄を見ちゃんとわたくしで毎晩藁を叩いて緇ないました。食べていくため家中みんなでいっしょうけんめい働いたの。わたしは働くのが苦にならないのです。

勉強は好きだったから家の仕事は、言いつけられたことをさっさとやって教科書を読んだの。あした先生に指されたらすらすら読めるように。今も読書が大好きです。

子どもだから親の手伝いのあいまに、ほうぼう中すつとんで遊びました。かくれんぼ、陣取り、鬼ごっこ、お手玉など。とくに歌うのが大好きでしたね。子ど

#### 土窯

くぬぎやこならを焼いた。一コース一〇日くらいかけ一つ窯で二〇〜四〇俵の黒炭ができた。

#### 石窯

熱い石の窯に生木を入れ石窯を冷まさず燃やし続けた。毎日、取り出したので日窯ともいった。木の種類は選ばない。白い硬い上質の炭ができた。この炭焼きは、始めたら休めない重労働であった。

#### ごず焼き

平地に木を積み上げて燃やし土と灰をかぶせて家庭用のやわらかい炭を作った。

もの頃の歌で覚えているのは「お恵比寿さん」「梅」「田舎の四季」の歌など。

「国勢調査の歌」も覚えています。歌ってみましょうか。

「今年一〇月一日の 午前零時の現在で 日本全国一斉に 国勢調査が行われる。そもそも国勢調査とは 高きいやしき区別なく 雲居の空の上よりも 賤がふせやの中までも 問われた事は正直に わからぬ事はえんりよなく 聞けば教える何事も これぞ国勢調査員」

## 糸引きと和裁

尋常小学校を出て、上の学校（高等科）に行きたかったけど家庭の事情で、できませんでした。おばあさんが「女なんて学問ばかりしたってしょうがない。女芸のほうがい」って頑張つてね。四月一日の入学式の日には一日中泣いていました。

尋常六年卒業して、中郡比々多の高橋元次郎さんのところで、二年半で糸引きをしました。寒いなかでの水仕事で足を悪くしました。このあたりの医者では無理と言われ、東京の病院（東大の雑司が谷分院）で手術をし、半年ほど入院しました。

退院後まだ足が不自由なので、家でできる仕事を探しました。昔のことで新聞

### 国勢調査の歌

第一回国勢調査は、一九二〇年に実施された。国を挙げての大事業で、各地でサイレンや大砲が鳴り、お寺やお宮でも鐘や太鼓を鳴らし、お祭り騒ぎだった。広報のための歌も募集され、『国勢調査宣伝歌謡集』として出版された。

唱歌、和歌、川柳、都都逸、などで調査の趣旨や意義、調査票の書き方まで入ったものもあった。

### 女芸

女のする家事一般、付き合い方、礼儀作法など。この言葉はよく使われたそうだ。

はないし古本の広告で見つけたのが和裁です。東京の九段の学校で、裁縫講義録一二冊で卒業できるというのです。さつそく代金を送りその本で独学しました。大きな葉っぱで型紙を切る練習をしました。紙も、もったいなくてから。いっしょうけんめい勉強してやっと何か作れるようになりました。仕事がきて仕立収入を得ることができ、他の人に教えたりもしました。

当時、村に青年団もあつたけど、若いもんが集まるんで、お嫁にいく前に子どもなんかできちゃう人もいてね。まあちよつと不良がかつていて母からはあまりかわらないようにと言われました。でも娯楽が無いから青年の家を宿にして、義太夫語りとか浪花節とかを聞いたもんです。

そのうち足も良くなり、茅ヶ崎の別荘の仲働きもしました。藤沢の「徳増」という製糸工場で、糸とりをしていた大正一二年九月一日、関東大震災に遭い工場が倒れてしまいました。無我夢中で這い出し、仲間と大山（家の方角）に向つて三日三晩歩き続けました。平塚あたりでわたしを捜しに来たおやじさんにはばつたり出会えました。ほんとうに嬉しかった。背負つてきてくれたおむすびはうまかつたねえ。あのときの父の姿は今もはつきり思い出しますよ。

余震が続く朝鮮人が騒ぎをおこすというデマが流れた。男は竹槍とか、棒を持つて出るし、女は隠れて声も出さずにいるということで毎日が恐ろしく身も世もありませんでした。

#### 東京の九段の学校

大妻技芸学校をさしている。  
一九〇八明治四一年、大妻コタカが開いた裁縫私塾に始まり一九一四年、大妻技芸伝習所、二年後、大妻技芸学校となる。一年制の裁縫科卒業者には中等教員裁縫科検定の資格が許可された。

#### 「徳増」

一九〇九（明治四二年、藤沢町に設立された製糸工場）。  
女工、男工合わせて五〇人ほどの小企業であった。

## 大工に嫁ぐ

わたしは姉さん女房で三つ違いの数え年二三歳、夫の前場嘉平ぜんばかへいは二〇歳で結婚しました。夫は父親が四八歳のときに生まれた長男なのでとてもかわいがられ大事にされていた人です。当時、妹に縁談があり、また女は二四、五歳だといき遅れになるし、その上、わたしは足を痛めていたので周りが心配してくれたのです。

お見合いは口ききの親類の家でしました。「気に入ったら、お茶を飲んでくださいよ」と言われました。その頃はお茶を飲むのが承諾のしるしでした。先に来て嘉平さんの姿を見ていたので、お茶を飲みましたよ。それからみんなで一杯飲み、蕎麦を食べました。

あわただしく足入れをし、そのまま愛甲郡玉川村七沢（現、厚木市）の大工前場家の嫁となりました。大正一四年一月二三日でした。

「あそこは職人だから気楽で食いつぶれが無い」なんて言われたけどとんでもない。生業は大工仕事だけど自給自足の生活だから百姓仕事もやりましたよ。なにしろわたしが嫁に来たとき、しゅうともしゅうとも寝たり起きたりでほとんど何もできませんでした。それでも昔のしゅうともめは厳しくて嫁にくるとき、母が持たせてくれたちゃぶ台は使わせてもらえなかった。上下の区別なく一つ物

### 見合い

相手の氏・素性を調べたハシワタシ（ハシカケともい）が口ききをし、見合いをしたら結婚が決まった。その場で口固め（婚礼の取り決め）をし、ご馳走を食べた。

### 足入れ

結婚式の前に相手の家に泊り家の手伝いをした。そのため式するときには妊娠していることもあった。また相手の家に気に入られず結婚に至らないこともあった。

をつつくのを嫌がったんだろうね。

夫といえれば体格がよいのでたびたび兵役にとられました。でもわたしは、働くことが苦にならず和裁や薪とりもいっしょうけんめいしました。近所の人には「あの家は嫁が来てからよくなった」と言われました。

## 八人の子を独りで出産

昭和三年、長女を出産しました。同じ頃、実家の母も一番下の子を出産しました。昔はよくあつたことです。わたしがその子と自分の長女の着る綿入れなどを縫ったんです。次いで次女、長男、三女、四女、五女、次男と続き、昭和二三年の三男まで八人産みました。長女は夫の入隊の二日前の一月七日に生まれました。昭和八、九年には年子で長男、三女が生まれ、母乳がたらず困りました。お米をといで、すり鉢ですって、蕎麦がきみたいにして食べさせたり、砂糖や牛乳を少し混ぜたりしてね。寝るにも夜具の大きいのを縫って足のほうにも子どもを入れました。末っ子の三男は、昭和二三年、わたしが四四歳のときのお産でした。

出産の日は、雨で一日延びたお観音さんのお祭りでした。子どもたちはみんな祭りに出かけちゃって家には一番下の子とわたしだけ。急に産気づいて「どうも

産まれそくだ」と子どもをお宮まで使いにやりました。浸みないように畳を上げ藁を敷いて準備しました。取りあげ婆さんには前から頼んでおいたのに「おら、ひとり取りあげたこたあないから、おつかない」と言う。とにかく湯を沸かすように頼んだ。わたしは風呂敷包みに自分の着替えも赤ん坊の衣類もみんなしつかり入れ、ひろげさえすればいいようにしてあった。「どうやって取りあげるの」って聞くから「へその緒が赤ん坊のかかとの長さまでいったら、この麻（産気づいた時、麻の紐で髪を結んでおいた）で、ぎゅつと縛ってそこから一寸五分よくしごいて、またしつかり縛ってその真ん中で切ってそれから、のちのもの（胎盤）がどんなか下げてみて」と言いました。のちのものがしつかりしていたので「これは丈夫な赤ちゃんだ」とほつとしました。こうやって取りあげ婆さんに教えながら、しゃがんでお産をしたんですよ。祭りから帰ってきた子どもたちに「ほら生まれたよ」と布にくるんだ弟を差し出すとびつくりしてました。

当時、妹のトキが産婆の試験に受かったところなので、わたしはその妹の本を讀ませてもらって、いろいろ知っていたんです。なにしろ、七沢の山奥で病院も医者もありやしない。つわりになつてからちようど三か月かなと考えて産む時期を計算したんです。

子どもたちの学校の頃、授業の参観日には必ず一番先に行きました。子どもの言うことはちゃんと聞いて「忙しいからあとで」とは言わないようにしました。

取りあげ婆さん

大正初期まで農山村では、母親、しゅうとめ、仲人の妻、親類の女などが出産の処置をしていた。戦後でもこのあたりではこう呼んでいた。

どんなときも相手にしてやらなけりや子どもは知恵が伸びませんよ。近所の子どもたちもよく家に寄っては宿題をやつていきました。八人の子は今も全員元気で親思いできょうだい仲良く幸せに暮らしています。

## 夫を兵隊にとられて

夫は兵役甲種合格こうしゅごうかくだったので、たびたび兵隊にとられてましてね。昭和三年に東京赤羽大師団工兵第一大隊へ入隊したのが初めて、除隊後は、平塚海軍火薬廠かやくしょうに五年ほど勤めました。日本は満州事変、支那事変（日中戦争）、大東亜戦争（太平洋戦争）とずっと戦争でした。

主人も赤紙あかがみの召集令状を受け取りました。昭和十三年七月伊勢原駅から出征していきました。このとき、主人の両親はすでに他界していました。が、わたしには一一歳、九歳、六歳、五歳、二歳の五人の子どもが残されました。とくに長女が「かあちゃんどうするの。かあちゃんどうするの」と泣いたのが忘れられません。軍人留守家族には月額三二円もらえましたが、わたしと子ども五人が生活するんです。母親は泣いてなんかいられないでしょ。主人は中支を転戦していたようです。今もそのときの主人からの軍事郵便はとつてあります。母子家庭にも村の普請などの役は割り当てられました。「女、子どもは半人前だから、半人分は

### 甲種合格

徴兵検査により成年男子を、主として体位で分類した。甲・乙・丙が合格となった。

### 赤紙

兵役への召集令状が淡紅色の用紙に印刷されていたため赤紙と呼ばれた。

金を出したら」など辛いことも言われました。非農家でも松根油だ、芋だのと供出を命じられ、思い出しても苦しくなります。

戦後も食糧難で厳しい日々でしたが、家族みんな元気で主人もよく働き子どもは勉強をしました。家業の大工仕事も忙しくなり、長男の幸治が三代目として跡を継ぎ、昭和四四年、株式会社前場工務店へと成長しました。

主人は、意志が強く曲がったことが嫌いで、子どもたちもポコポコなぐつて躰けました。でも情が深く優しい人で誰にも好かれました。だから、もてましたんですよ。六〇年近く連れ添い、昭和六一年、八〇歳を目前に病で逝きました。

夫逝きて風かさこそと散る落葉

さびしさにすぎるものなし年の暮れ

これは、そのときの気持ちを俳句にしたものです。

## 『米壽の籠』を出版

子どもの頃から読むこと書くことがともかく好きでね。老健施設さつぎの里に入ってからでも、『朝日』とか『毎日』とか四種類くらいの新聞をいつも読んでますよ。日記は結婚して以来毎晩書いています。着当（大工の作業日誌）をわたしが全部書いていました。そのせいかね、長男も建築関係の本を一〇数冊出版し

松根油

松の幹の根を傷つけて採る油、航空機の燃料に使うとして、太平洋戦争末期供出させられた。

老健施設（老人保健施設）

一九八六（昭和六二）年に制度化された障害老人のための施設。初期の目的は病院退院後の在宅ケア移行支援であったが、現実には老人ホームと病院の中間施設化している。

「さつぎの里」

正式名は「老人保健施設さつぎの里あつぎ」。東名病院の系列で厚木市にある。

「ぬるみず」

正式名は「老人保健施設ぬるみず」。仁厚会病院の系列で厚木市にある。

ています。

俳句は七五歳頃、厚木の「寿大学」に参加して始めました。厚木市老友さつき俳壇に入っています。「たんと作ってたんと捨てるんだ」の気持ちで思いつくまま書きつけています。今までに五万首くらい作ったかね、俳句は心を落ちつけ張りのある日々を送らせてくれますよ。

八八歳で今までの手記と句集をまとめてみました。子どもたちがそれを『米壽の籠』として出版してくれ、みなさんから祝ってもらいました。その中の二つを披露しましょう。

幾波涛越えて米寿や秋も立つ

うま酒に酔いて唄いて踊りかな

「さつきの里」から「ぬるみず」に移りましたが、毎日リハビリをし、次々に来てくれる子どもたちに俳句を披露しています。

今年の九月で百歳ですよ。明治・大正・昭和・平成と生きてきました。

大櫂おのが落ち葉の中に立つ

コウ

百歳の祝にて



聞き取り

二〇〇一年五月九日、二五日

二〇〇二年一月二九日

二〇〇三年二月二五日

## 民権家の祖父母を誇りに思う

おわした  
大下 トシ

昭和五六年十一月二一、二二日、自由民権百年全国集会在、神奈川県民ホールで開かれました。全国から集まった民権関係の研究者などの偉い先生がたとともに民権家の遺族として壇上にあがり、大勢の人の前で紹介され、わたしはスターにでもなつたような気分でした。

わたしの母方の祖父は小鮎村（現、厚木市飯山）出身の民権家、やまかわいちろう山川市郎です。生涯を政治運動に捧げた祖父とその家族の長年の苦勞が、その日晴れて、報われた思いでした。

### 山川市郎・ゑん夫妻とその子どもたち

わたしが生まれたとき、祖父母はすでに亡くなっていたので、直接には何も知りません。母は祖父母のことをあんまり話さなかつたですね。「立派な父だつた」

一九〇七（明治四〇）年  
二月十四日  
愛甲郡小鮎村生まれ  
山梨県富士吉田市在住

#### 自由民権運動

一八七〇年代から八〇年代にかけて、国会開設や地租軽減を求めて、全国に広がった民主主義運動。神奈川県はその先進地域で、愛甲郡荻野村でも、天野政立や難波惣平を中心に民権結社が結成され、激しい運動を展開した。

#### 山川市郎

（一八四三—一八八九）

相州小鮎村生まれ。二〇代で討幕運動に加わり、四〇代で天野政立らと大阪事件に加担し、捕えられて獄中で病氣になり、証拠不十分で釈放されたが、二年後に亡くなった。

「母もなかなかしつかりした人だった」とは言っていますけどね。

祖母おばは、荻野新宿おしゆきで当時旅館をやっていた「かま屋」の娘でした。そこに祖父市郎やその仲間たちがよく集まっていたらしく、市郎とおんは、そのご縁で結婚したそうです。二男六女を生みましたが、女二人は幼い頃に亡くなり、残りの六人は、上から長女照てる、長男一賀いちが、次男泉せん、次女章しょう、三女完かん、四女巖いわです。

祖父は仲間の人たちと集会や資金集めのためにあちこち動いていたようですが、祖母は家を守り、子育てして、ときには仲間の人をかくまったりもしていたようです。そんな頃の話に、家に食べるものがなくてもちつともあわてずに、どこから調達してきたり、あるときは、庭の池の鯉をとってきて調理し、皆さんにふるまったとかと、聞きました。庭に大きな池があったのを私も覚えていますが、

主義主張をしつかり持つて、人のために何かをするのに自分の財産なんて考えないで、何というか、とても義侠心のある夫婦だったようです。

市郎が明治二二年に四六歳で亡くなり、残された家族は、迫害というとおおげさですが「あの人たちは違う人だ」ということで、肩身の狭い思いとか、つらい暮らしもあったらしいことをちよつと聞きました。その後子どもたちは、とても苦勞して勉強したらしいですよ。

長男の一賀は、親の汚名を少しでも挽回しようと、明治二六年に、一九歳で千島短艇行しまたんていこうに参加しました。一〇年にわたる極寒の地での生活でからだをこわし、

山川せん

(一八四八—一八九八)

天野政立の妻八重やおんらは、愛甲婦女協会を結成し、夫とともに、「国家の進歩に働くこと」を誓っている。しかし、夫の死後、貧窮の中で子どもを育てた。

「かま屋」

一五六九年の三増の合戦で北条軍と戦った武田軍の武士たちが甲州に戻らず、現在の荻野新宿のあたりに住みついた。農業のかたわら生活に必要な道具類も作り、かま屋は釜を作っていた。

千島短艇行

一八九三(明治二〇)年から約一〇年かけて、海軍の郡司成忠大尉が北方開拓と国防の目的で千島列島の調査、探検をした。

仙台に嫁いだ姉、照の家で二〇代で亡くなりました。山川家のあとを継いだのは次男の泉です。泉は慈恵医大の事務長となり、その息子の彦一ひこいちが藤沢で医者をしていました。長女の照は医者に嫁ぎました。次女の章、これがわたしの母ですが、まあ普通の平凡な主婦です。章は母ゑんの実家に後継ぎが無かったため養女にりましたが、市郎が亡くなったとき、ゑんとまだ小さい四女の巖が残されたので家にもどり、ともに暮らしました。三女の完も医者に嫁ぎました。四女の巖は、ゑんが亡くなって、長女照に引き取られ、小学校三年しか行つてないんだけどね、自分の力で勉強して赤十字の看護婦になり、婦長にまでなつたんですよ。

山川市郎とゑんの墓は、飯山の金剛寺こんごうじにあつたんですけど、泉の息子の彦一が亡くなったとき、その奥さんがキリスト教の洗礼を受け、お墓をキリスト教のお墓にしてしまつたんです。それまであつたものは「礼をつくして処理しましたから」と言われました。ですから、今、お墓はありません。

## 母、章とともに

わたしの母は市郎の次女章です。同姓の山川周治やまかわしゅうじと結婚しました。家は農家でした。父は酒におぼれ、母が苦労し、貧乏暮らしでした。わたしは山川市郎と同じところに生まれました。飯山観音の入り口の赤い橋のところ、今、桜寿司のあ

### 金剛寺

厚木市飯山にある曹洞宗金剛寺で、山川家の菩提寺。

るところです。わたしは女学校へは行けなかつたので、小学校卒業後、講義録でお裁縫を学び、その後教えていました。

わたしのきょうだいは兄一人、姉二人、第一人の五人でした。兄、弟ともに若くして亡くなり、あとを継ぐ人がなく、戦後の農地改革のとき、不在地主ということで、家屋敷を手放してしまいました。

母は昭和二九年に七七歳で亡くなりました。わたしは、二五歳で天下正義まさよしと結婚してから、厚木の幸町でずっと母といっしょに暮らし、ずいぶん世話になりました。わたしの次女が生まれたとき、すごく太い声で泣いたんです。その声を聞いて母が「この子はあの景山英子かげやまひでこさんみたいな女傑になるようだ」と言つて「英子さん」「英子さん」って言うんです。それで英子と名づけました。思い出してみると、母はよく「女傑だった英子さん」「男の中に一人入つて偉いよ」などと話してくれていました。山川市郎の家にも何回か泊まれたようですね。母の心の中に景山英子さんに対する思いがずっとあつたんでしょね。今こうなつてみるともう少しくわしくきいておけばよかつたと思いますけどね。

母は新聞なんかよく読んでましたね。ラジオも聞いてました。「自由党といっても、今の自由党とあの頃の自由党とは違ふんだよ」なんて言つたりしながら。口には出しませんが、ほんとうは、女も政治に関心を持つたりしなきゃいけないんだと、思っていたかも知れません。おゑんさんの生き方を生活の中で感

景山英子（福田英子）

（一八六五—一九二七）

岡山県生まれ。一七歳のとき、岸田俊子の演説を聞き自由民権運動の道に入る。情熱的な行動家で女性解放をめざし、女でただ一人大阪事件に加わる。

じとつていたのかなと思います。

終戦後、婦人参政権が実現しましたね。母は一回目の選挙には行きませんでした。二回目するとき、わたしは母が行きたい気持ちがあるような気がしましてね、不在者投票をすることにしました。当時主人が役場へ出ていましたので手続きしてくれました。母は一字一字いっしょうけんめい書いていました。母にこの投票をさせてあげられたことを、今考えてもいいことをしたなと思います。

## わたしも政治が好き

わたしは市郎の孫でも外孫なんです。昔から政治のことが好きでね、何かことがあると、すぐ「わたしは孫です」なんて言って出ていました。

民権百年祭が行われたときは、胸を張って行きましたよ。式典のあと会場で、大勢の新聞記者に囲まれて、質問せめにありました。でも、山中城焼討ち事件とか大阪事件とかに関係していた人は、名乗らない人が多かったです。これをきっかけに、それまで肩身の狭い思いをしていた関係者の子孫たちも、自ら名乗り出るようになったそうです。

このとき、わたしは、記念に何か残しておきたいと思い、わたしなりに歌を詠んで石に刻み、飯山の飯盛山めしもりやまにあったお墓へ行く道の端に置きました。その歌は

### 婦人参政権

一九四六(昭和二一)年四月一日、新選挙法による戦後初の衆議院議員選挙が行われた。このとき初めて女性も参政権を行使した。翌年四月には、自治体の首長選、二回目の総選挙、第一回の参議院議員選挙が行われた。

### 山中城焼討ち事件

一八六七(慶応三)年、薩摩藩浪士隊が萩野山中藩陣屋を焼討ちし、武器や軍資金を奪った。若き日の山川市郎もこれに加担し捕えられ、九死に一生を得たことは、この地方の語り草となっている。

ね、「百年前 自由民権叫ばれて 苦難に生きし 祖父は尊し」と、いうのです。今思えば、大畑哲先生<sup>おわはたさとし</sup>にでもご相談して、ちゃんと立派な記念碑でも建てておけば良かったと思います。

その頃、大畑先生が出された本の中に「祖父を思う」という文章を載せてもらいました。もし、祖父が長生きしていたらね、大政治家とか実業家とかにならないで、皆さんから「親父、親父」って慕われていたんじゃないかとわたしは思います、と。祖父もきつと喜んでくれているだろうなと思いました。

## 川柳に想いを

昭和四九年、厚木市が、親孝行都市宣言をしました。その頃、親子かるたつていうのを募集しましてね、勇気を出して応募してみたら、三点入選したんですよ。

叱るのも聞くのも上手なお母さん

無口でもズバリ一言お父さん

命日にあげる感謝のお線香

その後、川柳の会にはいりました。ずいぶん多くの句を詠みましたが、覚えてるのは、たとえばこんなのです。

これだけは総理も一票私も一票

## 大阪事件

一八八五（明治一八）年、自由党左派が企てた朝鮮改革運動で、爆弾をもって渡韓準備中に逮捕され、大阪で裁判が行われたので、こう呼ばれている。愛甲郡自由黨員も資金カンパなどで協力して、一〇人が連座した。国事犯ということで、遺族は肩身の狭い思いをさせられた。

## 飯盛山の石碑

金剛寺から移したと思われる古い墓石とともに、山川市郎を偲ぶ歌が刻まれた石碑が建っている。

## 大畑哲

（一九二九―）

歴史家。神奈川県中央の自由民権運動についての研究を重ね、『相州自由民権運動の展開』などの著書がある。元県立厚木高校教諭。

投票所つなく孫の手あたたかい

一票の重み知つてる車椅子

まだ厚木にいる頃、近くのデイサービスセンターに週一回通っていました。長年川柳をやっていたことで、センターのスタッフにすすめられて、わたしがアドバイザーになり、月に一度、川柳の日ができました。毎月テーマを決めて、デイサービスの利用者とスタッフがいっしょに楽しく川柳作りをしました。はじめのうち、あまりきびしいことやむずかしいことを言うのは、控えめにしていました。が、皆さんの意欲を感じて、だんだん熱が入っていききましたね。

秋の厚木市民文化祭に団体で応募し、入選した作品が展示されているのを皆で見に行つたのはいい思い出です。

四年前、長男の住むここ、富士吉田に来てからは作品は出していませんが、川柳の会の冊子は送ってもらっています。今までの作品を本にするとか、自分でまとめてはいませんが、ためてはあるので、わたしが死んだら、娘でもやってくれるかなと思います。どうだかね。

最近川柳もほんとにたまにしか作れません。向井千秋さんが宇宙に行かれたでしょ。そのとき、これは短歌ですが、千秋さんが上の句を作り下の句を募集されて、わたしも出しました。残念ながら覚えていないんですけど。その後作つた川柳が、『山梨日日新聞』の文芸欄に載りました。



自宅にて（九四歳）

うたごころ宇宙と結ぶすばらしさ

政変に二世三世にぎにぎし

これはね、去年の自民党の総裁選挙のときに作りました。

わたしはね、政治のことは好きでね、テレビはよく見えています。いままで一度も棄権したことがないので、今、これくらいの状態なら、選挙があれば車椅子で連れていってもらおうと思っています。あと何回行けるのか楽しみにしています。

聞き取り

二〇〇二年四月二日

## これからが本番なんです

すずき  
鈴木 トヨ

自分もおしゃれをしたいし、人もきれいにしたいといつも思っています。九〇歳は過ぎましたが、まだまだやることがいっぱいあるんです。

テレビを見たり、音楽を聴いたりするのは嫌いです。とにかく働くことが好きなんです。洋裁や料理などをみんなに教えてやりたいのです。まだまだこれからがわたしの本番です。

### 父のおみやげ

父は今でいう単身赴任のようなものでした。東京で世帯を持ち、使用人を何人かおき、桶屋さんをしていたそうです。ところが母は厚木に住む夫の親が、年老いたため、面倒をみなければならなくなつたのです。父は仕事の関係で東京を離れることができず、母だけが兄二人と姉を連れて厚木へ来たのです。無理やり夫



九〇歳の頃

一九一（明治四四）年  
二月九日  
愛甲郡厚木町生まれ  
厚木市中町在住

婦別れをさせられたんです。つまり別居生活ですよ。ですからわたしは厚木で生まれました。きょうだいは六人でわたしは五番目です。母は、いつもきれいな字で長い長い手紙を書いていました。父に送ったのでしょうか。このような生活が四年も続いたのです。

大正七年、わたしが八歳のときのことです。東京で商売をしていた父がおみやげに改良服とでもいうのでしょうか、洋服を持ってきてくれたんです。着物を洋服ふうにアレンジした物だと思います。さっそく学校へ着ていくと、その日の夕方、友だちのお母さんたち何人かがうちに来て「あのような物を着させて学校へよこさないください。うちの子も隣の子も着たいといって泣くんです。お宅はうちより貧しいのに、どうしてあのような物を着せるんですか」と怒鳴りこんできたのです。母はぺこぺこ頭を下げるだけ。「お母さん、どうしてそんなに謝るの。悪いことをしていないのに」と母にくつてかかった。そのときは今もはっきり覚えています。別居してまでも、しゅうとめの面倒をみるような優しい母だったので、争いごとが嫌だったのでしょうか。こんな母の力になるのはわたしだと思いました。

小学校は厚木町立厚木尋常高等小学校です。今の厚木小学校ですね。わたし小学生の頃、足がとて速かったらしいので運動会は大好きでした。地区で行われた競技会には、先生の自転車の後ろに乗せていただき、代表で隣町まで遠征し、

優勝旗やカップをもらってきましたね。負けず嫌いな性格というか自立心はこの頃芽生えたらしい。

## 長年の夢だった洋裁学院

本厚木の駅前に相武自動車株式会社というのがありました。今でいう神奈川中央交通株式会社です。昭和二年、一七歳だったわたしは事務員として就職しました。女がお勤めということはほとんどありませんでした。職業婦人のはしりだったんです。わたしも車の運転をしたかったです。運転手が将棋なんかさし始めちゃって「次はお前行ってこうよ」なんて冗談を言つてのんきな会社でしたよ。二年ほど勤めてわたしは辞めました。

人さまの洋服を縫ったり、下宿している若者たちの面倒をみているうちに、どうやら学費の見通しがついたので、昭和九年、二四歳のとき長年の夢だった東京の洋裁学院へ行くことに決めました。その頃、おばが早稲田に住んでいましたので音羽洋裁学院を紹介してもらいました。

この学院は護国寺の近くにあったんです。その頃はまだ着物を着ている人たちがばかりでしたが、わたしはさっそうと洋服を着て通いました。運のいいことに、その理事長さんが「あら、あなた厚木、わたしの故郷も厚木なんです」とおつ



洋裁学院へ通っていた頃

相武自動車株式会社  
一九二一年創立。一九五一年、現在の神奈川中央交通株式会社となる。本社は平塚市八幡。

しゃつてずいぶんかわいがってもらいました。若いお嬢さんたちが多かったですね。三井、三菱さんのお嬢さんもいっしょでしたよ。

昔のことですから、何年行つて卒業なんてことはなく初めに六か月、またやりたかつたら六か月という具合でした。裁断科というのもありました。免許なんてものはないんです。洋裁は技術をしつかりと身につければよいのです。みなさんとても熱心でした。

入学するとまもなくのことでした。わたしの家に下宿していた横浜出身の鈴木<sup>すずき</sup>正男<sup>まさお</sup>と結婚しました。正男は関東学院を卒業し、東京の保険会社に勤めていました。厚木への出張もよくあつたようです。

## 洋裁店を始める

わたしは一応師範科を昭和一一年に卒業しました。と同時に厚木の元町で洋裁店を始めました。その頃厚木では洋服を着ている人はほんのわずかでした。近くの人たちに頼まれて初めのうちはブラウスやスカートを縫いました。ずいぶんたくさん縫いましたよ。自分たちも教えてもらつて縫えば着れるということがわかり、若い女性たちに大変喜ばれました。翌一二年には、厚木洋裁学院を洋裁店の近くに開設しました。どこから聞いたのか山形からも住みこみで何人か来ていま

厚木洋裁学院

一九三七（昭和一二）年四月、  
元町七一―四番地に開設

一九五〇年に鈴木洋裁学院と  
改称。

した。

昭和一五年に長女が生まれ、一七年に次女が生まれました。太平洋戦争が始まると横浜の夫の両親が疎開してきたり、大きい家でしたから兵隊さんを強制的に六、七人割り振られたりして家の中は大混乱でした。一八年には夫が出征してしまつたのです。育児どころではありませんでしたが、みんなが助け合つて育ててくれました。夜も寝ないで働き、ミシンの上でうつ伏せになり一夜を明かしてしまつたこともたびたびありました。娘たちが少し大きくなってから「お母さんの割ぼう着姿や台所でのお仕事をしているところが見たい」なんて言われてしまつたこともありましたね。

戦争が終わり、マツカーサー元帥とともにアメリカの兵隊がたくさん日本に上陸してきました。座間にもキャンプができ大勢来たようです。厚木でもわたしの家から少し離れたところにMPの詰め所ができ、どうなることかとても不安でした。

ところが、その座間のキャンプがいち早くわたしたちを必要としてくれたのです。「アメリカ人が来た、早く逃げろ」ってみんなが騒いだとき「逃げるんじゃない、俺が話す」と言つて、しゅうとは見上げるような大きな外人を相手に英語でべらべら話していました。「おじいさんの英語はよくわかる」と言つてくれたそうです。しゅうとは横浜で初めての西洋料理店の支配人をしたことがあつた

MP

ミリタリーポリスの略。アメリカ陸軍の憲兵。闇市の取締りや軍規違反の米兵の取締りなどをした。

り、病院や映画館を経営したこともあるそうで、昔とったきねづかともいうのでしょうか、英語が達者でした。

その後、彼らからの洋服の注文をよくとってきてくれました。アメリカのスタイルブックなんかもいつしよに届きました。近くに綿貫さんという刺繍の専門店のお店がありましてね。わたしたちの作った洋服に米兵の喜びそうな牡丹の花や龍の柄を刺繍してもらい、アメリカへのお土産にたくさん買ってくれました。しゅうとはお店に来る女の人から頼まれて米兵宛てにラブレターを書いてやったり読んでもやったりして、大変喜ばれチョコレートやチーズなどたくさんもらいました。夫のいないあいだも目がまわるほど毎日が忙しく、寝る間もないくらいよく働きました。でもわたしは働くことが少しも苦になりませんでした。

## ピンクの校舎

昭和二五年、四〇歳になった夫は今までの会社を辞め、学院の運営に協力してくれることになりました。そこで夫の姓の鈴木をとり、鈴木洋裁学院と改名しました。この年の九月、神奈川県知事の認可を受けたのです。学院は元町から中町一丁目に進出しました。洋裁華やかなる時代がやってきたのです。生徒数もだんだん多くなり、午前、午後、夜間と三交代で授業をしたこともありました。その

アメリカのスタイルブック  
敗戦後、日本の女性は戦争中のモンベから解放され、欧米ファッションに憧れた。とくに『セブンティーン』『アメリカン・ヴォーグ』『ハバス・バザー』などのファッション雑誌はひっぱりだこだった。

頃の本厚木駅前周辺は、田んぼばかりでポツンとひとつピンクの建物はひときわ目立って見えました。近隣の女子が自転車で大勢通ってきました。農民文学作家和田伝わたでんの小説『鯛雲いづくも』の主人公の娘が通っていたとされている洋裁学院は、わたしの学院のことを指しているのです。

近くの厚木ナイロンとか、ソニーとか綾羽あやば紡績などには女工さんがたくさんいました。女工さんのお仕事が終わってから工場の一室を貸してもらい、洋裁を教えました。半原のほうにも糸とりの女工さんがいたので、そちらのほうへも行きました。つまり出張授業です。店には専門の縫い子さんを置き、出張に出る者には先生としての道をしっかりと仕込みました。

生徒募集の苦労話はたくさんあります。お尻の皮がむけるほど夫と自転車で中学校回りをしたり、戸別に家庭訪問もしました。厚木市内はもとより愛川町の中津や半原、清川村の煤ヶ谷、宮ヶ瀬あたりまでも行きました。よくやったものだと自分でも感心しています。これも今となっては楽しい思い出のひとつですね。

夫の協力が得られるようになってから、時間に余裕ができたので、厚木から通学に便利な新宿の文化服装学院に入学し「学院の経営はこれでいいのか」を確かめるため、生徒になって考えてみることにしました。当時、わが国の洋裁学校は、新宿の「文化」か、目黒の「ドレメ」かという時代でしたが、わたしは信念を持って文化の連鎖校に入れてもらいました。

## 『鯛雲』

愛甲郡南毛利村出身の農民文学作家の和田伝（一九〇〇～一九八五）の作品。農地改革が行われた当時の厚木の農民の姿を描いた。一九五八年、映画化され評判になった。

## 厚木ナイロン

厚木ナイロン株式会社。

所在地は海老名市。一九四七年、堀禄助が厚木編織株式会社を設立。一九六〇年に厚木ナイロンとなる。日本で初のシームレスストッキングを開発。寮生が多かったため、花嫁修業として和裁、洋裁などの講座が設けられた。

## ソニー

ソニー厚木テクノロジーセンター。所在地は厚木市旭町。一九六〇年に設立されたVTRカメラ、ビデオ等の電気製品の生産事業所。

この年から調理学校も始めることにしましたが、わたし自身も資格をとるため四時半にお仕事を切り上げ、武蔵野のクッキングスクールまで通いました。四二歳のときでした。有望なかたがいると、わたしの学院に引き抜いてきたこともありました。その後、クッキングスクールやタイピスト学院などを併設し、文部大臣より高等学校の技能教育の施設として、いち早く指定を受けました。長年ともに学校教育に携わってきた夫正男は、昭和五六年、七一歳で、この世を去りました。

## いつも前向きに

わたしはさいわいに、いい仲間がたくさんいるんです。家族にも大変恵まれました。長女も次女もそれぞれ世帯を持っていますが、家族ぐるみでわたしの学校経営に参加し協力してくれています。「文化」の連鎖校に入れていただいたお陰で、日本中の洋裁学校の校長先生と知り合うことができました。今でも年に何回か集まりがあり、いろいろな意見交換をしています。人の話を聞くばかりではいけません。自分でも話題を提供し、みなさんに聞いてもらったり検討してもらったりしています。参考になることもたくさんあるんですよ。

今わたしが気をつけていることは、まず規則正しい生活をし、自分で自分のか

### 綾羽紡績

所在地は海老名市中新田。  
一九四六年創業の山城織物（株）が、その後綾羽紡績となり、絹、人絹織物を生産した。現在は綾羽株式会社として産業用繊維を生産している。

### 文化服装学院の連鎖校

文化服装学院は、一九四八年に文化服装学院連鎖校協会を創設し、全国に文化式洋裁を教える学校の設置を認め、組織化した。洋裁ブームののり、加盟校は五一年には二〇〇余校、六三年には三三四校となった。

らだを守ることです。大勢の人を使っていますので、人の和を大切にしています。もちろん生徒一人ひとりをも大切にし、何とか社会に出て暮らしていけるようにと常に思っています。主人が亡くなってから始めた写経は今でも続けています。毎朝目が覚めるとすぐに書くのです。不思議なことに落ち着いて書くことによつて、その日の調子がわかるんです。たくさんまとまると三田さんだにある菩提寺の清源院せいげんいんへ納めにまいます。

今年の四月、学校法人鈴木学院の中に、もうひとつ厚木中央高等学校が誕生し再出発をします。「これでいいかしら」「これでいいかしら」といつも反省しながら前向きに歩んでいます。まだまだわたしにはやることがいっぱいあるんです。これからは、本番なんです。



●平成13年4月 厚木中央高等学校開校。

聞き取り

二〇〇一年二月二二日

二月二六日

## 肩上げを下ろした日から教壇へ

なかの  
中野 夕エ

一九一一（明治四四）年  
二月一日  
横浜市本牧生まれ  
厚木市戸室在住

三八年間の教師生活を昭和四二年三月で終えました。五五歳のときです。わたしの父、母方の叔母、そして二人の弟とその連れ合いも教師でした。さらにわが家でも夫、わたし、息子夫婦も教師でした。子どもの頃から学校が好きで、ふり返ると九一歳のこの年まで、いろいろな形で教育の世界とつながってきました。師の道にはげみていく日つつがなく果たして心なごむ嬉しさ

### 寺の子として育つ

わたし、本当の生まれは横浜の本牧なの。水道の水で産湯を使ったのが自慢ですね、生年月日も、明治四四年二月一日が事実です。でも戸籍上は翌年の三月一六日南毛利村生まれです。だから干支を聞かれると亥か子か迷っちゃうのね。妙のはずが夕エと届けられていたりで、ともかく昔はおおらかだったんでしょ。



聞き取りの日、自宅にて

数え年齢なので、当時は入学とか出征とか結婚を思いやつて届出をずらしても許されたんでしょう。

一歳にもならないうちに父の実家のおじいさんが亡くなつたの。父は当時、横浜の尋常きたがた北方小学校の先生だつたけれど、実家の浅間山せんげんやまの興教寺こうきょうじを継ぐために次男でしたが厚木に呼び戻されました。浅間山のおじいさんは大磯の小磯から住職としてやつて来て、浅間山をもじつて浅摩あさまと名乗つたようです。興教寺は禅宗(曹洞宗)なのでその頃は表向き妻帯が認められていなかったのね。まあ、それでも現実に子どもは生まれたの。その子どもたちは籍親せきおやになつた檀家の姓を付けられました。初め、父は山口でしたが途中から浅摩近三あさまぢかぞうとなつたそうです。興教寺は畑もあつたけど、檀家数がそれほど多くなかつたので父は住職をしながら、厚木でも小鮎小学校とか玉川小学校などで教員を続けていました。

母はハルといい、三色みいろに声を使いわけた人ですよ。檀家さんに対してと、父の学校関係と、家族にと三通りの対応をパツパと切り換えたんです。見ていてすごい人と思ひましたね。

わたしは長女で女一人だから大事にされましたよ。下に弟二人の三人きょうだいです。寺の周りをかけ回つて遊んでいました。里芋の葉っぱの上のところの朝露がのつていてしょう。それを暗い穴蔵に入れておくと、いつか真珠になると聞いたの。毎日穴をのぞいたけれど真珠になつていないの、でも楽しかった。

#### 籍親

明治のはじめ頃まで、地方の寺では住職の子どもを公にしないため檀家の籍に入れることがあつた。このことはあいまいに処理されたため、正確なことは不明。

今、それを絵手紙の画題にして遊んでいます。

## 生き生きと過ごした小学生時代

大正七年、愛甲郡立尋常高等南毛利小学校に入学しました。校庭の大楠は堂々と立ち、あの頃も今も学校の自慢です。頼もしく見上げたものです。

小学校の六年間の「学校家庭通信簿」をずっと大切にとつてあります。こんなに黄ばんでるでしょ。一番先に教育勅語、戊申詔書があり、毎日ふりかえつてみることに、毎日気をつけること、家庭において注意せられたる事柄など細かく指示があつて、威厳のある通信簿です。

わたしはからだは小さいけれど欠席も少なく、まあ優等生に近かつたのかな。この通信簿の父の族籍職業欄に平民、小学校教員と書いてあるけれど、この頃はまだ士族とか平民の区別があつたのかね。今になつて不思議に思いますね。

学校は成績別で甲、乙組に分かれ、その中が男女に分かれていました。わたしは甲組でその中で女の子は一〇人も女学校に入ったんです。男の子の中で教科書を貸してあげたりしていっしょに勉強した子がいて、その子が県立厚木中学校（現、厚木高校）に受かつたお礼にはんこを二つ作つてくれたの。一つはハートに妙、もう一つに浅摩と彫つてくれました。よく覚えてないけれど片岸に下がる「さ

### 教育勅語

一八九〇年発布

天皇は日本民族の家長であり、父母への孝行と天皇への忠義は同じという考えに基づく国民道徳を掲げ、日本中の学校で教えこまれた。

### 戊申詔書

一九〇八年発布

国民が精神的に奮い立つて國運の発展をはかるようにと、国民全般に向けた天皇の文書。

### 族籍

明治になつて士農工商の身分制度はいちおう廃止されたが、士族、卒族（のちの華族）、平民などの族称がつけられ戸籍に載つた。一九一五年に族称を記載することは廃止された。しかし、さまざまな面で族称は残つた。

るげいと」のあたりでもらったんじゃないかな。いろいろな紙にそのはんこを押したのを覚えています。そんなつもりでなかったけど、今思うと初恋っていうのかな。

小学校六年生のときの関東大震災は何より怖かったです。九月一日の始業式の日だから、昼前に帰宅して、両親も家にいたし本堂もつぶれず、家族みんな無事でした。でも村では何軒も家がつぶれ、戸室では土蔵の側にいた友だちが亡くなりました。南毛利小学校は大丈夫だったけど、小鮎小学校はつぶれたとあとで知りました。あの恐ろしさは決して忘れられません。

## 卒業証書は厚木高女の第一号

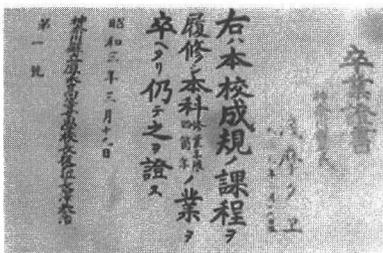
大正一三年、神奈川県立厚木実科高等女学校入学。設立時及川にあつた校舎も、わたしのときは松枝町に移っていたので浅間山から通いました。

本科二〇〇名、選科三〇名の定員で、選科は裁縫が主でした。この学校は四年制でしたが、途中の昭和二年、県立厚木高等女学校に改称されました。だからわたしは入学時は一回生ではないけれど、昭和三年には厚木高女第一回卒業生になりました。卒業証書番号は第一号なんです。成績順なんて冗談言っているけど浅摩だから、本当はあいいうえお順で一番なの。そのときの友人が今も四人残って

さるげいと

山林が迫っているため猿が出没し、猿啼とか猿谷戸とか呼ばれたことからきた地名。「さる」が「去る」に通じることから婚礼のときは避けた所。

### 第一号卒業証書



いてときどき会うんです。鈴木ゆき江さんもその一人です。

厚木高女の一回生には、入学時から制服がありました。わたしたちは卒業まで和服で、袴のすそに白線を一本つけたのをはいていました。この白線が何より誇らしかったのです

第一号だけあって、せつかちに最短距離で教師になりました。わたしの高女時代は、いわゆる昭和恐慌のときで就職難でした。師範を出れば必ず職に就けるし学費も支給されます。それに身内にも教師が多いので師範学校に行きました。

昭和三年、神奈川県女子師範学校二部に入學しました。校舎は横浜の根岸町立野にあり、寮に入りました。ここでも制度の変わり目でわたしのときまでは一年修業で免許をもらえたのです。この一年と出生届の一年とで、他の人より早く一八歳で小学校教員免許を手に入れました。

あの頃は肩上げは一九歳の厄年に下ろすものでしたが一八歳のわたしは先生だと気負って羽織の肩上げをとり、袴をはいて初めての学校に赴任しました。

当時熊が出ると言われた煤ヶ谷村の尋常高等煤ヶ谷小学校でした。煤ヶ谷は木材と炭焼きの山村でした。生徒は男女混合で一学年一クラスの小さい学校でした。僻地手当て（五円）も出るような寂しい山の中に下宿しました。たまに杉山金吾先生（のちの厚木教育長）などの自転車に乗せてもらって往き来しました。新米教師でも当時始まったラジオ体操の講習会に出してもらいました。それを、ほか

#### 昭和恐慌

一九二七年に銀行への「取り付け」騒ぎから始まった金融恐慌に続き、一九二九年にニューヨークの株の暴落から始まった世界大恐慌が日本にも及んだ。物価が下落し、あらゆる産業が打撃を受け失業者があふれた。

#### 神奈川県女子師範学校

一九〇七年設立。本科第一部は高等科卒業生、本科第二部は四年制の高女卒業生が入学した。第二部は定員四〇名で修業年限一年であったが、一九三二年、二年に延長された。

の先生や児童に教えたの。ちょっと誇らしい思い出です。

それでも、まだ一八歳です。ともかく家が恋しくて、一年で厚木小学校に移してもらいました。昭和五年のことです。

翌六年には満州事変が起こり教科書も「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」に変わってきました。戦地への慰問袋（児童の絵や習字を入れた）のお札にヘイタイさんからの「日支交戦・満州事変」という名前の写真セットが送られてきました。今も持っています。あの頃こうした交流が勧められていましたが、みんなどんな気持ちだったのかね。男の子は大将になるのが夢だし、二〇歳のわたしもともにいつのまにか少国民しょうこくみんの世界に取り込まれていったのです。

## 大切な思い出、城ヶ島

昭和一一年には南毛利尋常高等小学校に移りました。主人、中野鉦次なかの かねじはこの学校での同僚でした。あの人は妻田の人で、厚木の蚕糸検定所に勤めたくて勉強していたのです。試しに小学校教員検定試験を受けたら合格してしまい学校の先生になった人です。学校といつても他の社会と同じ中にはいいところだけさらって行く人がいるでしょう。あの頃小学校連合の歌と踊りの発表会がありました。わたしに練習だけを担当させて、本番ではやっぱり自分だけ出て行った先生が

### 少国民

第二次大戦中は日常的に使われた。年少の国民の意から総力戦の担い手の一員の意味に変わった。

いたんです。わたしは悔しくて、つい涙ぐんだりしたことがあったの。そんなときあの人がかばってくれたのです。それがまあきつかけですね。

初めて二人だけで出かけたのが、城ヶ島。厚木の中ではまったく別行動で、駅でやつと会え、電車に乗って初めていつしよに座れました。たつた一回の城ヶ島デートよ。二人で舟に乗りました。それ以上は内緒にしておきましょう。あの人は、学校では話せないの手紙や短歌、詩でやりとりしました。手紙はあとでお墓の前で全部焼いてしまったので、何が書いてあったかよく覚えていませんね。ほんとうですよ。

師範の免許を持たないと学校では、はばがきかないので、結婚前に主人は師範の専攻科へ行きました。一年後そこから川崎の高津尋常高等小学校へ赴任しました。教員の同僚結婚不可なんて雰囲気の時代でしょ、付き合っても噂のたたない一年くらいの速さで結婚を決めました。わたしも厚木から川崎の御幸尋常高等小学校に転勤しました。それでも評判になり、当時の教え子には今もからかわれます。

昭和十二年一月二十八日だと思えますが厚木で結婚式をしました。翌、一三年九月五日、息子幸夫誕生。幸は御幸小学校の一字です。実家の者に川崎に来てもらって出産し、たぶん二週間もしないで学校に戻りました。昼間の育児は、小学校を出たばかりの子守さんに頼みました。月額五円だったと思います。当時二人の月収は、夫四二円、わたし四〇円計八二円ですよ。家賃は一七円だったし、生

#### 教員の同僚結婚不可

一九三六年に東京でこの通達があった。それ以前三一年には県町村幹事会で有夫女教員のクビ切り陳情があり、女教員が家庭を持つことへの風当たりは強かった。

活はかなり良くそして幸せな時代でした。

ところが紀元二六〇〇年でにぎやかな昭和一五年一月一五日、主人はたいして悪いもせず病死しました。息子は一歳半ほどで伝い歩きがやつとの頃でした。短い結婚生活でした。あまり短かったので、主人がどんな人柄かも見極めきれなかったね。お酒も飲まないし、意志の強い真面目な人でした。そしてリンドウの花が大好きでした。夢にでもたまには出て来ればいいのにね。「リンドウ香る秋の山 君を慕いて仰ぐ空」なんて作詞して、「愛染かつら」の節でわたしは一人で歌っていたのね。

## 妻、母である女教師たち

結婚している女の先生は、妻として家庭もあるし、妊娠して母親にもなるでしょう。その上で仕事をし、一人何役もしているのです。とにかく校長なんかから嫌がられましたね。女教師だって日曜日の日直もし、二人組で宿直もすることがありました。産前産後の休みも充分にとれず、ある人はぎりぎりまで体操を教え、産後は子守りに学校まで赤ちゃんを連れて来させ、おっぱいを飲ませていました。わたしの親戚の先生は雪の日に小使い室で出産してしまいました。子どもには学校の「学」の字を校長がつけました。元気に育ちましたけど。

### 女教員の産休

一九二二年に文部省は産前二週間、産後六週間の休養を訓令している。しかし、補助教員制度がないなか、ほとんど実行されず、女教師の流産、異常出産が多かった。

### 小使い室

現在の用務員室。

主人が亡くなったあと、わたしはまだ川崎の学校にいたので息子を厚木の実家に預けました。両親も健在だったし、弟の嫁さんもまだ子どもがいなかったのでみんなにとっても大事に育ててもらいました。土曜日に飛んで帰り、月曜日の朝早く戻る生活をしました。子どもはかわいい盛りだったから辛かったですね。でも、職業を持ち収入があったから頑張れたと思いますよ。

川崎の駅で、真珠湾攻撃の放送を聞いたんだから、昭和一六年はまだ川崎の御幸小学校にいたんですね。翌年厚木小学校に戻りました。

産めよ殖やせよの時代でしょ。親からは再婚をすすめられました。ある同僚は子持ちの未亡人で再婚し、そこでまた子どもが生まれたの。複雑な家庭になって、ずいぶん苦労していました。だからわたしは息子を抱えて「ぜったい嫌だ」と断ったの。再婚しなくて良かったですよ。

厚木に戻ってからは、実家で居候よ。子どもは、弟の子たちからはお兄ちゃんと呼ばれて育ちました。今でもあの子、おふくろの味より浅間山の味を恋しがるほどです。わたしはおかげさまでとても環境にめぐまれていたんですよ。世間の人から「苦労されたのでしょ」と言われたくないの。

戦時下の学校ではどの教師も同じでしょうが、教え子を思いともかく夢中で過ごしました。残念なことに煤ヶ谷小学校の教え子の中には戦死した子もいました。でも小学校の女組の担任が主でしたので、教え子を戦場に送る辛さはあまり経験

しなくてすみしました。高等科の女生徒を相模原工廠への勤労働員に引率したことはありました。軍の伝書鳩の世話をさせられていましたね。

昭和三〇年代の厚木小学校は、愛甲郡では一番大きい学校で、女教師が三分の一近くいました。女は六年生の担任にはめつたにしてもらえず、主任になれるのは家庭科だけ、ほとんど男が学校社会を牛耳っていました。

あるとき、女の年取った先生が五人ほど校長室に呼ばれました。「あなた方のよ  
うな人はどこにも取り手がないよ」と暗に退職を勧められました。今だったら校長、教頭になれるような人が同じ学校にごろごろしていたのです。みんな産休も生理休暇も遠慮してとらず熱があつても出勤して頑張ってきた女先生たちですよ。法律上決められていた休暇ですよ。でも産休をとつても児童を担任してくれる代わりの先生がいなければ同僚にしわ寄せがくるだけです。だから仕事を辞めるか無理をしながら働くか女教師は悩むんです。それでも頑張ってきたわたしたちへの校長の言葉でした。当時、わたしは厚愛地区の日教組の婦人部長をやらされていたけれど、校長には強くは言い返せなかったの。でもほとんどの同僚はしっかりと定年退職まで勤め上げました。息子の嫁の時代には産休補助教員がついて、安心して産休をとれるようになりました。嫁は教師をしながら三人の子を産み育てました。

それでも仕事はからだが丈夫で、周りの助けがあつてこそ続けられるんですね。

#### 小学校教師の男女比率

一九六七年には県内では五五パーセントが女性となり、女教師が増えるのを好まない風潮であった。

#### 産休法の成立

一九四七年制定の労働基準法で、産前産後の休業、育児時間、生理休暇などの母性保護規定ができたが、補助教員の規定がないため産休はとりにくかった。その後日教組婦人部の運動がみのり五五年に産休補助教員設置法(産休法)ができた。

わたしはみんなにとても感謝しています。退職とともに浅間山の実家を離れました。生活費もろくに入れず大きな顔で居候生活をさせてもらった弟嫁に、気持ちばかりの御礼をして戸室に家を建てて引越しました。

孫の世話や近くの光ヶ丘幼稚園理事の仕事も終わり、ときどき昔の教え子に会うのを楽しみに、思い出や絵手紙を書いています。平成一八年は愛甲郡立実業補習学校から始まった厚木高女（現、県立厚木東高等学校）が一〇〇周年を迎えます。今残っている四人の同級生と「記念式典にみんなで押しかけよう」を合言葉に頑張っています。

聞き取り

二〇〇三年四月三〇日

五月九日

五月一七日

八月四日

## 元氣のみなもとは厚木高女

鈴木 すすき  
ゆき江 え

この歳になって自分の人生を振り返ってみると、わたしらの時代は関東大震災や戦争で、いつも「この際、この際だから」と言われ続けて、我慢したり、諦めたりして、生きてきたように思います。そしてその後は復興という一つの目標にむかって気持をのせて、みんなで力を合わせてきたときでした。大変だったけど、わたしには一番いい時代だったような気がします。

### 知らされなかった事実

わたしは厚木町（現、厚木市元町）の飯田コンニャク店の長女として生まれました。父親は一人娘だった母のところへ二宮から婿養子に來ましたが、からだが弱くて、すぐ生家に戻ったようです。だからわたしは顔も名前も知らなかったのです。昔だったから肺病だったんでしょうかね。そしてわたしが三つのときに二



庭で友人と（左側）

一九二二（明治四五）年  
三月二八日  
愛甲郡厚木町生まれ  
厚木市上荻野在住

番目の父が来て、わたしに六人のきょうだいができました。そういうこともあつてか、わたしはおじいさんとおばあさんに養育されました。大事に、そして厳しく育てられましたよ。

わたしがこういう事実を知ったのは女学校に入ってからでした。学校の要請で戸籍抄本を取り寄せると、父親の名前が違っていたのよね。自分で聞くにも誰に聞いていいか分からず、役場に奉職した友だちに調べてもらって、初めて父親のことを知りました。それまで、ずうっと知らないでいたんです。ショックでした。

## 遠足は舟に乗って

当時相模川、小鮎川、中津川の三川合流のあたりは水が満々と流れていました。今の第二鮎津橋のあたりにお飯屋があつて船頭が渡し舟を出してくれたのよね。

小学校の三年生と四年生の遠足は、朝四時頃厚木を出発して馬入ばこりゅう(現、平塚市)まで舟で行ったのよ。船頭さんが頭としっぽにいて、もちろん竿でこぐの。竿が届かなくなったら櫓でこぐの。戸田の渡しあたりには葦がいっぱいはえていて、小葦切こよしきりがいい声で鳴いていたね。それをずうつと聞きながら行くわけ。じつにいいのよ、いい気持なの。まるで一幅の墨絵を見ているようだったね。今でもわたしの脳裏に、はつきり残っているの。みんなにも見せてやりたいよ。

### 小葦切

草原・湿地・河原などに生息している鳥。ジッピリリ、ジッピリリ、チリチリ、チュチュ、ピピピとさえずる。

馬入で舟を降りて、平塚の駅から東海道線で茅ヶ崎や大磯へ行くのよ。でもじきに着いてしまうでしょ。「先生、もうちつと乗せなよ」なんて言った思い出があるわね。海辺でお弁当を食べて、帰りは平塚から厚木まで歩かせられんのよ。親は遠足だからと洋服や靴を買ってくれるでしょ。その新しい靴が足に合わなくて豆ができるわけ。痛くて大変なのよね。道だつてデコボコよ。そこへ平塚で荷物をおろした帰りの馬力が通るのよ。みんなで「おじさん乗せなよ」と言つて馬力に腰かけて厚木まで来たの。先生の目を盗んでびくびくしながらね。見つかったら叱られるもの。忘れられないね。でもそれは関東大震災までの話だね。

馬力  
牛や馬が運ぶ荷車。

## 毛布を被つて猛勉強

女学校の受験は関東大震災の翌年でした。ひどい被害でね。何しろ赤十字が来たのは三日経つてからだったからね。うちはまだバラツクで冷たい隙間風が入ってくるでしょ。電灯だつて裸電球をやつと引いたようなところでした。そんななかでも毛布を被つて、いっしょうけんめい勉強しましたよ。

その頃の娯楽といえは映画を観るくらいでしょ。はやっていましたよ。近くのキネマ館で夜の一時頃映画がおしまいになるでしょ。そうすると妻田のほうの若い衆がそろそろわたしの家の前を通つて帰るのよ。わたしはその時間まで起き

### 関東大震災

一九二三(大正一二)年九月一日の正午、関東一円に起きた大震災。火災が各所に発生、町の商店街の大部分が焦土と化した。

て勉強していました。当時、お便所は外にあったので夜は怖くてなかなか行けなかったの。その賑やかさに乗じてお便所へ行つて、それから寝たわけよ。

おばあさんは、わたしが長女だから、とても教育に熱心でね。「女学校に受からなかつたら女工だよ」つて言われたの。女工にやられるのはいやだったから、入学したいいっしんで猛勉強しましたよ。

### 白線入りの袴に憧れて

大正一三年四月、厚木実科高等女学校に入学しました。卒業は昭和三年でした。県立厚木高等女学校になつての第一回卒業生です。

一学年五〇名でしたが、合格者は厚木町では三人きりでしたよ。一〇〇人以上の応募者がいたそうです。わたしは小学校を出てすぐ女学校へ入りました。なかには高等科を一年出て女学校に入ってくる人もいましたからね。以前は寄宿舎がありました。大正一二年の震災で焼けてしまいました。その後は半原でも玉川でもみんな自転車通学でした。よく通いましたよね。制服は元禄袖の木綿の着物に袴でしたよ。その袴の裾に白線が入っていましたね。テープが張つてあるだけに、その白線が女学校のシンボルでハイカラでした。わたしはその白線の袴にすごく憧れていたの、入学できたときは嬉しかったね。本当に嬉しかったで

すよ。黒い靴に黒い靴下、袴の丈も決まっていたけど、それが普通だと思つていたからきびしいなんて思いはなかったわね。

女の先生がたの服装は地味な縞の着物に羽織を着ていらして四〇代くらいに見えましたよ。今思えばまだ独身だったから若かったのかもしれないね。体操の女の先生は和服だったり、洋服だったりでした。その先生が断髪になさったことがあつて、そのときは生徒のあいだでもずいぶん話題になつたね。でも今みたいに騒いだり、問題になつたりはしなかつたようだね。お作法の先生は実践女学校を出られたハイカラな人でしたよ。矢絣の着物に紺の袴をはいて編み上げの靴で町へ散歩に出られると、みんなわざわざ見に行きました。憧れの先生でしたね。

## 追い出しの鐘

第一時限には修身公民がありましたよ。この時間で心を落ち着かせて授業に入つていきましたので、勉強はよく身についたと思いますよ。

お裁縫は一、二年生で晒しを二つ折りにして赤い糸で運針の練習をしました。三、四年生では赤い紅絹もみに黄色の糸で、「何本縫つて来なさい」という宿題でした。みんな上手でしたよ。それから浴衣を縫い始めるのです。

家では、学校で縫っている教材のほかに、おばあさんが反物を買つてきて、も

### 断髪

女性の短く切つた髪型。第一次大戦に従軍したヨーロッパの女性に始まり昭和初年ころより日本でも流行。

### 編み上げの靴

靴の甲の部分にある穴を紐で編みあげて履く靴。

### 紅絹

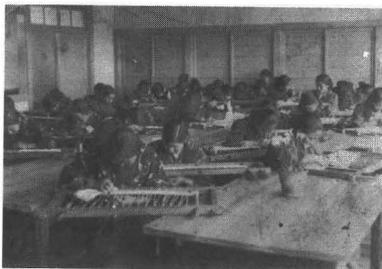
紅色で無地の薄い絹布で、着物ものの裏などに使う。

う一度同じものを作らせるといふ仕込みかたでした。そのせいか、ほかの人より上手だったようで、お裁縫の先生の着物を縫わされたこともありました。だから家に帰ったら外に遊びに行くこともしなかつたですね。

お裁縫では刺繡もありました。繭玉の糸を燃つてから白塩瀬しおげの半衿や赤と白の袱紗ふくさに刺繡をしましたよ。お作法、お茶、お花、料理もありましたし、障子の張り替えまで教えてくださいました。なんでもいっしょうけんめい学びました。おばあさんに「女はどこへお嫁にいくか分からないから、何を覚えておいても損はないよ。荷物にもならないし、捨てるときはいつでも捨てられるからね」と言つて教育されました。本当にそうだと思ひましたよ。

放課後はテニスをやっていました。校友会といつて、テニス、マラソン、ベイスボールなどがありましたね。家に帰つたらすぐに仕事を言いつけられるのが嫌で、テニスをやつて学校で遊んでいた、というのが正直なところでした。どこの家庭でもそうでしたが、あの頃は子どもも年齢に応じて決まつた仕事をしていますよ。わたしの仕事はお勝手の手伝いをしたり、お布団をあげて部屋を掃くことでした。妹たちは床の間や敷居を朝夕拭いていましたね。みんなよく働いていましたよ。親たちは子どもの帰りをあてにして待つていましたしね。

それでも頑張つてテニスの練習を続けました。橋本のほうにあつた鳩川女学校（現、上溝高等学校）や平塚高等女学校（現、平塚江南高等学校）へ他流試合にも



刺繡の授業

塩瀬  
少し地厚の絹織物で半襟や帯地として使う。

行つて、けっこう活発に活動していましたよ。顧問の先生は黒羽先生くろはねとおっしゃって、背のすらつとしたすてきな先生でしたね。この先生が羽二重のワイシャツを着てらして、今でいうシルクよね。それがすぐ汗で汚れるのよ。そんなことまでがすてきでね。

放課後、用務員さんが鳴らす終礼の鐘をわたしたちは追い出しの鐘と言っていました。それが鳴るまでテニスをしたり、刺繡をしたり、裁縫をしたり、自分のやりたいことを目いっぱいやっていましたよ。なつかしい話です。

## なれない畑仕事

わたしを育ててくれたおばあさんが亡くなったあと、おじいさんの洗濯物などは、わたしがしていました。手が小さくて、力がないからしほれないのよね。洗濯だつて昔は盥たらいだつたでしょ。今考えるとよくやつたなと思いますよ。朝起きて自分のものも洗濯してから学校へ行つたんだからね。女学校を卒業後は、おじいさんの身のまわりの世話をしながら、和裁や洋裁を習つたり、時間があればお花やお茶へ通つたりと花嫁修業をしていました。

昭和八年一月、二一歳のときに世話をしてくださるかたがあつて荻野へお嫁に來ました。主人は二九歳でした。花嫁衣裳は黒の留袖でした。髪は母や亡くなつ



調理実習

たおばあさんが家で結ってもらっていた髪結いさんにやつてもらいました。

主人、鈴木正男は平沼小学校の教員でしたので、しばらく横浜に住んでいました。荻野へ戻つて来たのは、わたしが三〇歳の頃でしたかね。荻野ではしゅうと、しゅうとめ、こじゅうとがいつしよでした。畑の仕事は全然分からなかったし、蕨の裏表なんかも分からなかったので、何か言われはしないかとほらはらしちゃってしまいましたね。しゅうとめは近所の人とお茶を飲んでるだけで何もしない人でしたよ。戦争がだんだん過熱してきて、田舎でも食べるものが無くなってきました。しゅうとも食わんがためにいろいろな野菜を作つてくれました。ちよつとのところでも棒を立てて豆などを蒔いて家族の食糧にしようと思つていましたからね。わたしもその手伝いで毎日を恐々としていました。子どものことより、まず自分が叱られないように、畑へ行くことばかり考えていましたね。仕事と時間のやりくりが大変でしたよ。初めの頃は近所の人が手伝いに来てくれていましたが、戦争へ行つちゃうからだんだんいなくなつちゃうでしょ。だから、家の者が何もかもやらなきゃいけないのよ。そういう時代でした。

## 白は爆撃の標的だった

戦争中は荻野の山にも兵隊が入つて来ました。陣地構築だなんていつて、一班

### 陣地構築

敵の来襲に備えて軍隊を配置する場所を築き上げること。

二〇名ぐらいの単位で大きい家々へ来て昼は御飯を炊いて食べて、夜には山へ帰って行きました。その頃わたしは「これで勝つのかなあ」と不安に思いましたね。

米の代わりに桑の葉や砂糖が配給されたときもありました。お米の代わりに砂糖を嘗めていられますか。いられないでしょう。だからみんな自分の着物などを持って買い出しに行つて、食糧と取り替えてきましたよ。荻野は田んぼが少ないから、麦や芋類を作つて供出しました。横須賀の衣笠小学校の児童が荻野の松石寺に疎開していたので、そこへも食糧を出すので大変でした。芋は乾燥芋にして俵に入れて供出するのです。うちで食べるのなんかなくなっちゃいますよ。それでも出すのよ。荻野というところは昔、養蚕が盛んで桑畑が多かったので、その根をこいで畑にして麦や陸稻わかぼを作つて自分たちの食糧にしました。

終戦の少し前でしたね。しゅうとがトマトやピーマンの苗を植えてみたのです。ある日、空襲警報が解除になつたのでバケツに消毒液をこしらえて畑へ行きまし。トマトに消毒をし始めてすぐ、隣のおじいさんが「ゆき江さん危ないよ。今、小田原上空だよ」と知らせてくれました。小型機だから、相模湾からすぐ入つて来るんです。バケツに入つた白い消毒液が目標にされたわけですよ。ひよいと見たらもう三機来ちゃうの。ものすごく怖かつたわよ。子どもたち三人をすぐ家に帰して、わたしはお茶の木の陰に伏せたんです。弾は二〇メートルほど先の田んぼに落ちました。六月頃だったので田んぼに水が張つてあつてね、水しぶぎが高

#### 買い出し

食糧不足を補うために農家へ行つて米や野菜を買つてきた。お金も無いので着物との物々交換が多かつた。

#### 疎開児童

一九四四（昭和一九）年、衣笠国民学校の学童三二二名が上荻野の松石寺、中荻野の戒善寺、下荻野の法界寺、養徳寺、知恩寺に集団疎開した。

くあがつて、すごかったわよ。爆音がやんで、はつと我に返り「ああ、わたしは生きていたんだわ」と思ったの。急いで帰りました。家では子どもたちが「おかあちゃんが大変」と言つて泣いていました。今となつては、あんな恐ろしいことを知つているのは、わたしぐらいしかないので、誰かに伝えておきたいのよ。

今、戦争の映画やテレビドラマの出演者は白い靴下をはいて白い帽子をかぶつているけど白いものは絶対にいけなかったのよ。目標にされてしまうからね。

わたしには男の子一人女の子三人の子どもがいましたが、男の子は急死してしまいました。今は女の子が三人、みんな元気にしています。

主人は若いときから家のことを何ひとつしない人でした。みんなが畑で仕事をしていても、学校から帰つて来るとさつきと湯に入つて浴衣を着て待つているような人でした。わたしがどんなに忙しいときでも、テレビがつまらなくなると「まわしてみろ」、コタツが熱ければ「熱いぞ」と言う人でしたからね。少しは手伝つて欲しいと思つたときもありましたよ。その主人もわたしが七七歳のとき八五歳で亡くなりました。

でもね、今一人で気楽にやつてるでしょ。お風呂に入つてるときなんか、いつも「ああ、ありがたいな」と思つていますよ。実家のおじいさんおばあさんにも感謝しています。女学校にあげておいてもらつたおかげで回覧板も読めるし、本も新聞も読めます。テニスに夢中だったあの頃を思うと今でも元気がですすよ。

聞き取り

二〇〇〇年七月一六日

二〇〇三年三月二六日

## 女優及川道子の付き人として

後藤ごとう  
フミ

一九一五（大正四）年  
九月二十七日  
中郡相川村生まれ  
厚木市戸田在住

生まれは、ここ相川村の戸田（現、厚木市戸田）でしたが、小学校の校長先生の口利きでね、東京へ行っただんです。それからひよんな縁で、女優の及川道子おいかわみちこさんのお手伝いになったんですよ。道子さんは女でも惚れられするようなきれいなかたで、そのうえ清らかでやさしい人でした。お給金もよかったですし、とてもかわいがってくださってね。あたしにとつちやあ居心地のいい家でしたよ。

結婚して蒲田で生活していましたが、終戦直前に息子を連れて実家に身を寄せました。旦那は、病弱だったこともあって早く逝ってしまいました。あたしは実家の手伝いをしたり勤めたりして、ずっと現在地に住んでいます。

### 風呂敷包みひとつで上京

あたし、今住んでいる家の裏にある石川って家で生まれたんですよ。屋号が「隠



自宅庭先にて

居」っていうんです。きょうだい姉が二人と兄と妹が二人。

小学校を卒業して三、四年後、学校のときの小金校長先生の世話で、東京代々木の「二葉亭」<sup>ふたばてい</sup>っていうフランス料理屋へ見習いとして行っただんです。満州事變が始まった昭和六年ごろですね。風呂敷包みひとつ持って。

ところがそこはすぐ閉鎖されちゃってね、うちにも帰れないでしょうと思っていたら、近所の魚屋さん、板倉さんといいましたが、「女中さんが欲しいという家があるけど、どう」って口を利いてくれたんです。実家では料理店が閉鎖されたことなんかまに受けられないだろうし、「もう帰ってきたの」なんて言われるのも嫌だったんで、「お願いします」って頼んだんです。

さっそく魚屋さんと出向いた先が、俳優の及川道子さんのところでした。すぐそこが気に入ったんで、魚屋さんに「ここで働かしてもらおうから」って返事をしたの。親にも相談しないで自分一人で決めました。

及川さんの住まいは渋谷の金王町<sup>こんのうらぎょう</sup>（現、渋谷区渋谷二丁目、三丁目の一部）にあつてね、あたしたちはみな、道子さんと呼んでいた。その頃はまだお元気だったから忙しくて、あつちこつちの撮影所へお出かけになつてたね。ご両親は、道子さんが学生（東京音楽学校一橋分教場声楽科）だった頃、青山学院の近くに「オアシス」<sup>オアシス</sup>ってカフェを開いてられたの。道子さんが女優さんになつてからはお母さんが付き添つてただけで、あたしに世話をしてくれないかつて。妹さんが食

及川道子

（一九一一年—一九三八）

母親が徳富蘆花の愛読者であつたことから、小説「黒潮」のヒロインの名を取って「道子」と命名。舞台女優から映画スターになり、サイレント映画末期の松竹蒲田の知性派として活躍。代表作は「女よ、君の名を汚す勿れ」「愛の防風林」「家族会議」など。

及川道子



事のほうはいっさいやるから、暇なときはその手伝いもして欲しいってね。

道子さんのところはお給金がよくつて行く早々一五円貰えたの、フランス料理店ではたつたの七円だったのね。落ち着いてから実家へは職は変わったけど心配することはないからつて手紙を出しました。暮らし向きもこつちのほうがよくつたから寂しいなんてちつとも思わなかつたし、ずつと辛抱してそこで暮らすことにしたんです。

## 撮影所での仕事

撮影所へ行くときはいつもタクシーでしたね。あたしも付いていつて身の回りの世話をしたり、着物を着るのを手伝つたりしたの。衣装さんが何枚も抱えて持つてくる着物や洋服を選んだりするときは、相談されることもありました。メイクも髪もご自分でされたけど、日本髪風的时候は「床山」さんが来て結つてたね。移動も多かつたから、道子さんに付いてよく歩きましたねえ。撮影の合間は、部屋で静かに次の準備をするか本を読んでらした。自分がこの役につて決められたら倒れたつてやる人だから勉強も人一倍されたし、しんの強い人だった。

当時、蒲田の島津保次郎しまづ やすじろうつて監督の映画に多く出演されてね、道子さんの相役では大日向伝おびなただんとか高田浩吉たかだこうきちがいたね。女優さんでは田中絹代たなかきぬよや川崎弘子かわさきひろこがいて道

「オアシス」

一九二四（大正一三）年、及川道子の実家で、家計を立て直すために、青山学院の近くにカフェを開業。この店の常連客であった演劇関係者の紹介で、小山内薫の知遇を得、築地小劇場へ入団する。

当時の女性の平均給料

一九三一（昭和六）年頃、女性の平均給料は事務員三〇円、交換手三五円、店員は二五円（中央職業紹介所事務局調査。住み込みはこれより安くなる。

「床山」

髪師の作つた髪を、それぞれの髪に結い上げ、俳優にかぶせる、はずす、保管するなど役目をする。

子さんと三羽鳥って言われてた。三人とも大女優だから個室があつたの。その他大勢は大部屋だね。あたしは撮影が終わるまで待っていてお昼を食べないこともありましたよ。撮影のない日は、個人で雑誌を出していたんで、その手伝いもしました。ファンがみんなでお金を出し合つて作っていたんです。

昭和十一年に青山四丁目へ引越されたんです。大きな家だね、あたしもそこへ付いて行つたの。二・二六事件もその頃。家の近くに乃木神社があつたんですよ。その向かい側にある郵便局のポストに雑誌を入れて帰るときのこと、すぐかつたよ。雪の降っているなかに、憲兵がワツとお堀の側に立っていて、女は平気でしたけど、怪しい男の人なんか捕まえてさ、異常な雰囲気でしたよ。「外へ出んじやあねえ、外へ出んじやねえ」って叫ぶ声がしてね、そのときはなにがなんだから分かんなかったの。「兵隊さんがいっぱい立つてて怖かった」って話したら、「今、大事件が起こつたよ」って言われてね、ラジオの放送があつたことを聞かしてもらつて、やっと何が起こつたんだか分かつたわけ。そのときは無我夢中でね、怖くてすつとんで帰つてきちゃつた。

## 病弱だつた道子さん

あたしが行つてから二、三年の間に病氣になられてね、結核だつたんですよ。撮

大日向伝

(一九〇七—一九八〇) 俳優  
「愛の防風林」で及川道子と  
共演。



高田浩吉

(一九一—一九九八) 俳優  
日本の歌うスター第一号。



田中絹代

(一九〇九—一九七七)  
日本映画を代表する女優。



影所から帰ってくると、銀座で経営しているお医者さんがきて、注射して帰られるの。無理して仕事をしていたから、ひとつ映画を撮ると当分休まれるんです。

そんなふうだったからお父さんがね、三枚肉の佃煮を毎日のように作ってられた。脂身をとって赤い肉を細かく切って、しょう油と砂糖で煮たのをね。道子さんの大好物だったの。それと肉汁がからだにいいって言われて、肉屋が肉汁にする活きのいい肉を持って来るの。生の肉の汁ですよ、それをコップに絞って道子さんのいる二階に持っていったわ。丈夫になりたかったんだね。こんなもの飲むんじやいのちは大切だねって思いましたよ。

お家に居るときはいつもバジャマでガウンを着てらした。静かな人で、セリフを覚えるときは自分の部屋にこもっちゃって、人を入れないの。一日か二日でセリフを全部覚える人なんてめったにいないって監督さんも言ってたくらい。仕事の無いときはクリスチャンだったから聖書を読んでらしてね、ほんとに本が好きで暇さえあれば手にしていたね。

道子さんには「ミツカ会」という後援会があつて大勢会員がいたんです。毎日のように門のところへ五、六人、道子さんに逢わしてくださいってファンが来てました。道子さんはそういうのが嫌いだね、「今、ご病氣中だから」って断つたこともあつた。熱心なファンで、家へ押しかけてそのまま居座っちゃった、なんて人もいたの。その人に「フミさん、道子さんの身の回りのことわたしにやらせ

川崎弘子

(一九二二—一九七六)

川崎生まれで、哀愁型の美人女優。「天国に結ぶ恋」が大ヒット。



「ミツカ会」

及川道子の後援会で、幼い弟の四郎がミチコといえずミツカと呼ぶのに由来。道子の魅力に熱心なファンが集まった。

て」って頼まれて困ったこともありましたね。

道子さんは当時洋髪でパーマをかけて横をずうつと分けていたの。あたしも同じような髪型で後ろをぎゅつと引つ張つちやつてね、ふくらませもしなかった。妹さんはあたしより三つ上だけど、髪が長くて三つ編みにして洋服でしたよ。

道子さんは、写真を撮ってもらつてお金が貰えるの。今でいうコマーシャルでしょうね。浴衣の宣伝のとき、織り元の「機屋」<sup>はたや</sup>さんからブロマイド用の着物費うでしよう、そういう物くださつたし、明治製菓のときはチョコレートがいつぱいきて、使用人はみんな自由にご馳走になれたんですよ。

その頃あたしは、着物に半幅帯を締めて、割烹着かけて働いていたけど、そのうち「こういうの活発でいいよ」って言われて洋服を着るようになりました。当時、渋谷あたりへ出かけると、街の人は着物と洋服半々でしたね。妹さんもドレムを出していたんで洋服を作ってくれました。あたしも牛込の通信教育で洋裁を習つて、自分の洋服は自分で縫いました。動きやすいんで洋服のほうが多くなりましたね。

他にも家政婦さんがいましたけど、すぐ辞めちゃいました。あたしはよけいなことは言わないんで、道子さんに気に入られてね。おかげでめずらしい物を食べたり着たり、田舎ではできないことをさせてもらったんで楽しかったですよ。

「機屋」  
機械機のことだが、この場合は機械の会社のこと。

ドレムと牛込の通信教育  
ドレムは、一九二六（大正一五）年に杉野芳子が始めた洋裁学校。この頃はドレスメーカー女学院と称した。昭和初期、杉野考案のドレム式型紙が人気を博した。  
牛込の通信教育は、ドレムと服飾界の勢力を二分した文化服装学院が当時牛込にあり、通信教育を実施していた。

## 東京大空襲をのがれて

そんな生活のなかで友だちができたの。ほら、道子さんについて撮影所へ行くでしょう、その撮影所の中にお弁当を作るところがあったんですよ。その人とあたしが知り合いになって、二二歳のときだね。仙台の人を紹介してもらったんです。それがあたしの旦那になった人。東芝機械つて会社に勤めていた人で、名前は定きたかす一かずつていうんです。でもその頃、及川さんはもう病気でほとんど撮影に出られなかったね。

結婚したのは、昭和一五年でした。主人のおじが、今の大田区の蒲田で暮らしていたので、そこで生活を始めました。ようやく一八年に長男が生まれたその翌年、旦那が出征しちゃったんです、仙台の二二部隊へ。

二〇年になって戦争がひどくなり、三月一〇日に東京大空襲がありました。その空襲になる一日前に実家の父がね、「子どもを連れて防空壕に出たり入ったりして、もしものことがあったらいけないから」ってトラックを頼んで、迎えに来てくれたんです。おかげで荷物は全部実家へ運べました。

ところがいつしよにいた義妹はその晩空襲にあつてね、夜具をかぶつて逃げて、六郷の土手で一夜を明かしたんだつて。あたしたちが居たつてところもその周りも丸焼けだね。近所の人もそこに残った人は、亡くなっちゃったらしいですよ。義

妹や旦那のおじは、次の日の夜行で仙台へ帰ったんだって。無事だからっていう手紙がむこうから来ましたけどね。

まったくもう大変でしたよ。実家に身を寄せたのが前日でしょう、間一髪でね、あたしは奇跡だって言っているんですよ。

旦那から、あとで聞いた話ですけど、当時仙台の部隊から座間の士官学校へ転属になっていてね。心配で隊長さんに暇をもらって、品川まで行ったんだそうです。自分の家のあった方向をみたら、家は一軒もなく焼け野原だったって。どこをどう行ったのか、蒲田の道塚みちづか（現、新蒲田二丁目、三丁目）へ着いたらね、防火樹ぼうくについて植えておいた垣根が根っこまで燃えちゃって、しばらく呆然と立ちすくんだって言ってました。

家のすぐ裏つかに、親子三人で暮らしていた家があるんですよ。そこへ爆弾が落ちて大きな穴が掘れて何にも残っていませんでした。みんな灰になっちゃって。「俺だから行ったようなもんで、おめい（おまえ）なんか行ってもわけわかるもんか、けえって（帰って）来れない」って言ってましたよ。

### ふるさと戸田での暮らし

しばらくは実家にいたんですけど、今住んでいるここに来たのは、昭和二一

年です。旦那は終戦になってから二、三日後、山梨から帰って来たんですよ。座間から山梨県のほうへまた転属させられてたんです。しばらくは前に勤めていた会社が名古屋に移転したのでそちらに行っただんですが、関西の人とは合わないといつて荷物を持って帰ってきちゃったの。

生活があるし、子どももいるから遊んじやいらんないって、近所の農協を定年退職した人と菜種絞りの仕事を始めたんです。機械いじりが得意だったんでね。家の脇に一〇坪の小屋を建ててね。あの頃、家のまわりの畑は、菜の花がいつぱい咲いてたの。絞り賃は、一斗缶で三〇〇円でしたね。

旦那は、よその人には愛想がよくてね、人が通ると「お茶でもどうぞ」って、あたしがまだ台所片付けない朝でも、お客呼び込んだじゃうの。

そんな人だから、まわりの人にとても好かれてね。内面が悪くても外面がいいのは、ああいう人のことをいうんだなって思いましたよ。だから、ご機嫌の悪いときは口をきかないで鼻歌うたって、ハッハッハッって笑っちゃうの。そうするといつの間にか機嫌が直ってね。そんな暮らしが五年くらい続きました。それが、秦野に大きな農協の搾油工場ができてから、だんだん仕事が少なくなつて、その仕事は辞めちゃったの。とりあえず近所の農機具の修理をしたりしてたんですけど、前に勤めていた東芝機械のほうから印刷機の修理の仕事の話がきて、鶴見の工場へ勤めるようになったんです。昭和二八年の暮でした。

一斗缶

穀物や酒などを入れる缶。一斗は、一升の一〇倍、一八リットル。

その仕事が軌道にのって、下請け会社の富士工業を作りましてね、職人を何人か使ってたの。あたしも月に一度、給料を運んだりして旦那を助けてました。

昭和三四、五年頃長男が高校生のとき、旦那が脳血栓で倒れちゃったんですよ。それから入退院が続いてね。つらい時期でした。

あたしは、家のことや子育てをしながら、実家の野菜作りや畑仕事の手伝いをして暮らしてきたんですが、旦那の給料はみんな病院の支払いになっちゃうし、生活を支えるために、あたしも寒川の旭ファイバーっていう会社に一〇年近く勤めたんです。

仕事無理していたんでしよう、旦那の具合が悪くなってね、会社でも跡継ぎのこと心配してくれて、息子さんをどうかって話があったんですよ。旦那はまだ自分が元気になってやるつもりだから「俺のあとには継がせない、西も東も分かんねえあのボンボンに何ができる」なんてゆってさ、承知しないの。あたしは悔しくってね。息子も「おやじが反対してんのに、俺がいくとまたあとうるさいぞ」って。ただ職人さんたちは「俺たちが現場はやるから、事務のことをやってくれ」って勧めてくれたんで、会社へ行きだしたの。旦那は心臓も悪くなってきてね、息子が「俺たちはなんとかやっていけるからお母さん、お父さんの世話をしたら」っていうので、一か月病院に寝泊りして旦那の世話をしました。たまたま家に帰っていたとき病院から長男が「親父が危ないからすぐ来い」って電話をよこしたの。

旦那は最期にあたしには一言もなかつたけど、息子には「俺ができなかつたつて、おめいがいりやあ大丈夫だ、給料間違ひなく払えよ」つて。五七歳でした。その後息子が順調に会社をやつてくれます。

あたし、今はご詠歌を習つたりコーラスをやつたり好きなことをしています。民生委員をしてご近所のお手伝いもさせていただきました。

今でもたまにお墓へ行つて言うんですよ、「息子がちゃんと会社を守つてくれてるから、あたしは何の心配もなく気楽に暮らせてるよ」つて。職人氣質で、ぼつこで強情な人でしたがね。そんな旦那を見送つて今年で三三年になります。

ぼつこ

怒りっぽい人、短気。

聞き取り

二〇〇二年七月九日

二〇〇二年一月二六日

## 番台は、お巡りさんの気分で

かわくち  
川口 せん

わたしは、厚木の町中のお風呂屋、「竹の湯」に嫁ぎ、約半世紀のあいだ、しゅうとめ、主人とともに、朝から晩まで働きました。「竹の湯」の周りは芸者街で、わたしが来た頃が、一番にぎやかだったと思います。

お風呂屋というのは、朝早くから木屑を集めに歩いて、大きな釜で燃して裏は裏で大変でした。番台では、とにかく、人さまの物を預かっているんだから、お巡りさんまわのような気分でしたし、今、思ってみると、あんまり楽な商売じゃなかったですね。

## 七沢の石屋に生まれる

わたしのきょうだいは、男七人女五人の一二人で、わたしは二一番目でした。他のきょうだいは、みなもう亡くなって、今は、わたし一人きりです。うちは七沢

一九一五（大正四）年  
二月四日  
愛甲郡玉川村七沢生まれ  
厚木市寿町在住

「竹の湯」  
厚木町には古くから湯屋があり、明治年間には三軒あった。横町（現、元町）に「亀の湯」、天王裏（現、寿町）に「竹の湯」、下宿（現、幸町）に「松の湯」（のちに「あさひ湯」と改名があった。「亀の湯」のみ現存している。

石を扱っている近藤石材店でした。

七沢は温泉の町です。当時は三軒の温泉旅館がありました。今でも同じ名前で作っている、玉川館、中屋、福元館です。わたしが、一五、六歳になった頃、宿泊の温泉宿でも日帰り入浴を始めました。七沢へのお客さんがずいぶん増えました。東京のほうからもみえていました。

家の近くには、お菓子屋さんとか、そのほか日用品などを売っているお店が二、三軒はありましたけど、買ひ物は厚木へ出たり、伊勢原へ出たりしました。伊勢原のほうが近かったですね。歩いて一時間くらいだったと思います。

大正一一年に玉川小学校に入學しました。当時は、今よりも少し小野のほうに寄ったところにあつて、茅葺屋根の校舎でした。学校までは、遊び遊び行つたから、歩いて一五分か二〇分くらいかかったんじゃないでしょうかねえ。

二年生のときに関東大震災があつてね、あれは、九月一日だから学校終わつて昼ごはんのときでした。その頃は一日と二五日には、小豆ご飯つていって、お赤飯を炊いたのよ。昼は冷やの小豆のご飯でね、お勝手の板の間で食べていました。すごく揺れて、「茶箆筒が倒れる、倒れる」って、みんな支えて、それからはずいぶん外へ飛び出しました。家は倒れませんでした。が、囲炉裏がドーンと落ちて怖い思いをしましたよ。一日くらいしてから、「朝鮮人が来るよ」って噂が広がって、はだして山へ逃げてね、梅の木の下へ蚊帳かを吊つて寝ました。結局、デマで何も

なかつたんですけどね。

当時は、小学校も六年行けばけっこうなほうで、四年とか五年でさがる人が多かったですよ。わたしの家では父親が、「女の子でも六年はちゃんとあげてやらなければ年とって困るから」とってね、行かせてくれました。そのあと高等科へ行ったのが一学級で女は二、三人、女学校へ行く人もわたしの同級生では二人くらいでした。

小学校は六年間一日も休まないで、ご褒美に硯箱をいただいたんです。お嫁に来るとき、大事に持つてきました。今でも、どこかにしまつてありますよ。

昭和二年に小学校を卒業して、姉たちと同じように、わたしも足柄上郡の紡績工場の糸取りに行ったり、東京へ女中奉公に行ったりしました。蒲田に嫁いだ姉の家に行ったときに、麻布十番のお屋敷に行儀見習に行きました。まあ、女中さんですね。その家は、旦那さん、奥さんに、ご隠居さんもいました。旦那さんは働かず、家作で食べていました。そこには、三年くらいいましたかね。

一年中奉公に行っている人は、よっぽど困っている家の人で、行儀見習に行ったり、女中さんになれるのはいいほうでしたよ。奉公に出ても、お正月から三月頃までは家に帰っていてね、そのあいだ小学校の補習で縫い物を習いました。月謝もとらずに、学校のお裁縫の先生が教えてくれました。そのおかげで、わたしもふだんに着る物くらいは縫えます。

#### 補習

一九〇七（明治四〇）年、これまでの四年制の義務教育が六年に延長され、高等科は廃止。玉川村立玉川小学校は高等科を補習適用校とされた。

## お風呂屋の長男に嫁ぐ

昭和一五年二月二十七日、厚木の「静本」という料理屋さんで、川口巖かわくちいわおと結婚式を挙げました。主人とわたしは、同い年の二五歳で、一二三軒という支那そば屋さんの紹介でした。わたしの兄がよく食べに行っていた店です。主人はその近くの浴場の長男で、暮れの少し前にお見合いをして、すぐに決まって、二月にはもうお嫁に来たんです。結婚する前、主人とは、結納のときに顔を会わせたくらいで、そのほかには会うことはありませんでした。江戸えど棲づまに角隠つのかくという花嫁衣裳でした。結婚式には親戚を集めて、芸者さんを二、三人あげてね、結構にぎやかでした。

その頃の住まいは二階建てでした。一階はお風呂と釜場、それに部屋が一つ。長い煙突が家の中からぐつと立っていました。二階には二間ありました。

家族は、両親と第二人とわたしたち夫婦の六人でした。弟たちはまだ学校へ行っていて、上の弟が高等科二年、下の弟は小学校五年でした。よく仕込んであったから、自分たちで何でもできましたよ。おばあさんもいたからね、夜遅くまで仕事していても、そんなにほねではなかったですよ。

終戦の年の四月におじいさんが亡くなって財布をあげられ、家のことはわたしたち若い者に任せられました。わたしたちの子どもはありませんでしたが、上

の弟は東京の電気学校の夜学へ、下の弟は法政の土木へ入れて、結婚式も「末広」で挙げてやりました。

おばあさんは、大根おおね（現、秦野市）の旧家の出で、あの頃の人にしては珍しく、高等小学校まで出た人でした。とても利口者で筋道の通る人でした。おじいさんが生きていた頃は苦勞が多かったんです。恥を話すようですが、おじいさんは与太ですね、ここいら芸者街でしょ、昼間っから芸者遊びしてね、お金を持って行ったり、迎えに行ったり、大変でした。嫁さんいびりが当たり前の時代だったけど、そんなことはなかったですね。まあ、商売していたから毎日忙しくて、つまらないことを言い合ってる暇がなかったんですよ。

### 花街のまんなか

ここは芸者街です。今、わたしの家がある、この場所に見番がありました。見番では二階で踊りの稽古なんかしていましたね。今のうちに、きちんとした造りではなかったから、朝早くから夜遅くまで、にぎやかな声が聞こえてくるんですよ。芸者さんの呼び出しのときにはね、「菊丸」「花奴」って、次つぎに名前を挙げていって、「これとこれがありますよ」、「じゃあ、これ」、なんて言って、料理屋さんを見番とでやり取りする声が、よく聞こえました。

見番には、二、三人の人が使われていました。電話番号をしたり、箱屋さんっていつて、三味線を担いで芸者さんのあとをついて行く人もいました。昔は桂庵けいあんっていつて、人を売ったり買ったりする商売があつてね、その紹介で芸者さんは来たんです。寒い地方の人が多かつたと聞いています。子だくさんで貧しい家の子とか、親のない子なんか、年季奉公で来ていたようです。小学校終るか終わらないくらいの子もいて泣いている姿を見かけたこともあります。戦争中は、芸者さんたちも勤勞奉仕に出されたりして、三味線が弾けないときもありました。

こういう町のお風呂屋は、開けるのが早いんですよ。普通は三時くらいだけど、一二時半か一時にはもうお風呂が沸いていないと、芸者さんたちが「おじさん、入れて、入れて」つて、来るんです。芸者さんは、わたしがお嫁に来た頃と昭和三〇年代がいちばんにぎやかで、一〇〇人からいましたよ。夜遅くまで、下駄の音が、カラコロ、カラコロ聞こえていましたが、だんだんさびれちゃいましたね。

## 木屑のお湯はやわらかい

お風呂の燃料は、石炭はほとんど使わないで、木屑を燃やしました。石炭は高くて、ちととばかりのお客さんでは、成り立たなかつたんですよ。主人が自分で

### 箱屋

客席に出る芸妓について箱に入れた三味線を持つていく男。

### 桂庵

慶庵、慶安とも書く。口入屋ともいい、江戸時代に始まり、奉公などを斡旋する民間の職業紹介所。入り口に紺ののれんをさげた独特の構えで、東京の上野駅前に多かつた。悪徳桂庵も多く、一九二〇年代からぼつぼつ公共職業紹介所ができた。

### 勤勞奉仕

戦時中、報国婦人会が結成され、芸者の営業は停止された。銃後の守りとして、出征兵の見送りや慰問袋の発送をしたり、軍需工場へ勤勞動員されたりした。

箱を作つてリヤカーにつけて、それを自転車で引つ張つて、厚木や小鮎の四か所ほどの製材所へ行つて、木屑を集めてきました。石炭より木屑を燃したほうが、何ていうんでしようかね、お湯がやわらかいというか、からだが温まるんですよ。毎日、厚木から小鮎のほうまで、一日に二回も集めに行つたこともありまして。まあ、見もんでしたよ、箱いっぱい積んで帰つて来たときはね。

主人は、なりはわたしより小さいくらいだったけど、ほんとによく働きました。木屑集めから帰つてくると、一・一時頃から火をつけ、焚いているあいだは大きな釜のそばに、ほとんどつきつきりでした。そうとうほ・ね・折つたんですね、七七歳で亡くなりましたけど、あんなには・ね・折らなければもつと長生きしたかもしれないと思います。

昭和三年にお風呂屋をはじめたときは、借りてやっていたそうです。わたしがお嫁に来たときには、すでに川口のものになっていました。とにかく、いつしゅうけんめい地道に働いて、この土地も買い、家も直しました。戦後しばらくは繁盛していた芸者屋がだめになって、そこも買ってアパートにしました。

## 「竹の湯」の番台に半世紀

長いあいだ、お風呂屋の番台に上がつてきましたが、一番気をつけたことは、盗

難がないように、ということでしたね。それから、お湯に入りすぎて倒れる人もいるし、いろいろと気を遣いました。お巡りさんの気分で番台に座っていました。

ときには憎まれ口もきかなければね。「はい、はい」なんて愛想よくやっていたら、やっていけません。男湯と女湯のあいだで両方に気を配ってね。「いらっしやいませ」と「ありがとうございました」とだけは必ず言ったけど。きつと「あの人はぶいとだ」って言われてたでしょうね。

いろんな人がいますよ、ほんとに。財布をすっていたり、他人の履物や着物を着て行ってしまったりね。あるときは、駅のほうまで追いかけて行って取り返してきました。そんなふうだったから、しまいっ子でのんびりしていた娘の頃にくらべて性格がきつくなつたと思います。

ここに来たところは、履物はぬぎっぱなし、着物は籠に入れるだけだったけど、だんだん下駄箱もこしらえて、一足ずつ入れて鍵がかかるようにして、脱衣籠も、やっぱり鍵をつけた棚に入れるようにと、組合のほうからあれこれ指導がありました。営業時間のことも言われましたよ。開けるのは三時、閉めるのは一〇時と言われても、ここでは、それじゃあやれない。芸者さんのお座敷のしたくに間に合わないし、仕事終わってお湯に入れない。どうしても早く開けて、終えるのは、夜中の一時、二時でしたね。休みも月に二回にするようにと言われました。以前は月一回だったので、家のことをしているとそれだけで終わってしまっていました。

ぶいと

厚木の方言で、愛想のない人、お世辞の言えない人のことをいう。

たが、たまに映画を見に行ったこともあります。

おばさんの話によると、昭和の初めの頃は湯銭は一回四銭だったそうです。三人入ると割引して一〇銭にして、一〇銭の割引札を売っていたそうです。

## 肩の荷をおろして

長いあいだ、いつしよに働いてきたおばさんは、昭和五〇年に亡くなりました。その後しばらくは、主人と二人でなんとかやっていたのですが、主人が「死ぬまでのあいだ、一〇年くらいは楽をしなけりやつまらないから」って言って、子どももなかったし、浴場を閉めて、跡地を駐車場にしました。主人は、言っていたとおり、一〇年くらいして平成四年に亡くなりました。

今は天下ですよ、一人でいばつてね。もう、全部自分のものだから。アパートの家賃と駐車場代が入るから、お金にはまあ困らないで、少しは預金もできています。それは、若い頃から地道に働いて、無駄使いもしないでできた結晶だと思えます。

ひとり暮らしでも、近くに住む甥や姪たちがときどき顔をみせてくれるので、そんなに寂しくはありません。親しい友人はあまりいませんけど、年に一回くらい開かれる玉川小学校の同窓会が楽しみです。もう、この歳になると亡くな



自宅で（八五歳）

た人も多し、からだの具合の悪い人もあるので、集まれるのはほんの三、四人ですけど、七沢の温泉でやっています。

あとは、からだに気をつけて、あれこれなんとかしようなんて思わないで、無事に暮らせればそれが一番だと思えますね。先祖をしっかりと守って、自分もちやんと死んでいこうと思っています。



聞き取り

二〇〇一年二月二日

三月一六日

## 無医村の医師から保健所長に

なかぐら  
中倉 千鶴子

一九一八（大正七）年  
四月五日  
愛甲郡厚木町生まれ  
厚木市中町在住

医者になりたいと思ったのは女学生の頃でした。人のために尽くしたいという気持ちが強かったです。戦時中、高座郡綾瀬村（現、綾瀬市）が無医村になったので行きました。戦後、厚木保健所を振り出しに最後は津久井の保健所でした。神奈川県の保健所の女性所長第一号だったんですよ。津久井の保健所は山間地のため、みんな嫌って行かないのを一年の約束でしたが、結局六年間もいてよかったですよ。住んでいる人が純朴で、ときおりは機織りの音がガタンゴットン、今も頭に残ってます。この頃がわたしの人生で一番印象深い時代です。

### 勉強好きな女の子

小さい頃のわたしはかなりお転婆でした。ほとんど駆けずりまわっていました。



小学五年生の頃

小学校の陸上選手で、愛甲郡内の小鮎小学校、依知小学校、中郡成瀬小学校にも行って競走するんです。そして優勝旗を町に持って来ました。優勝旗をもらって帰って来ると太鼓が付いてドンガ、ドンガって男女混じって、町の中をゆうゆうとみんなで歩いたものです。

小学校の校庭に大きな柳の木が一本ありまして、その周りでみんなよく遊びました。その頃は和服の子どもがほとんどで、わたしは着物が大嫌いだったらしくて、毛糸の薄いオレンジ色のワンピースを着て、踊っている写真がありました。

県立厚木高等女学校も無欠席で肋膜も夏休み中に治し、九月一日から登校したんです。勉強が好きだったんですね。とくに文章を書くのが好きでした。今でもはつきり思いだすのは「父の言葉」という題で書いた作文です。校友誌にも載せてもらいました。

「汽車賃を下さい」と言ったとき、父はわたしの手に八十銭をのせて「お前は幸福だ、お父さんもお母さんもあるし、お金の欲しいときはすぐもらえる。わたしは小さいときに父も母も失い、祖父の家で育てられたんだよ。着物も古いのを着せられ、学校も友達も電車を通ったのに、近道を見つけては歩いていったんだよ。お前は幸福だよ」と言われたことを書いたのです。このときやさしいお父さん、わたしはきつと立派な人になりますと心に決めたのです。

#### 校友誌

神奈川県立厚木高等女学校  
校友会発行『ときわ』第一〇号  
(一九三四年)に掲載

## お高祖頭巾のおばあさま

母方のおばあさまは、ちよつとおしゃれでね、床屋さんがうちに来てくれたんです。肩布をかけて全部刈り上げて粋でモダンなんです。おばあさまはお風呂やさんの一番風呂に入り、お出かけは紫のお高祖頭巾にお被布を着て、お芝居見物にはお供が座布団を持つてついでいったそうね。食事も四〇センチくらいのお小さい赤い一人前用のテーブルで小さいお櫃にご飯を入れ、一人で六畳間で召し上がりました。おかずは何だろうと見ると、コロッケとかオムレツとか、近所の西洋軒から出前をとつてね。書生さんたちは、「今日もコロッケ明日もコロッケ」とうらやましそうに歌ってました。

わたしのきょうだいは、母方の斎藤家を継いだ姉と兄、年の離れた妹二人いました。姉はおばあさまに、とつても大事にされていて、わたしが泥だらけで帰ると「千鶴子、千鶴子」といつも怒られていた、そのおばあさまは大嫌いでした。大正一二年の関東大震災のとき、道路の地盤がゆるんで、半分落ち、みんなで竹藪におにぎりを持つて避難しました。おばあさまもいっしょで長生きされました。父が開業していた頃は患者さんで混んでいました。治療椅子も四台あつて待合室には、火鉢があり、廊下に大きな鏡もあつて、袋に入つた歯磨き粉と竹の歯ブラシがおいてありました。そこで歯を磨いて順番を待つていたんです。

### お高祖頭巾

女性がかぶる防寒フード。江戸時代に始まり、大正時代まで用いられた。生地はおもに縮緬で、少女は紫、藤色などを、年をとるにつれ淡い色から濃い色に移るのが普通。

九畳間くらいの書生室には、何人かの書生さんがいました。父は九州の士族の出身でね、一本筋が通っていました。九州から来た他人でも、頭がよく真面目なしっかり勉強する人には、英語の先生もつけて歯科大に入れ、卒業まで面倒を見てあげたんですね。

そして子どもは全部京都の「二灯園」にやられるの。一週間お米を持って人の嫌がることをするという修行に行きました。そこでは道路の掃除や、五軒くらいの家のトイレを拜んで掃除させてもらう「行」をしました。

## ぞーっとした解剖

神奈川県立厚木高等女学校を出て、昭和一〇年、帝国女子医学薬学専門学校医学科(現、東邦医科大学)に入りました。嫌だったのは死体解剖ね。人間の腕とか、脚とか、全部ホルマリン漬けになっていて、甕かめに入っているんです。解剖の先生がね「中倉さん脚を持ってらっしゃい」と言うの。ぞーっとしてしまふのね。それを階段教室に持って行くの。髪の毛を束ねてぼっちゃりした女の先生で足立あだち先生、すごくきついんです。簡単に脚なんて言われても、脚がぶった切りされていて、恐る恐る持ちあげました。初めの頃はいやな思い出です。臭いが残つてご飯が食べられないの。一、二年生の頃でした。

京都の「二灯園」

京都市山科に一九〇五明治三八年に西田天香が創立した托鉢、奉仕、懺悔の共同生活を送る修養実践団体。大正年間に信者が急増、一九二一年に出版した『懺悔の生活』はベストセラーになった。全国に光友会組織がある。

一五年三月の卒業後、付属病院助手を経て、伝染病研究所で勉強しました。そこでも兎などの解剖をよくやっただんです。血液全部を抜きとると最後には兎が震え、そして痙攣をおこすの。

## 綾瀬村の医師になる

昭和一七年に厚木の寺田医院の跡継ぎになって欲しいと請われ、養女になり医師としてスタートしましたが、結局中倉の姓に戻りました。昭和一九年、お医者さんが戦時召集で、高座郡綾瀬村が無医村になって困ると言われ、その紀医院きのいいんに行きました。自転車に乗れないうちは、リヤーカーに乗せてもらったり、相模野航空隊の兵隊さんの自転車の後ろに乗せてもらいました。

綾瀬村の人たちに「せんせ、先生」って大事にされて重宝がられました。村のなかに飯場がいっぱいありましたね。やたらにひとりでは歩けないところでした。飯場で往診を頼まれると怖くて、大声を出し、さも強そうな医者に見せかけるの、覚悟を決めてね、女でしょう。いないもん、そんな人！

昭和二〇年、戦争の終わりの頃なので、空襲も受けました。平塚の町が燃えるのを見ましたね。厚木基地に近い綾瀬の村には米軍艦載機の機銃掃射きじゅうそうしゃがあつて、それを見てショック死をしたおじいさんもありました。

## 紀医院

一八八九(明治二二年)、当時無医村だった綾瀬村に紀憐治が初めて医院を開業した。この頃の院長は紀喜作で、中国東部に出征中だった。

## 相模野航空隊

綾瀬村、大和村に戦時中は厚木航空隊と整備士養成の相模野航空隊があり、休暇には隊員たちが民間に下宿して憩いと、交流をしていた。

田舎だから、ブンブンという虫が耳に入ったり、鼻の穴に豆を入れたり、いたずらしてドングリなどの実を入れてしまったりする人もいて大変でした。

変わったのもあったね、婦人科の患者さんでわたしが綾瀬に行って一週間ぐらいのときでした。お腹が痛いと言って真青になって、七転八倒しているところに呼ばれてね。秦野の産婦人科医の八木先生をよく知っていたので、電話でやっと連絡がとれ、自動車でやかんに水を入れて患者の口をぬらしながら、綾瀬から遠い秦野まで付き添って行きました。八木先生がお腹を開いてみると、なかは血液でいっぱい、卵巣破裂でした。

そのうち患者が痛い、痛いと言いだして八木先生は「助かる、大丈夫だぞ。君の恩人は中倉先生だぞ」と言ってくれました。綾瀬の自動車工場の奥さんでした。すぐ対応したのでよかったです。

### 戦争末期に結婚

紀医院に勤務中、海老名村望地（現、海老名市望地）のお米屋さんのおばあさんのお世話で、わたしは見合いをしました。兄がビルマに出征して生死不明なのでお婿さんを迎え分家をしたんです。お相手は駿河銀行に勤める山田義盛（よしもち）さん。国学院大学を出て神主さんの資格を持ち、村長をした人の三男です。お見合いの

とき、仲人さんの家でおいしいものをいろいろ出されても普通は遠慮して食べないでしょう。でもわたしはそういうことないので、「おいしいわね」と言つて食べたのよ。

結婚式は一九年、戦時中で大げさにはできませんでした。自分で黒くろ縷じゆす子のモンペの上下を作つて着ました。写真だけは振袖姿で撮りました。

夫は結婚後、父の希望で歯科医師免許を取るため日本歯科大学に入学しました。お父さん学生で物資も不足な時代でした。勉学も何かと努力していました。音沙汰なかつた兄は二一年無事に復員しました。長男が二一年、長女が二五年、二女は二七年に生まれました。

あてがはずれたのは、すぐおとなしそうな人で大丈夫かなあと思つていた夫は全然違つてました。気性が激しくて気に入らないと、お膳をひっくり返し、お箸などばりばりつと何回も折られました。今だつたら大変ですね、許されないですね。それが男の威厳だつたんでしょね。

でも歳とつてからは、お花と盆栽が大好き。歯科医なのに坊ちゃん帽をかぶつて、手拭いを腰にぶらさげ、長靴を履き、大好きな格好で出てゆく。平塚の盆栽市に行つて、誰かが「あれ先生だよ」と言つと「ほんとかよ、ほんとかよ、あれで医者かよ」「そっだよ」、そんな姿で行くの、それを得意にするような、ざつくばらん人でした。

## 育児をしながら保健所勤め

昭和二三年一月、保健所に医者がないので、代わりの医師が見つかるまでと頼まりました。父にも社会のお役に立てるならと勧められて、三人の子育てをしながら厚木保健所に勤めました。よいお手伝いさんを探して、家や子ども面倒をみてもらいました。その頃の保健所は旭町の熊野神社の近くで、平屋で大きな銀杏の木があつて、お昼どきは授乳に帰るの大変だったのよ。初めはあまり仕事に馴じめず、「所長さん、辞めさせてください」とせがんだこともたびたびでした。しかし公衆衛生などの研修会に、何度か出張させられるたびに、なるほどこういうふうになればいいんだなと、しだいに生きがいを感じるようになって来ました。昭和二三年から四五年六月まで予防課長を務め、母子手帳に中倉千鶴子の職責印をずうつと捺し続け、保健衛生指導にかかわってました。

夫に泣き言をいうこともありましたが「それならば、辞めろっ」と怒られました。しかしここまでやってこられたのも、夫の協力あつてのことでした。わたしが所長になったときも、奨励賞をもらったときも、兄妹たちは「義盛さんのおかげよ」と言ってくれました。

## 神奈川県保健所女性所長第一号

昭和四六年六月、津久井の保健所に所長として赴任しました。わたしがバスを降りたら「先生、写真出ていますよ」と言われて見ると、神奈川県的女性所長第一号だったので、大きく新聞に載っていたんですね。

これまでいろんな保健行政のなかで、レントゲンを見るとか、一人で全部していたんですね。それが所長になると、さらに仕事が増え大変です。それに監査があつて県庁などから大勢みえて緊張しました。伝染病も出るし、コレラ菌が相模原の川に入つて、各所の川の水を採つて衛生試験場に持つて行つて検査しました。疑いのある家を廻るんです。近所に知られないように、白衣を新聞紙に包んだりして気を遣いました。

あるときは丹沢の山の中でドラム缶が錆びてしまつていて、確認に行つて降ろすか、どうか、その指示のためにわたしが現場まで行きました。今までの所長はやつていなかつたようです。

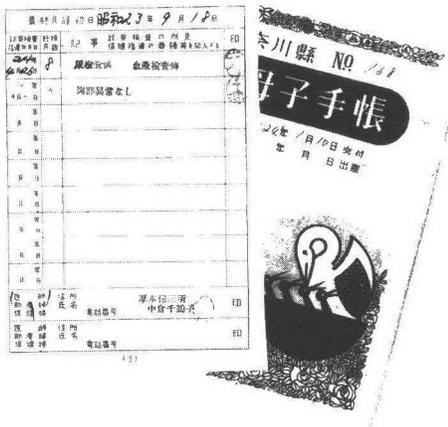
保健所に勤めているあいだに津久井ではずいぶん山歩きを楽しみました。わたしはズボンもキャラバンシューズも履いたこともなかつたけど、初めて履いたときは重たくて足が上がるかと思つたら大丈夫でした。それから山歩きが好きになりました。



二〇〇二年、防災公園にて

「先生長くいてね」と言われ、わたしも津久井は緑がいつぱいいいところでしたので六年間もいました。山のでっぺんから富士山が見えるの。丹沢山塊には三つ葉つつじがきれいに咲いていて、ピンク色で印象的でした。

五二年に定年退職して、それから山歩きを楽しみ、油絵を描いたり、詩を作ったりしました。写真も陶芸も大好きで、朝夕に庭の草花と語り、水やりしながら趣味に生きています。



聞き取り

二〇〇二年二月二日

# 老舗「菊屋政房」を継ぐ

やまもと  
山本 多満

「今日は厚木のどこまで行きやる わたしや菊屋の餅買いに」という荻野村の  
わらべ唄がありますが、それがわたしの店です。

今から一七〇年ほど前の天保二年に、渡辺華山が弟子を連れてこの厚木に来られ  
ました。滞在中にその様子を書き残しておられますが、それが『游相日記』で  
す。滞在最後の日に厚木を写生された六枚の絵が残っています。それが「厚木六  
勝図」です。そのなかの一枚「仮屋ノ喚渡」を参考にさせていただき、わたくし  
どもの包装紙のデザインを考えました。

## 二〇〇年前に開業

初代菊谷弥七は名古屋から天明元年にこの厚木へ来た菓子職人でした。当時の  
厚木宿の横町に店を持ちました。寛政一年のことで、今から二〇〇年前です。

一九一八（大正七）年

五月九日

愛甲郡厚木町生まれ

厚木市寿町在住

渡辺華山

（一七九三—一八四二）

蘭学者で日本画家。父は三河  
国田原藩士で華山は江戸屋敷  
内に生まれる。父が病身で、  
貧しい生活を助けるために画  
を学ぶ。しかし、洋学者への  
弾圧事件、「蛮社の獄」で投獄  
され自刃する。厚木を訪れて  
一〇年後のことである。  
一八三二（天保二年）九月、弟  
子を伴い「小江戸」と呼ばれ  
ていた相州厚木へ旅した。

『游相日記』

渡辺華山は当時繁栄していた  
厚木に数日間来遊、滞在し、  
その折に「厚木六勝図」を描  
き、旅行記として有名なこの  
『游相日記』を書きとめた。

初めは菊谷といいました。現在の山本姓は五代目からです。菩提寺は五〇〇年以上続いている海老名の海源寺かいげんじさんです。今年（平成一五年）は江戸に幕府を開いてから四〇〇年ということですから、その前からです。このお寺にある我が家の墓石の裏には歌が彫つてありまして、以前、拓本をとりました。

今は息子と、孫も大学を出てからお菓子の学校へ行きまして、いっしょに店をやつていてくれます。わたしの祖父も婿で綾瀬の出身ですし、父も、夫も婿、と続いています。わたしは生後すぐに母トリの姉であるイトの養女になりましたが、イトは病弱で、その上お店の使用人も多かったので、台所のほうは生みの母が仕切っていました。大きな家でみんないっしょに住んでいました。ですからその頃は、わたしがお店の跡取りなんて考えずのんびり育ちました。女学校三年のときこの養母イトが亡くなり、そのあとに来たのがトシです。

### お店で働く人たち

お店の使用人は修業の年季がくるとやめていくんですが、そんなときわたしは親と別れるよりつらかったんです。とくに奥女中さんには親身になつてよくめんどろを見てもらつたせいかわかれるときは泣きの涙でした。奥女中さんたちはいつもお太鼓を締めていました。半幅帯で紺緋の着物を着ていたのは台所の女中さん

#### 〔厚木六勝図〕

嵐山は厚木を発つ前日の九月二三日、斉藤鐘輔（さいとうしょうすけ・書家・漢詩人）らにさそわれ、熊野森から桐辺堤に至る厚木の六勝を見に出かけこれを写した。六勝図とは、「雨降ノ晴雪」、「飯屋ノ喚渡」、「相河ノ清流」、「菅廟ノ驟雨」、「熊林ノ曉鴉」、「桐堤ノ賞月」。

たちでした。

お店の裏に大きな座敷がありまして、そこ二階とに使用人は住み込んでいたんです。女中さんたちの部屋と家族が寝ている部屋とのあいだには廊下がありました。目の届くところだったんですね。

年末年始のお店の様子はとても印象深く覚えております。

使用人の男の人だけが、工場の板の間に座り、とんとことんここ大根を切ったり里芋の皮をむいたりして年瀬らしい賑やかな光景でした。できあがった料理は元旦に男の人が神棚に供えるんです。それが済むとこんどはお得意さん廻りです。

行李こよりに手ぬぐいと半紙を入れ、唐草模様の大風呂敷でその行李を包んで、それを首から下げた小僧さんが、角帯を締めた番頭さんのあとについて行きます。番頭さんが新年の挨拶をすると、小僧さんが中から手ぬぐいと半紙を差し出すんです。お正月のいつもの風景でした。

わたしが小学校の頃はまだ着物に羽織、下駄をはいて通学しました。学校で式などのあるときは、大きなリボンを頭につけ、えび茶色の袴をはいて行きました。そのリボンなんです。厚木には売ってなかったんです。親がわざわざ東京まで買いに行ってくれました。まだ小田急線が開通する前のことで、朝、星があるうちに家を出て茅ヶ崎へ行き、東京の日本橋までまいりました。ですから、だ

菊屋政房の半纏



れもがりボンをつけてたわけではなく恵まれていました。

うちの筋向かいには乗り合いバスの会社がありました。当時は今のよう大きなバスではなく、小さなバスですがいくつか会社がありました。「万便社<sup>まんべんしゃ</sup>」という会社を覚えています。タクシーはまだありませんで、人力車が通っていました。戦前のことです。

## 震災で命拾い

大正一二年九月一日の震災のときは、まだ五歳ぐらいでしたが家がつぶれたのでよく記憶しています。ちょうどお昼どきでした。父（義父）は常日頃から「地震がきたらすぐ火は消せよ」と言っていましたので、うちからは火は出しませんでしたし、従業員もみんな外へ出たんです。ところがわたしは軒先のちょうど下になって、からだの半分は外、半分は内となっちゃったんです。さいわいにお隣が石屋さんで、ジャッキで屋根を持ち上げてもらったおかげで、命拾いしました。母は二階の階段を下りるとき踏みはずして、膝からくるぶしまで大けがをしました。及川の森久保先生に長いことお世話になりました。さらし一反がその傷に入っちゃったんですって。そんなひどい傷でした。

しばらくは、どこへ行くにもあつちこつちのつぶれた屋根をまたぐように越え

### 当時のバス会社

関東大震災のあと、厚木方面には、〇〇自動車商会というバス会社が、五、六か所にできた。万便社もその一つ。行き先はそれぞれ異なり、客があれば運行するという、どれも数人の客を乗せるだけの乗り合いバスであった。

### 関東大震災

一九二三（大正一二）年九月一日の正午、関東一円に起きた大震災。地盤の弱い相模川のデルタ地帯にある厚木町は一瞬のうちに建物が崩壊、壊滅。道路、堤防も被害が甚大であった。

厚木町が一年後に建立した記念碑「ああ、九月一日」には町内一〇〇八戸のうち全壊五四九戸、半壊二〇八戸、焼失二五一戸、死者二八名、負傷者六四名と記されている。

て行きました。お近くで亡くなられたかたもあつて、その後は毎年九月一日には、そこにお線香をあげていました。もうあれから八〇年になるんですね。

震災でみんなを助けたとき、その血がついた半纏はんてんを父はずっと大切にしています。あのときお稻荷さんは無事です。今もあの当時のままです。わたしたちをお守りくださっています。

たのしい思い出はお天王様のお祭りでした。七月一四日が宵宮、一五日、一六日と三日間は、お店の前に縁台を出して通る人にサーブしました。大きなお釜にお湯を沸かして、仕事師さんに頼んでお茶をふるまいました。とにかく店の前は人でいっぱいになりました。お神輿みこしがお店へなだれ込んで来るんです。すごいんです。お店ではご祝儀を用意しておきます。神様ですから、二階から見下ろしてはいけません。お神輿みこしがお出かけになることを、渡御とぎよと申しますが、白い布を肩からぐるぐる巻いて禪ぜんで担かぎ、水に、ここでは川に入るんです。お客さんがたくさん来てくださることは、お店にとつて大歓迎です。

お正月もまた人出の多い時期で、伊勢原の麴こうじやの麴こうじを売っていました。田舎からのお客さんが、とくにたくさん麴を買って行かれました。「あの頃は、大量に緑茶を使ってくれたねえ」とつい先日、「茶加藤」(老舗の茶店)さんが話されました。お菓子お菓子の材料として使用したんです。わたしの幼い頃のことです。

#### 天王まつり

天王森と呼ばれた午頭天王社は古く相模川の洪水の鎮めとして祀られていた。町を発展させるため江戸時代より村民により、この天王森の祭礼は盛大に催されていた。

明治期は馬市、糸市など六月であったが、改暦で七月となった。露天商や興行師(香具師)も多く集まり「全国縁日案内」にも記されている祭礼の一つだったという。

## 結婚、そして店の統制

昭和一四年二月、大東亜戦争が始まる二年前でした。夫、総三郎そうざぶろうは二九歳、わたしは、二二歳でした。お天王様（厚木神社）で式を挙げ、若松屋という近くの料亭で披露宴をしました。わたしはお振り袖、夫は最初は紋付袴で、そのあとモーニングに着替えました。そのときの結婚指輪はすぐあと、戦争中に供出してしまいましたけど。その当時は持ってきた品物をお店に飾る習わしがあつたんですよ。父は「うちはそういうことはしない、見せ物じゃないから」と言つて家の中に飾りました。ご近所では米俵まで飾られた家もありました。髪はこうがいで角隠つのかぐしでした。髪結いさんは母のお友だちの萩原千代子さんにお願ひしてあつたのですが、ちようど萩原さんご自身がお産でね、荒井さんにしてもらいました。

戦争が始まつてからはお菓子の材料は配給でしたし、職人はいないし、材料は統制され、和菓子どころではありませんでした。作つたお菓子も店では売ることができないで全部決められたところへ持つていき、そこで配給されたのです。もちろん作るお菓子もきめられていました。配給された砂糖で飴を作つたのです。銅板の鍋の中にどろどろの飴を流し、水を張つた盥よらいにこの鍋を入れ、それをくるくるまわし冷めてきたら台の上に広げ、布を巻いた柱にそれを引っばるようにして立て、白くなつたら鉄板の上に乗せてころがし、ポンポンと切ります。職人た

大正初期の店先



### 統制下の商人

昭和一六年に入ると物価も統制され、業者も統合され、衣食住のすべてが配給制になつた。商人の多くも青壮年層は出征したり軍需工場に動員され、厚木町の商店の大部分が店を閉め休業状態になつた。

ちはみんな兵隊にとられてしまっていましたから、主人とわたしが中心でやりました。

配給の粉ではクッキーを焼きました。オーブンも石で作ってあって、その中の型に入れ、火の前に座って焼いていたんです。その最中に空襲のサイレンになると大急ぎで火を止めて逃げました。うちの裏に防空壕が作ってありました。そこに機銃掃射きじゆうそうしやを受けたこともありまして。弾が石に当たって跳ね返って。どなたにも当たらなかったのはさいわいでした。B29が頭上を編隊で通過して行くんです。「あんなに編隊を組んでみんな東京へ行くのかねえ」と話してました。

中津の飛行場にも菓子を納入していました。主人が毎日リヤカーをつけた自転車で運びました。中津川に落ちて助けられたこともありまして。

わたしは戦中に三人、戦後に三人、お産をしました。今から思うとあの頃がいちばん大変な時期でした。三人を防空壕へ連れて行くんですが、三番目の子を壕の中へときどき忘れちゃうんです。お風呂の脱衣の籠に入れて運びました。

自分たち家族の食糧さえ足りない毎日で、子どもをリヤカーに乗せて親戚の農家へ野菜をもらいに行ったり、ぎゅうぎゅうづめの小田急に乗り、父の実家の高森へ行く途中、駅から歩いているとき機銃掃射に遭い、やつとの思いでお米ももらって来たこともありまして。

主人が戦争にとられなかったことは、ほんとうにさいわいでした。わたしのお

仲間は、ご主人を戦争で亡くされたかたがずいぶん居られます。主人の兄も五人の子を残して戦死してしまいました。戦後の妻の苦勞は並たいていのものではありません。

## 再び店売りの菊屋に

戦後、父はからだがめつきり弱くなって、お粥しか食べられなくなっていました。いちばん食糧事情がひどいときでした。野菜はくずだけ、大根なんか入れれば上等でした。芋の蔓をきざんで入れ、お米はパラパラで箸が立ちませんでした。もと小作人だった人にお米を頼みに行つたとき、「敗戦株を持つたと思つて諦めんだ」と言われたことを、父はとても悔しがっていました。

母トシは、懐手をして歩くような男まさりの人でした。政治が好きでした。厚木実科高女の二回生でした。義侠心があつて、お金が無くて床屋にも行けない子を床屋に連れて行つたりしていました。今の民生委員のはしりみたいにあれこれ助けていました。お役もいろいろしてました。わたしの子どもたちの躰や学校のこととも母任せでした。長男が小学生のときのこと、先生に叱られて頼にインクかなにかをつけられて帰つて来たたら、校長先生のところへ抗議に行つたこともありました。

大店のおかみさんですから、お店のことはほとんどしませんでした。厚木高女の常盤会ときわかいの初代の会長もしました。わたしにはやかましく言わなかったです。

戦争中の配給制が解かれやつと店売りの菊屋にもどつて、商売も子育ても順調に続いていたのですが、そんなある日、夫が脳溢血で倒れたんです。五二歳でした。わたしはお店をやりながらの看病の日々になりました。さいわいなことに長男がお店を継ぎ始めたときでした。ほかの子どもたちも、お店の人たちも、とてもいっしょけんめい支えてくれました。「二三年間の看病の末、亡くなりました。それからもう一七年経ちます。

「鮎せんべい」は戦前からのお菓子です。戦後になつて「鮎最中」を出しました。三六年に、これが神奈川県観光みやげ品の最優秀賞になりました。渡辺崋山が厚木に来遊した記念の碑が相模川畔にできたのを記念して「崋山」を発売しました。

和菓子店も時代の流れで廃業する店も多い昨今でございます。昔からの伝統を守りながら新しいものも取り入れてと、老舗を守っていくのはなかなか楽ではありません。職人制度から製菓学校へと修業の仕方もすっかり変わりました。住み込みもなくなり職人さんは近所から通うようになり、さらに今は家族中心でやっております。未永く、作り続けたいと思っております。

#### 常盤会

現、神奈川県立厚木東高等学校の同窓会名。同校は一九〇六年に愛甲郡立女子実業補習学校に始まり、一九二三年に県に移管された。当時から「ときわ」という会報もあつたが、同窓会を「常盤会」と命名したのは一九五四年からで、山本トシが初代会長をつとめた。

#### 聞き取りの日に



#### 聞き取り

二〇〇二年五月二三日  
二〇〇三年三月一〇日

## 土建屋の社長を二六年

おの  
大野 テイ

「砂利屋を群馬県でやるから、ここは、お前が社長になれ」と、昭和三九年に突然夫に言われたんです。そのときから二六年間、平成三年に次男の治雄はるおに譲るまで社長でした。

わたしが生まれた比々多（現、伊勢原市比々多）は、昔は田畑等分の良いところって言われてました。昔は畑は安くて田んぼは値が高かったんです。で、比々多のあたりは、わりと裕福なところということだね、温暖だし、その人たちの生計は良かったんですよ。だから、わたしが中津へ嫁ぐといったら、「なんで、あんなところへ行くの」と言われました。

わたしは八人きょうだいの五番目で初めての女の子ということで、おばあちゃんがとても大事にしてくれ、つきつきりでいたらしいですね。

曾祖父は名主制度が終わる前の最後の名主だったと聞いています。いつも羽織姿でみんなを仕切っていたようです。祖父の代には、小作人に貸していた土地もありましたが、父の代になり戦後の農地改革で取られ、残った土地より手放した

一九一九（大正八）年  
一月三日

中郡比々多村白根生まれ  
愛甲郡愛川町中津在住

### 名主制度

名主は身分としては百姓だが、一段高い階層に属し、着衣や履き物にも特例を許されていた。主な仕事は、村民の統制と保護、村を代表しての他村との交渉など。一八七二（明治五）年、新行政区画としての大区小区制の発足により廃止された。

ほうが、よほど多かったようです。

## 世間知らずの娘

小学校を卒業して高等科に入つて一年後、伊勢原にできた実科女学校へ編入したんです。父がわたしを平塚の裁縫の学校へ上げようとしたら、この女学校の校長さんと伊勢原小学校の校長さんが頼みに来られ、特待生として是非入つてくれと言われたんですよ。とうとう、卒業まで月謝は払わなかつたですよ。子女の教育にとても熱心な校長さんでした。初めのうちは、お寺を借りていたんです。わたしは四期生でした。

専攻科とその上に研究科がありましたね、小学校を出てすぐの人は、専攻科といつてましてお裁縫が中心でした。でも家の近所の友だちは一人もいませんでしたねえ。同期の友だちはあの頃は、六年生が終わると奉公とか製糸場へ行つたんです。ところが、それがどういふことか知らなかつたんですね。今考えてみるとまったく世間知らずで育つたなあと思いますよ。その後、ずっとたつて現在の建設業の社長になつてからですが、幼い頃のわたしを知っている人が「テイさん、こんなにバリバリやるような子どもじゃなかつたなあ」と、驚かれました。

研究科を卒業してからは、ずっと家にいました。青年会とか、処女会とか聞いて

### 農地改革

一九四六（昭和二二）年、連合国軍の占領下を実施された改革で、不在地主の全貸付地、地主の保有限度を超える部分を国が強制的に買収し、それを小作農に売り渡すなど二年で完了させた。これによつて地主的土地所有制度は基本的に解体され、自作農制度ができた。

### 伊勢原の実科女学校

一九二八（昭和三）年、中郡伊勢原町の大福寺に私立伊勢原実科女学校が開校。その翌年、伊勢原町に移管認可、一九四九年、県に移管。現、神奈川県立伊勢原高等学校。

たことはありませんが、そういう集まりにはまったく入ったことないんです。村のお祭りにも行かせてはくれない父でした。そこは不良が集まるころと思つていたんです。また家事もたいしてした覚えがないんです。

母は父にはなんでも「はい、はい」と、仕えていました。「女は新聞など見なくてよい」と言うような父でした。

あの頃、暮になると小作人が荷車を引いて俵を蔵に入れる様子などは覚えています。気楽に暮らしてたんですね。ですがお嫁に来てからその分大変苦労しました。記憶にあるのは、兄四人、第一人みんな戦地（北支、ニューギニア、フィリピン）へ行つてしまつたんです。それでわたしはせつせとよく慰問袋を作り、郵便局へ運びましたよ。

## 一回のお見合いで結婚

その頃は結婚適齢期の男たちは戦争に駆り出されてしまい、トラック一台の女に男一人などという大変なときでしたよ。東京からの結婚話もあつたんです。とても空襲の激しい東京なんかにはやれないと言つていました。そんなとき中津の大野孫一まごいちとの話が持ちあがりました。今は土建というのですが、その頃は土方ですよ。それに仕事なんかまったく無くてね。中津は、当時、中津飛行場があつて

### 慰問袋

日本の国内から戦地の兵へ慰問のために送られた袋で、家庭で手ぬぐいを二つ折りにして作つたりした。中には武運長久のお守り、薬品、たばこ石鹸、缶詰などの日用品と慰問状が入れられた。兵士と差出人との間で文通が行われた。日露戦争のときにすでにあつたという。

### 中津飛行場

神奈川県の中央部、相模川とその支流の中津川に挟まれた台地で北半分は愛川町、南半分は厚木市に属し、関東ロー厶層で一面桑畑であつた中津に太平洋戦争末期に陸軍飛行場が設けられた。その跡地に一九六六年、県企業庁により内陸工業団地が造成された。

ね。現在のこのあたりはその跡地ですよ。「あそこは鉄道も敷けるし将来は絶対いいぞ」と言われたりしていました。五人の息子たちを戦争にとられていたので、娘のわたしは父母にとつて大事な子どもだったんで遠くへ手放したくなかったんでしょう。両親に頼られていました。

大野が一度わたしの実家へ見合いに来てね、父がすぐオーケーしたんです。デートなんて一度もしませんよ。土建といつても百姓もかなりやっていましたが「百姓なんかなんにもやらなくていいよ」ってね。「家の中も、ちよつと掃除を手伝うくらいのことでもいいよ」とも言われました。まわりも「あそこの家は金はあるしよ」と。親はなによりも安泰を望んだんでしようよ。そんなにお金があるつて聞いてたけどそのお金、一銭もみたことなかったですよ。

夫は一九歳で志願兵で中国（北支）へ行つていました。そして復員した年の一〇月、昭和一九年、結婚しました。

母は振り袖とか江戸袴えどづまとか作つておいてくれたんですが、戦争中のことでどれも着なかつたんです。ひっかえしというのを着て、自転車の横に車をつけたようなのに乗つてね。朝四時に起きて髪結いさんで島田に結ってもらつたんです。嬉しいより寂しいという思いが強かつたような気がします。

翌年四月、夫に今度は赤紙が来て出征しました。実家に挨拶に行つたとき「子どもでもできていればねえ」と母が言ったのをよく覚えています。このとき大野

ひっかえし（引き返し）  
表地と同じ布地を裾まわしにした長着で、裾まわしの分だけ表地が多く使われているので、ぜいたくな着物とされていた。

家には、こじゅうとが五人。下から一一歳、一二歳、一五歳、一七歳、二〇歳でみんないっしょに住んでいて、食事も作りそれこそ今までの生活から一八〇度の転換でした。なんとか苦勞を乗り越えられたのは実家の父がとても厳しかったからかと思うんです。「いちど嫁いだら絶対に戻ってくるな。帰るときは白装束しろしょうぞくで帰れ」と言われていました。白装束というのは死衣装のことですから。

### 継いだ事業は負債から

家業は主にしゅうとがやっていたけれど土建の仕事はあまり無かったんですよ。ただ、飛行場を作ったときは、先頭にたつて、牛車を引いて、砂利を一日二〇〇台もここへ運んだそうです。

戦後、忘れもしない昭和二六年六月一日に、夫が「大野組」を父から受け継いだんです。これには、わけがありましてね。戦後の新しい法改正になっていたんですが、しゅうとはそういうことを知っていられなくて、昭和二〇年から二五年までの仕事を税務署に申告しなかつたんです。もつとも、たいした仕事も無かつたんですが、たまたま、その頃三田さんだの田んぼの取り入れ口に川を堰き止め調節するという工事を三田の組合で発注したのです。三田水利組合といいました。その仕事を受けたわけです。その仕事の処理が、会計検査で調べられ、不備があつ



聞き取りの日、庭で

たらしいんです。工事そのものが悪いんじゃないやなくて、その組合の処理の仕方がまずかったらしいのです。

その工事をやった「大野組」というのは、どこにも申告していない。つまり申告していなかった過去のことで、この五年間の無申告重加算税というのを取られることになったんです。二五万円払えといつてきました。それでしゅうとには、もう資格が無くなったんです。そこで、その負債を、夫が受け継ぐことになりました。今、会社の入り口に、初代社長「孫一」と書いた夫の銅像がありますがね。

新円切り換えで、長年貯めていたお金も価値がなくなり、しゅうとは無念でいられたでしょうねえ。不在地主ということ、土地も取られたし、飛行場にも一三反とか、ただで取られたようなもんでね。何年もかかって五〇万くらい払ったんじゃないでしょうか。その頃しゅうとは六〇歳代でしたから、今思うにまだまだ息子に譲りたくなかったんじゃないかと。

やむをえず息子に譲ったけれど、一方譲られたこちらも楽じゃなかったですかなね。

つまりわたしたちは、借金から始め、夫婦二人三脚で、朝の五時から夜一二時まで、五人の子どもを育てながら夢中でやってきました。

#### 新円切り換え

一九四六（昭和二一）年、二月の金融緊急措置令に基づき三月三日以降通用させた新日本銀行券を世帯主は三〇〇円、その他は一人一〇〇円に限り新円に交換し払い出しさせた。旧券は金融機関に預けさせ封鎖預金とした。

## 家族との別れ

親より先に死んじゃだめ。わたしはね、今しみじみ思うのは、かけがえのない命だけは、何としても落としてはだめということなんです。物が無い、お金がどうのじゃないの、命だけは、って思うんですよ。

世間では三歳のお祝いをしますでしょう。わたし、二歳の娘を川で事故死させてしまいました。三歳を祝ってやれなかった。今の社長である治雄が、六月一日に生まれて、お産の肥立ちの幾日も経たぬ七月七日のことでした。わたしは二八歳でした。葬儀のとき実母から、「あんたには、二人の子がいるんだから、こんなことじゃ育たない。いいかい、生きている子を、しっかり育てるんだよ」と言われたんです。わたしは三八キロの痩せたからだになっちゃって、目はへこんじゃって、二人の子どもを両脇に寝かせ、栄養もとらず、睡眠時間もなくて、よく生きているという状態だったんでしょう。この言葉に、目を覚まされた思いでした。そのとき母は、子を失ったその責任をわたしに何も問わずにです。はつと我にかえったんです。

とにかく、暑い最中、一週間以上、着たまま、ご飯も喉を通らないんです。口まで食べ物を持っていくんですが、どうしても食べられないんです。生まれたての次男の治雄を抱いていて、たくるほど（滴るほど）出ていた乳が一滴も出なく

なつちやったんです。桑テンボで、燃やして火をおこし、お乳を沸かすんですが、お腹のすいている赤ん坊は泣くでしょう。このまま、くれちゃおう！つて、絞りに立ての山羊の乳を飲ませたことも何回もありました。

わたしたち若いもんは、お金、財布を持つこともなく、それにお金もなかったからね。これは事業を受け継ぐ以前のことでしたが、受け継いでからも借金でしたから。

その後、主人が四七歳の若さでしゅうとより一年先にあの世に逝ってしまいました。

それから一二年後のことです。亡夫の一三回忌の相談、取り決めなど長男と二人でやりました。この法事の一〇日前、長男が県庁へ入札で出かけることになり、相鉄がストをやるからというので、その前日、横浜のホテルに一泊したんです。ところがその夜、心筋梗塞で突然に息子が倒れたんです。翌朝、県庁から「大野さん、入札に見えてませんよ」と電話。「えっ、ホテルから出ているはずですよ」。交通事故にでも遭ったのかなあと思ったのです。その一五分後、「大野さん、驚かないでくださいよ。息子さん、亡くなっておられます」と。気が狂ったようになつて、みんながわたしを抱きかかえるようにしていました。昨日元気に家を出た息子がお棺に入つて帰ってきたのです。そのとき、息子は四歳、三歳、一歳の父親になつていました。

桑テンボ  
桑の木の枝で薪の代用として  
使われた。

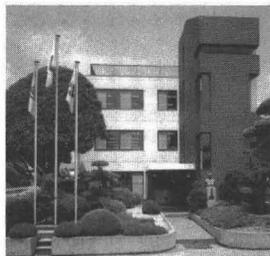
この孫たちも今は社会人になったり結婚したりしています。先日、曾孫が生まれました、その席で、この姿を息子に見せてやりたかったと涙ぐんでしまいました。

## 女社長として

予感がしたのか夫から、「お前がこれからはこの社長になれ」と言われたのは、亡くなる一年前のことでした。そして平成三年、次男の治雄に譲るまでの二六年間、みんなに支えられて、どうにかやってきました。今ならともかく、あの頃は、仕事はすべて男たちに牛耳られていたんです。ずうっと水面下で男たちだけで決めちゃうんです。どんな正論吐いたってだめなの。悔しいなんてもんじゃないですよ。今と違って談合ついでなので決めるんです。「ここまで、わたしたちがやってきたので、その続きを」なんて言つたついででね。わたしは飲みにくいわけじゃなしね、男の人たちは、そういうところで話してきて、「籤くじで引きましよう」なんてやるんですよ。昔の裏話ですがね。籤を作っちゃうのよ、前もつて。全然それを開かないで「誰だれさん勝ちました」「誰だれさん負けました」つてね。開いたとしても、既に決めてあつてね、それを牛耳るのが男のボス、女なんか相手にされませんでしたよ。



代表取締役会長のとき  
社長室にて



大野建設本社ビル

ああわたしが、こんななかでいくら力んでもだめだと思い、それで大手の下請けを頼み、そこに入ったんですよ。たとえば五本仕事があつても、二本ぐらい不正で決められちゃうと、なかなか仕事はこちらにまわつて来なくなるでしょう。公共事業が無くても民間の仕事でなんとか続けられました。今は働く人も前のように地方からの出稼ぎはいませんし、質の良い土方なんていなくなりました。

飲んでの付き合いはしないし、できなかつた。そして女の甘えは自分にも許さなかつたんです。「仕事はきちつとやれ、認められる仕事をしなさい」って言い続けました。そして社員はもちろん、わたしの周りの人々が、かげになり、ひなたになり、みんなで支えてくれたおかげでなんとか息子に譲るところまで頑張つてきました。

県からも町からも何度も表彰されました。建設関係の表彰は仲間うちでは一番多いかと思えますよ。そんななか「あなたは夫を亡くし、長男を亡くし、それでも子どもの教育とこの商売をよく続けてこられた」という内容の表彰もありましたね。

女だから応援してやろうなんて、同業者の中には、なかなかそんな度量の広い人はいませんでした。自分のことでみんな精一杯。世の中そんな甘くないんです。大事なのは、会社の姿勢ですよ。わたしもきついところがあつたんでしょうねえ。なにもまくしたててなんてことはしませんけどね。理にかなっているものなら

「たたいても取ります」って言ってね。そういう気持ちでやってきました。若さもありません。それに健康にも恵まれました。

先日、菩提寺である清源院<sup>せいげんいん</sup>へお墓参りをしてきました。薄暗くなりかけた境内で、御前様と呼び止められ、「大野さん、あなたは、ご先祖に感謝なさるんですよ。あなたを生んだご先祖に感謝しなさい」って言われるんです。ああそうだなあ、実家のお墓参りもしなくては思っただんです。こういう丈夫なからだをいただいていることに感謝しているんです。

清源院

厚木市三田にある曹洞宗の古刹。東福山清源院、本尊は薬師如来像。

聞き取り

二〇〇二年二月五日

二〇〇三年一〇月二一日

## 政治家の妻になろうとは

甘利あま 千代子ちよこ

一九一九（大正八）年  
一月四日  
高座郡大和村生まれ  
厚木市山際在住

生家は当時の大和村、今の大和市上草柳かみそうやぎの地主で、旧姓は井上です。わたしはひとり娘で、あと七人は弟たちでした。わたしたちの祖父が日清戦争で明治二八年に台湾で亡くなっているのです。まだ父が一歳にならないときでした。父には姉がいましたが、数え年一九歳で亡くなつたんです。ですから祖母は、わたしを自分の娘の生まれかわりのように思っていました。

### 「しあわせの子」といわれ続けて

わたしが今こうして元気で、どんなことにもめげずにいられるのは、「千代子はしあわせの子なんだよ、千代子はしあわせの子なんだよ」といつもみんなにそういわれ、とくに祖母には宝もののように育てられたからなのでしょう。子どもへの暗示というのは、とても大事ですね。

当時は、年間二〇〇貫ぐらいの繭の収穫があり、桑の太さが五センチ以上、天

#### 日清戦争

一八九四（明治二七）年から翌年にかけての日本と中国（清国）との戦争。日本が近代になって初めて経験した対外侵略戦争で、神奈川県の犠牲者は二二三名だった。

#### 繭

春・夏・秋の繭量の収穫は合わせて百貫は多いほうだった。一貫は三・七五キログラム。

井まで届くような木もありました。繭取りのときは、近所の若い人、面倒を見てあげている家の人、男の人も女の人も手伝いに来てくれました。最初の繭取りのあとは、これらの人たちをねぎらって、お祝いの宴を開きました。魚屋さん、和菓子屋さんなどが家に来てご馳走を作るのです。

みんながいつも忙しく働いていました。朝作りといって一家全員、父母、祖母、男衆、小僧さんも、女中さんが朝食を作る間に畑に出て農作業をします。子どもの面倒をみるのは子守の役目で、あの当時小学校二年生で山形から働きに来ていた子守さんがいました。一〇年契約で、親は一〇年分のお金を先に持って行ってしまふんです。オトメちゃんという、のちに芸者さんになった子守さんもいました。よくわたしをおんぶしてくれて「千代子ちゃんは頭の良いやさしい子でね、わたしの誇りだったんですよ」と、のちに宣伝してくれました。これも大事に育てられた思い出の一つです。

他人には寛大でしたが、わが子にはとても儉約家の父でした。当時一銭で大きなあめ玉六個くるんです。その一銭が大事なんです。茶筆筒の引き出しに一銭玉が二〇個くらい入っているんです。乞食が来たら必ず一銭をあげるようになっていました。子どもの小遣いは春秋のお祭りに二〇銭くれるだけなんです。いつもお小遣いを持つている友だちもいて学校の帰りに駄菓子屋さんで当て物をするとか手のひらくらいの砂糖菓子があたりたりしてね。友だちからもらっているばか

下男

雇われてその家の雑事をする男の人。

女中

雇われて家事をする女の人。今のお手伝いさん。

小僧

商店や農家で雑用に使われていた少年。見習い小僧。

子守

幼児の世話をするため使われていた少女。子守奉公。

りでは申し訳ないので、ときには引き出しのお金を二銭、こっそり失敬したりしました。母は「今月は乞食が多かったのね」なんて言っていました。

女学校の遠足のときなどは、多くくれるんですが、買った物全部、何がいくらとつけ、合計とお釣りも書いて母に出すんです。ですから一〇銭で買った物は一五銭、二〇銭は二五銭とつけて五銭儲けるんです。それで友だちにもあげられたんです。

## ガソリンカーで通学

わたしが小学校四、五年の頃、大和学園が南林間にできました。小田急線の沿線で小田急の関係者が創立者だったことで、みんな応援して学園を盛んにしたいと願ってたんでしょう。運動会や音楽会には高学年がよく参加していました。ですから同級生が七、八人はこの学園へ進学しました。そんななかで、わたしだけ厚木高女に進学したんです。

今の相鉄線ね、あれが神中線といって子どももの足で歩いて一五分、相模大塚という駅まで歩いたんです。列車はガソリンカーでしたから、走ってくる音が聞こえるとみんな線路脇を駆けていくんですよ。当時の列車はのんきなもので、ちゃんと待っていてくれました。遠足のときなど、「もつと早く走って」なんて運転手

女学生の頃



大和学園高等女学校

一九三〇（昭和五年）、高座郡大和村大字下鶴間に開校。

設立者兼校長の伊東静江は、小田急鉄道社長（利光鶴松）の長女。徳育・知育・実技を重視。現在の聖セシリア学園。

さんに言ったりもしました。河原口という駅で降り、橋を渡って行くのです。その後は神中線の連絡バスが往復するようになりました。相模大塚駅では時間に余裕のあるときは駅長さんといっしょに絵を描いたり話をしたりもしましたね、のどかな時代でしたね。

当時の厚木高女は四年制で、入学したときは着物で袴の裾には白線が入っていました。あれが厚木高女というわけです。

制服は昭和五年にセーラー服になったんですが、わたしが入った頃はどちらでもよかったです。一クラスは五〇人でしたか、東組、西組とありました。なにしろ景気の悪いときでしたから、女学校に行く人は少なかったんです。

入学したときの主任はあの有名な中村雨紅なかむらうこう先生でした。当時は高井先生というお名前でした。三年生になったとき竹内先生という、とても好男子の若い先生が来られました。横浜から通っていた先生とたまたま車内でいっしょになるとみんなわくわくしましたよ。わたしたち西組の担任は、女子英学塾（現、津田塾大学）出身の先生で、ワンピースにハイヒールでいつもお尻をぶりぶりさせて歩いていらしたハイカラな方でした。竹内先生とよくお話をしてらして噂にもなりました。英語は、毛唐の言葉といつて軽蔑語ですね、そう呼んでいました。英語の授業が廃止される少し前です。

運動場は狭くて運動会は若尾製糸工場のグラウンドまで行ったんです。田村堀を

#### 中村雨紅

(一八九七—一九七二)

東京府南多摩郡恩方村の高井家に生まれる。本名は宮吉。二〇歳のとき、中村家の養子となり、その頃より童話を書き始める。野口雨情主宰の『金の船』へ童話「蛙のドタ靴」を発表し、雨紅の筆名を用いる。一九二六年、厚木実科高等女学校の教諭となり四九年、五二歳で依願退職する。七二年、七五歳で死去。

「ねんねのお里」「かくれんぼ」などの童謡があり、草川信作曲による「夕焼小焼」の作詞はとくに有名。

通つて南に行くに荒れ地があつて、そこをみんなで草刈りから始めました。元の法務局（横浜法務局厚木支局）のあたりです。服装は厚い綿地のブルマーで紺色です。運動会のほか一学期は音楽祭、夏休み前は強歩競走というのがあつて中津小学校までの往復だったり、大山登山だったり、今でもよく覚えています。三年生のとき全校生徒三〇〇人ぐらいの中で、七番目で登つたことがありました。次の日、足が痛くて校舎から校舎に行くのがやつとでした。みんなのそのよたよた姿がおかしくて笑いころげました。

### 開放された寄宿生活

卒業後、父が大妻技芸学校の手続きをしました。わたしを大切にしてくれた祖母は「女には教育はいらぬ」と言っていましたね。地方では大妻は堅実で有名でした。今はいろいろの科がありますが、当時は裁縫の学校で一年で資格がとれたのです。この一年間は、ぜいたく放題、楽しく過ごしました。生徒は満州からも、北海道からも来ていました。特に土曜日の午後はみんなとおしゃべり会をするんです。いろいろな物を買ってきたりお菓子なども親から送ってもらつたりして、わあつと開放感がありました。学校は麴町九段下で、寄宿舎は市ヶ谷見附の駅で降りその西側でした。八幡様の境内がありました。第二と第三寄宿舎があつて、わ

たしたちは一番見晴らしのよい場所でした。

二・二六事件の日のことです。すごい大雪の朝で、起きてすぐ、何かものものしい空気があり、しーんとして誰も何も言わないのです。なんだらうと不思議な雰囲気でした。窓から下を見ると一面真っ白の雪の中、銃を持った兵隊があちこちに立っていたんです。ただごとではないと直感しました。ラジオの放送がありました。各大臣を若い兵が襲撃したあと「今からでも遅くはない。ただちに原隊へ復帰せよ」と繰り返し放送していました。そのあと学校へ行ったかと思えます。歴史的な事件に遭遇したんですね。

雪祭りにみなさんよく北海道に行くでしょう。わたしたちはあの頃は大雪を東京で見ましたよ。市ヶ谷から橋を渡って、麴町の二七通りにしちを通って学校に行きました。大雪が降ると、親父さんも小僧さんも一家総出でいつせいに見事な雪像を作っていました。この通りでは縁日には舎監先生といっしょにお祭りを楽しんだのです。寄宿舎に入らなければ経験できなかったことです。一部屋が三人、五人、七人などでお風呂は第二寄宿舎へもらいに行きました。当時寮歌がありました。

「ひとつとでたわいのよさホイのホイ 人も知りたる大妻のホイ 第三寄宿はシャンぞろいホイのホイ ふたつとでたわいのよさホイのホイ ふた親見捨てて出たからにゃホイ すえの成功夢に見てホイのホイ みつつとでたわいのよさホ

## 二・二六事件

一九三六（昭和一一）年、東京地方は二月二三日から雪が続き五四年来の猛吹雪に見舞われ、二六日朝も前夜来の大雪に明けた。陸軍皇道派士官の指揮で兵士が完全武装で内大臣齊藤実、大蔵大臣高橋是清などを襲撃したクーデター。しかし二八日午前、原隊復帰の奉勅命令が出され鎮圧された。

イのホイ みんな揃って朝寝してホイ 朝礼まぎわのランニング ホイのホイ」

大妻を卒業して実家に戻ってからのことです。小学校の校長先生と青年学校の先生が頼みに来られ、二年間、青年学校で和裁を教えたんです。小学校の教室を使っていました。カリキュラムに沿った研究会もあり、あちこちから先生方が見えまして。中等教育裁縫科検定の資格と小学校の専科正教員という資格をもらったんです。農閑期には昼間教えました。

教材は一ツ身から三ツ身、あせせ 衿もやりました。綿入れ、夜具、袖のついたかいまき 掻巻、道行も。生徒は高等科二年を卒業した人、小学校を終わってどこかへ行っていたという人も入っていましたね。学歴などはあまり問いませんでした。このとき、たしか三二円か三五円か貰ったのですが、小学校でお裁縫を教えている先生より多かつたかと思いません。短期の青年学校のほうは特別だったんでしょかねえ。

## 甘利正に見そめられ

山際やまぎわ（現、厚木市山際）の甘利正あまりのただしさん。いとこでしたがわたしは全然知らなくて見たこともなかったんです。わたしがまだ子どもの頃お節句に来たとか中学生のとき寄ったとあとで聞きました。わたしのほうはまったく知りませんでした。女学校の先生をしていたおじなどまわりからは「千代子どうだ、山際の正は優秀

### 青年学校

一九三五（昭和一〇）年に公布された青年学校令により、それまでの実業補習学校と、青年訓練所が合併され勤労青年を対象とする青年学校が誕生した。本科・研究科・専修科・普通学科・職業科などのほか女子には家事裁縫、男子には軍事訓練などを課した。  
一九四七まで存続。

### 道行

江戸時代に鷹匠が餌差に着用した合羽のことをみちゆきと称した。現在は女性が主に着用する。

### 甘利正

（一九一四～一九九二）  
一九四七年、愛甲郡依知村村長。五一年、神奈川県議会議員。七六年、衆議院議員。八三年、次男甘利明に後継を託し引退。

だぞ」とか「ほかの人に世話をするのはもつたいないようだ」と勧めていました。父は、ひとり娘をそんな田舎の百姓にはやりたくなくなつたようでした。東京のほうからも縁談がいくつかあつたりして財産もない貧乏人ということでも不満だつたんでしょう。わたしは「本人がどうしても、と言うなら考えましょう」と言つたんです。それが届いたのか「どうしてもだ」ということで、「わかりました。それじゃあ嫁ぎます」という返事をしました。父は、その間「年回りが」とか「方角が悪い」とか言つてたものですから、こちらでは主人が「方角が悪いなら南無妙法蓮華經のお寺へお参りにいってくる」と言つて「薄汚い茶碗でお茶を飲んできたぞ」とあとで聞きました。「百姓はいつさいしなくていいから。ただ居てさえくれればよい」と言われました。昭和一四年三月二八日、結婚式をあげました。結婚式の日、お婿さんの地類じるいの人と親戚代表がわたしの家に迎人客むかひんきゃくとして迎えにきました。近所をひととおり廻つてからお披露目の宴をしました。わたしのしたくは厚木の美容師の萩原さんが実家の草柳まで泊まりがけで来てくださいました。宴が終わると今度は嫁ぎ先の山際へ移動します。厚木の萩原さんでまたしたくを直してから美容師付き添いで行きました。そこには青年団が出迎えていました。かわいい男の子と女の子が入り口に松明たいまつを持って待っていました。夕方から夜にかけて宴が開かれていました。わたしの荷物は前日全部来ているので、筆筒は開かれ、寝具は積まれ、着物は掛けてありました。筆筒は特注の総柎目そうまきめで縁が漆

#### 地類

同族的な家の集まりを、じるい、じわけ、じえん、じしんるいなどと言う。本・分家関係が不明であっても、かつてはつながりがあつたとされてい同族集団を、いちみよう・いっけ・いちまきなどと呼んでいる。

#### 迎人客

結婚式の当日、婿方から嫁を迎えに行くこと。人数は奇数で一行は婿・仲人・地類・親戚で構成される。嫁方での酒盛りの中で、婿は近隣全戸ごごに挨拶にまわり、嫁は前日、地類や組合など部落全戸にいとまごいに歩く。

塗りのものを持たせてくれました。

今のようなデートなど一度もしないどころか、会ったこともなかったんです。それにお嫁さんは下を向いたままでしょう。「千代子、よく来てくれたなあ」と叩かれて、「まあ元氣な婿さん」と思ったらそれはおじだったりしてね。奥のほうにいるのがお婿さんでした。まともに見ることもできなかったですね。

八月一六日には出征したのです。陸軍でした。最初は甲府に面会に行きました。翌年の正月に長女が生まれて、当時は写真屋さんで写真を撮るのはむずかしく、わたしが似顔を描いて戦地に（北支）送りましたら、「おめえに良く似てるじゃなにか」と戦友に言われたそうです。このあとは、まる二年帰還するまで、しゅうととしゅうとめ、小学五年生の義妹、おばあさんとの生活でした。

### 政治は嫌いだったのに

わたしはね、お嫁に来たとたん財布を渡されましたが経験がないので、当時出征する人には餞別を持って行くのですが、あるとき、わたしは一〇円札を入れたらしいですね（当時一般には一円くらい）。そうしたらその家で、なにかの間違いだろうと行って、とんで持って来られたんですが、しゅうとは「いや間違いはありませんよ。命を張って出征するかたになんで間違えますか」と言ってその

場で返したそうです。だいぶ経ってからわたしは聞いたんです。こんなことがあっても、しゅうとは全幅の信頼をしてくれたのです。

しゅうとめも家の中のことは、なんでもわたしを中心にやらせてくれました。でも、ときどきわたしにあたるんです。自分のしゅうとめや亭主で苦労していらだつ分、身内から来たわたしに気楽にあたっていたんでしょか。「嫁は何度でも貰えるが息子は一人しかいない」と言われていたのだそうです。

夫もわたしをたててくれました。自分自身の親や妹への小遣いはわたしから渡すように仕向けてくれました。そのかわり妹に何かあつたらわたしに叱られました。出かけたときのお土産も夫からでなくわたしから渡すんです。

村長は損の長、県会に出るといつもお金がなくて喧嘩が絶えないという。国会に出ると一升の米も毎日買いに行くようになってしまった。政治家になることは貧乏になること。身内には町長もいましたが、幼い頃からずっとそう聞かされてきました。実家の親戚には、高額所得者、貴族院議員などがいて、行き来してました。当時村長などは、村のお大尽の息子と決まっています。政治家にはならない約束でしたし、夫自身もやりたくなかったのですがどうしてもと、推されて村長になったときは、あの小僧が村長にと本家のおじたちに馬鹿にされました。そののち次は県会にと言われたんです。「政治は絶対にやらないことになっている」と、がんとして応じなかつたんですが毎晩三〇人ぐらいの青年たちが一週間以上も押

#### 貴族院

一八九〇(明治三三年)から一九四七年まで大日本帝国憲法下で、衆議院とともに立法府を構成した機関。その構成員は皇族男子、国家に勲勞又は學識があり、天皇に任命された者、各府県の多額納税者の上位の者。

し掛けて座り込みなんです。わたしはお茶だけ出して「だめです」と言い張ったんです。「決して奥様にはご迷惑はかけません。ご主人のからだだけ貸してください」と押し切られました。勝手にしなさいという気持ちでした。それがちょうど明あきつが生まれた頃でした。

## 白いエプロンから百姓に

政治家も百姓も嫌いだつたのに若者はみんな戦争にとられてしまつて手伝いの人は誰もいません。食べていくには、中心になつて働かざるをえませんでした。初めの頃は、絹の着物に帯を締め、白足袋、白エプロンでお茶だけ持つて畑へ行つていたわたしでした。「村長さんは合わない嫁を貰われたなあ」と言われ有名になつたくらいです。

でもそのうちに少しずつ仕方なく田んぼに入つて鼻どりをやるようになつたんです。牛の鼻先に竹の棒をつけて、それで牛を引つ張るんです。この辺では子どもがするんですね。ところがわたしは田んぼには一度も入つたこともないでしょう。目が廻つてしまうんです。水が入らないと、牛が曳いている器具が動かないんですね。夫がうしろで怒鳴るんです。ああだこうだと言われ、しまいに頭にきて、わたしは持つていた竿をたたきつけたりしたこともありましたよ。「田んぼに

甘利明  
千代子の次男。四九年生まれ  
で、八三年より衆議院議員。

一度も入ったことのない人に何ができる。歩くだけでも大変なのに」ってね。それしたら「おれが悪かった」と謝られたりして。

夫はそのうち内原へ行ってくれと言われました。ここは満州開拓義勇軍の訓練をしていた内原訓練所で茨城県の友部というところにあつたんです。当時農林大臣で百姓の神様と言われていた加藤莞爾さん、そのお弟子さんのところへ行けと言われたんです。そんなところへ行ったら政治家にされるのではないかと「駄目です」と言ったんですが、一年だけ、ということで行きました。そこで訓練を受けました。のちに神奈川県議になったかたたちもそこにいられました。夫は次の年に訓練生から県別中隊長にさせられました。訓練も厳しいし、寒さもひどくて、氷が厚く張るのを叩き割りながら田んぼを掘り返すなどの農業訓練です。夫は日本一の百姓になるぞという意気込みでした。

ですからうちでの百姓はわたしを中心でしなければならなくなりました。なんにもできなかつたわたしも男にやれて女ができないことがあるものかというわけですね。男の人が鞭一本で牛を自由自在にするのなら、わたしだって、と綱を牛の鼻につないで左右にひっぱり、一人で田んぼを耕すようになったんです。

この状況は戦後も続きました。子どもなんか見ている暇はないんです。朝早くから畑に行っていますので、子どもたちにお弁当を作ったこともあまりありませんでした。明なんか何を食べて行ったのかなあ、と今思います。娘も五年生ぐら

#### 内原訓練所

茨城県水戸市の西、内原町にあつた。太平洋戦争前に満州開拓青少年義勇軍養成のため、この内原訓練所や満州開拓鉱工幹部訓練所がおかれ満州開拓のメッカとして知られた。戦後もこのあたりは農業関連の研修機関が多い。

いでご飯を炊いたりしてよくやりました。次女が学芸会で和服を着なければならぬときは、徹夜で仕上げてやったこともありましたね。

当時、畑には配合肥料なんてありませんでしたから単品の窒素、リン酸、カリを混ぜ、堆肥は牛や豚の糞を積んでおいて、藁をまぜきつて手で糞をかけ、蒸らし、又繰り返し三回ぐらい重ね、それをかますに入れ積んで運んでいました。一反には、これだけの堆肥、三反には、五反にはと、きちつと種子も蒔けました。収穫のとき小麦を畑からリヤカーで引つ張つてくるでしょ、わりに、家に近い場所に畑があつたので、畑の前をバスが通つていましてね、バスの来ない時間を見ながら山のように小麦を積んで引いて来るのですよ。バスが来てしまうとときもあつて、でもよけようとすると、ひっくりかえつちゃうんです。今のように舗装ではないでしょう。するとバスは承知してて、ブツブツと鳴らしながらついて来るんです、家の前まで。ブツブツと鳴らすけど、どけとは言わないのです。わたしは、汗びつしよりで必死です。清兵衛せいべいさんとこのお嫁さん、と一目おいてくれたのでしようね。まあそんなでした。

今は裏の畑で自家用の野菜をいろいろ作つて楽しんでます。ご近所の人とも家族のように行き来しています。わたし自身に取り得がないので、みなさんからお知恵をいただいたり助けあつたりしてお互い最後まで愉しく生きなきゃね。

「生きていてもねえ」なんて言う年寄りがいると、「生きていることが歴史なの

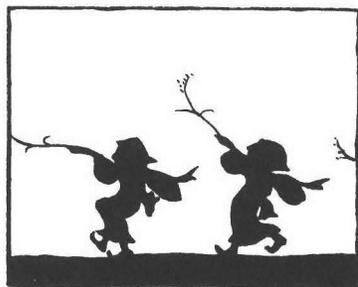


自宅庭にて

かます

穀類・塩・石炭などを入れる  
わらむしろで作つた大きな袋。

よ。経験してきたことは、みんなおしやべりしておいてくださいよ。聞いてくれなくても、うるさいねと思われても、いつかずっと経って、あるとき閃くことがあるんですから。これはわたしの体験です」って言うのですよ。



聞き取り

二〇〇一年三月一四日

二〇〇一年四月三日

## 想いを小説にして

小島 すみ

東京で生まれたんです。母とは生き別れで知らないんです。子どものときに父とも死に別れました。そういう身の上なので、語る材料はたくさんあるんです。表も裏も、喜びも悲しみも知っているから、そういうものを書きたくなつたんですよ。背景には何があるんだろうって考えるようになったから書くものに社会性が出てきたと思うんです。『病める水系』は農民文学賞の候補になつた作品です。

### 自由民権運動と祖父、井上篤太郎

わたしは昭和四四年に厚木市教育委員会から文化財の調査委員を命じられて『荻野山中藩の調査』の発行にかかりました。そのとき、古文書で山中藩について調べたら、祖父の父親である井上徳太郎は、鈴木佐吉の妹を養女にしていた

一九一九（大正八）年  
二月五日  
東京府豊多摩郡渋谷町生まれ  
厚木市妻田西在住

自宅書齋にて



井上篤太郎

（一八五九—一九四八）

郷土三田村が生んだ政治家で実業家。青年期には自由民権運動にかかわり、のち衆議院議員。中央政界と実業界で活躍し、郷土では市道三田線の拡張改修、中津川才戸橋の架橋、三田小学校新築、愛甲農学校校舎と設備の拡充など、私財を投じて社会事業に貢献した。

ということがわかりました。その後、篤太郎が生まれました。

話がそれるようだけれど、ここでちよつと佐吉に触れさせてください。わたしは『文芸あつぎ』一八号（二〇〇一年四月発行）で、「世直しの夢」と題して、佐吉を取り上げて書いたことがあるんです。佐吉を書くことによつて、あの時代がよくわかると思つたのよ。

慶応三年頃、人民の生活は楽ではなかつたから世直しがあれば楽になると思つて、佐吉も「世直し大明神」つていう旗を立てて歩いていたそうです。佐吉は博打の親分で、当時の百姓は、ほかに娯楽がなかつたので博打は楽しみのひとつだつたんですね。まして荻野新宿はいろいろ商売やつている人も多かつたし、今でも屋号が残つていて金回りも良かったんでしょう。薩長の浪士隊が、山中藩の焼き討ちに成功して、津久井の久保田という酒屋に引き揚げ一晩泊まつて、薩摩屋敷に戻つたんです。ところが、佐吉は武士じゃないから入れてもらえなかつたのか、自分から入らなかつたのか、夜遅く戻つてきちゃつたのよ。結局、腕がたつから武士に利用されたんですね。その後、佐吉は気の毒に仕事もなく、及川の村はずれの八幡様の深井戸に飛び込んで、それつきり出てこなかつたという話ですよ。まあ自殺ということですね。

徳太郎は、才戸（現、厚木市三田）の名主、金子茂兵衛の長男で、学問がやりたいというので家を弟に譲つて江戸へ出ていって、その後、妻きくと才戸で紅梅

荻野山中藩焼き討ち事件

一八六七年一二月、藩主大久保教義が参勤交代で江戸に出府中、隊長・鯉淵四郎ら浪士隊は御蔵米や金品を強奪、陣屋の焼き討ちをした。

塾

山際漢学研究所。依知村の地主・中丸重郎平により設立。

『小宮日誌』

大畑哲編『神奈川の自由民権小宮保次郎日誌』。民権家小宮保次郎の一八八一年五月から一八九〇年までの詳細な日記。相州自由民権運動の貴重な資料。

湘南社・相愛社

国会開設運動の直後から神奈川県各地に民権結社が誕生した。一八八一年八月には大磯で湘南社が、翌年二月には愛甲郡に相愛社ができた。

相愛社の創立大会には一〇〇〇人を越す参加者が厚木劇場に集まつたといわれる。

焼きを焼いてお茶屋をやっていたようです。

祖父、篤太郎は依知の中丸家にあつた塾に渡し舟で通っていたが、本格的に学問ができないというので一七歳で東京に出ていきました。神田の明治法律学校（現、明治大学）に入ったのよ。だけど明治八年に、父親の死で遊学を断念したんです。

『小宮日誌』によるとね、明治一四年大磯で結成された湘南社の創立式に出席して、それを見習つて愛甲郡の地方結社・相愛社の結成に奔走してね、明治一五年に東京で開催された自由党臨時大会に地元を代表して出席し、板垣退助の遊説にもかかわっていたようです。

明治一七年頃、地租軽減運動の請願のために天野政立、難波惣平といつしよに上京しているんです。その後、祖父は警察からいらまれて、明治二〇年に保安条例で帝都追放になつていゝんです。その頃は、小宮保次郎のあとをうけて県会議員をしていたんだけど、家宅搜索を受けたんですつて。昔の人は嫁にゆくと眉落としちゃつたからね。祖母は眉がないのに、「わたしはね、家宅搜索を受けたときだつて、眉ひとつ動かさなかつたよ」つて威張るの。だからおかしくつて、眉がなかつたのに何言つていゝのと思つたけど、そういうこわい目に遭つていゝのよ。

当時の政治活動は、生命も財産も捧げつくつてというものでしたが、そんなこ

#### 地租軽減運動

一八八四年九月一日集会して盟約第三条の請願委員として、難波惣平・天野政立・井上篤太郎・山川市郎・沼田初五郎・神崎正蔵らがいた。

#### 天野政立

（一八五四―一九一七）

荻野村出身の民権家。荻野山中藩焼き討ち事件に遭遇し、のちに大阪事件で検挙される。晩年、大磯町長、平塚町長を歴任す。

#### 難波惣平

（一八四七―一九〇四）

荻野村出身の民権家。愛甲郡自由党の中心的な存在で、地租軽減運動を指導した。

#### 保安条例

政府は民権運動を弾圧するため、一八八七年一二月保安条例を作り、危険人物を皇居のある東京から追放した。

とをしていると子弟の教育ができなくて、祖先に申し訳ないと思ったようです。

政治運動から離れて明治、大正、昭和と実業界で活躍しました。ある時期は、養蚕関係のところへ勤めてみたり、横浜では自転車を作つて失敗したり、富士紡の小山の工場のために富士絹を作つて、特許をとりました。そのうちに京王電車がつぶれかかっているというんで、引つ張られて沿線を開発して、京王閣も作りました。

昭和一六年、東京から疎開した篤太郎は才戸橋際に公園を作り、父、徳太郎の号である松蘿しょうらをつけて松蘿公園としたようです。篤太郎じいさんから、わたしは物はもらっていないけど精神的な遺産はもらつたんです。

## 二人のおばあさんと父のこと

篤太郎の六男である父はまだ若かつたので、わたしは乳飲み子のときから厚木の三田のおばあさん（篤太郎の本妻）に育てられました。

子どもの頃、おばあさんが月に一度、信玄袋を持って、東京へ行くときにいっしょについて行きました。相模厚木駅（現、本厚木駅）まではおばあさんの膝の上に乗って人力車で行つてね、駅からは小田急線に乗りました。

当時、篤太郎おじいさんは、偉い人になつていてね、美男子で穏やかな人とい

### 京王閣

一九二七（昭和二）年開設。関東の「宝塚」と称されていた。東京近郊の京王多摩川の大規模なレジャーランド。現在は競輪場になっている。

### 信玄袋

口元を紐でくくつた布袋。主として旅行用のもので明治中期に流行。

### 小田急電鉄

一九二七年四月、新宿―小田原間開通。相模厚木駅設置。

う印象ですよ。東京で義理のおばあさんといっしょに暮らしていたの。行くとお小遣いもくれたけど、わたしは三田のおばあさんと東京の義理のおばあさんの間で嫌な思いもしました。東京のおばあさんは、実家（高井家）を再興するために井上の籍には入れていません。

おじいさんも東京のおばあさんも風邪をひいて二階の寝室で寝ていたことがあってね、三田のおばあさんといっしょに帰るときに二階に挨拶に行ったら、おじいさんは「これで人形でも買ってもらえ」って言って一〇円くれたんです。おばあさんはベッドで口開けて顔真っ赤にして吸入をかけていたのよ。わたし吸入かけているのを初めて見たので怖くなっちゃって、おばあさんに挨拶しないで帰ってきたら「何でわたしに挨拶しないの、田舎のおばあさんがしくていいって言ったんじゃないか」って、あとでとちめられたこともありました。

小学校二年のときに、父が三田のおばあさんに預けておくのは、筋じゃないからと、浜松に連れてきてくれたの。父は絵を描いていました。青山師範を出て教師をやっていました、やたら校長とけんかして学校辞めたんです。薬剤師をしている義母は、昼間は勤めに出ていて父とわたしだけなの。父はイーゼルと絵の具箱、わたしは三脚を持ってあちこち写生ばかりしていました。そのうちに二、三度扁桃腺炎になつてね、浜松はその頃から工場町で、父は考えたようです。

「やっぱり空気のいいところだなきゃだめだから、おばあさんのところへ帰

#### 青山師範

東京府青山師範学校（現、東京学芸大学）は一九〇年から一九三六年まで青山にあった。

れ」って、父はわたしを相模厚木駅まで送ってきました。赤いがまぐちに五〇銭入れてくれて、おばあさんがよこしたお迎えの人力車の人に氷水を飲ませ、わたしに長い手紙を持たせて、父は浜松に帰りました。だから、浜松の元城もとしろ小学校へは一学期だけでした。

父は、出血のひどい痔だったので心臓を悪くして、その後、暖かい別府へ行って、薬局をやっていました。やつと何とか生活できるようになって、「来年はおばあさんといっしょにおいで」と手紙が来たんです。が、わたしが五年生の年、一月二八日の雪が降る晩に亡くなったという電報が届きました。父に会ったのは相模厚木駅で別れたのが最後です。三八歳でした。

育ててくれた三田のおばあさんは、わたしが厚木高等女学校二年のときに七四歳で亡くなつてね、卒業まであと二、三年だからと、父のいとこにあたる人がわたしの世話をしに来てくれました。そのころ女学校の月謝は四円五〇銭でね、篤太郎から届く一〇円で何とか賄えたんです。

卒業と同時に東京の代々木で、半年おじいさんと一つ屋根の下で暮らしました。おじいさんは羽振りが良くて、お客が多かったんですよ。わたしはお茶運びと針仕事ばかりでした。義理のおばあさんは「おじいさんをこれだけにした内助の功は、わたしだ」って威張っていました。おじいさんはとても几帳面な人で、夜九時までは、ラジオを聴くとか何か書類に目を通したりして、ぜったいに膝を

くずさないの、腕枕で寝ている姿なんて見たことないです。そのあいだには、松竹少女歌劇のターキー（水の江滝子）や津阪オリエが出ているのにも連れて行ってもらったこともあります。同じ代々木におば（父の姉）が住んでいて、外へもだしてやらなきやかわいそうだと、いとこたちといっしょに連れ出してくれたのです。

## 心に決めた人と

義理のおばあさんの薦めでお医者さんの卵と、お見合いをしたのよ。その人がインターンで新潟に行っていて、帰ってきたら結婚というところまで決まっていたんです。でも、どうも東京の生活面白くないなあ、もつと自由に暮らしたいなあと思ったの。親がなかったから周りの人が、早く結婚させようと思ったんでしようけど、わたしはあてがいぶちの結婚はしたくなかったので、東京を飛び出しちゃったんです。旧憲法で家族制度のあった時代に「家」を蹴飛ばしてしまうということは大変なことだったのに、わたしはまだ一八歳の世間知らず、怖いもの知らずだからできたのでしょうか。

小島喜一こじまきいちさんのことが心にあつたのです。わたしが女学校へ通っているときに彼は、厚木中学校に通っていました。話をしたこともないし、手紙のやり取りも

水の江滝子

（一九一五年）

昭和期の女優。松竹少女歌劇一期生のスターで、「男装の麗人」として少女ファンをひきつけた。後にプロデューサーとしても活躍。

津阪オリエ

（生没年不明）

昭和期の女優。松竹少女歌劇の二期生のスターで、「源九郎義経」などに出演し、男役として活躍。

厚木中学校

一九〇二年、県立第三中学校として設立される。一九一三年、県立厚木中学校、一九四八年、県立厚木高等学校となる。

しませんでした。ただ彼は校友会雑誌に何か書いている人だつていうことは知っていたの。わたしも校友会雑誌に書いていて、おたがいに見てはいたんですね。そういう程度の知り合いで、別に話したわけじゃないんです。想いはつるばかりでした。いろいろ事情はあつたけど、想い合つていたんでしようね。喜一さんが師範学校を卒業して、厚木の小学校へ勤め出した昭和一二年に結婚しました。

婚礼は、仕出し屋が来て、小島家でやつたんです。講中こうちゆうつていうのがあつてね、食器とかお膳とか共同で使えるの。仲人は親戚の及川の高崎さんにお願いしました。喜一さんは何かわたしのことを「高嶺の花」だと思つていたらしいの。今では「押しかけ女房、押しかけ女房」だつて言われてますけど。

結婚当初は妻田の本家に二、三か月いたあと、厚木の貸家に一年くらい住んでいました。わたしたちの恋愛は、かなり評判になつていたんでしようね。町へおつかいに出るといろいろ聞かれて、暮らしにくいと思ひ、横浜へ引つ越しました。小学校での初任給は四五円でした。御所山という日本郵船がある高い丘の上で家賃一三三五〇銭の二軒長屋でした。ぎりぎりだつたけど、当時鮭一切れ五銭、コロッケが二銭で、漬物屋でうずら豆一〇銭も買えば充分でしたよ。貧乏暮らしでね、よんど困ると主人は、わたしの振袖を質屋に持つていつて流したこともありましたよ。学童疎開が始まるまで、そこにいました。

講中

頼母子たのもしたのものし講などの仲間。

主人が、教え子といっしょに関本の長福寺ちようふくじ（南足柄市）に集団疎開をしたときは、わたしはいっしょについて行き公会堂に住んでいました。生徒たちは、毎日太鼓を叩いて般若心経を唱えて、家の方を向いて「お父さん、お母さんおはようございます」と挨拶し、本堂で長いこと勉強していましたよ。大雄山に杉の葉拾いに行ったりもしましたね。公会堂には、押入れがないから床の間へ布団積んで、前にカーテンをしてね。嫌だったのはトイレ。トイレは外にあつて、夜なんか月がこうこうとしていて、お寺のそばだったから気味が悪くてね。戦後、主人は大雄山から横浜の小学校まで通っていましたよ。

わたしたちは、本家の牛小屋を直してそこに住もうと思ったんですが、そのとき、篤太郎じいさんが中津川砂利株式会社の株を売って一万円くれたの。その頃の一万円は、大変なお金だったんです。そのおかげで妻田に家を建てることができました。材料がなかったので杉皮葺きでね。玄関から入ったところが四畳半、奥が八畳、あと台所があつて、かまどで火燃やして暮らしてました。やっと建て直したのが、昭和三〇年です。子どもが三人いましたから、子どもの教育の最中は、わたしは「家なんかあとでいいよ」って言つてね。長女の仲人さんが結納金を持つて来たときは、まだ畳がなくて薄べりを敷いていましたよ。長女が東京学芸大学に行ったときなんかは貧しかったけど奨学金がもらえずいぶん助かりました。

薄べり  
縁をつけたいざ。

## 原稿料は五〇〇円

厚木の家に来た昭和二一年には、テレビなんかなかったでしょう。ラジオで原稿の募集をよくやっていて、放送してくれると五〇〇円もらえたんです。それで浴衣一反買えたのよ。『婦人朝日』という雑誌でもね「私の作文」に応募しました。それにたびたび載ったんです。これも稿料は五〇〇円でした。それで書くことが好きになりましたね。

和田伝わたでんさんの奥さんから「ちよいちよい書いて持って来なさい」と言われたのよ。奥さんは女学校のときの音楽の先生でね、それから小説を書くようになったんです。和田さんは、その頃『農民文学』の会長をやってらしてね、わたしが書いたものを見せに持っていくと「これみんな人物を農民にしろ、農民にしなけりやだめだ」と言われました。直して原稿渡すと、鶴の一声でよく載ったんです。同人雑誌みたいなものだから、お金にはなりませんでしたがね、だんだん書くこと覚えました。もっと長いものをとということで『ひこばえ』を自費出版したんです。

夜、子どもが寝てから書いたものですけど、そのうち雨の日にもね。本家のおじいさんが丈夫で百姓やっていてよく見回りに来るときがあるの。昼間、字を書いたり、本を読んだりすると分家の嫁さんは何だということになっちゃうんで、

和田伝

(一九〇〇—一九八五)

愛甲郡南毛利村恩名に生まれた農民文学作家で、厚木市名誉市民。主な作品は、一九三三年『山の奥』、一九三七年『沃土』、一九三九年『大日向村』、一九五七年『鬮雲』などがある。

話者の主な著書



一九七一年『ひこばえ』、一九七七年『湖の音』、一九八六年『病める水系』、一九九二年『歳月のしおり』、一九九九年『八十路まで』など。

針仕事をそばに出しておいて、おじいさんが来ると大急ぎで隠しちゃうんです。だんだんおおぴらになって、もう今は天下ごめんですよ。

和田さんはわたしの『病める水系』が出る前に亡くなりました。本ができあがって持っていったら、奥さんが「もう少し早かったらお父さん喜んだのに」って残念がっていられました。

## 未来を見つめて

昭和三三年に県営水道が入りました。以前は、小鮎川の岸に深井戸があつて、良い水が出ていました。苺農家の人たちが掘って、良い水なので組合を作つてやろうということでした。主人は退職していたので、組合長にさせられて、しょっちゅう井戸へ行つて消毒の薬を入れるとか、塩素は何パーセントとか、月に一回は保健所へ水を持つていつて検査をしたんです。どこか故障があつて水が出なくなると、さあ大変。そんなこと何度もあつたわ。こんなことから水と環境の問題に関心を持ちました。水の豊かな宮ヶ瀬にダムを作るといので、宮ヶ瀬へはぜひぶん通いました。

昭和四四年、厚木に二四六バイパスができたでしょう、そんな大きな道路だとわからないもんだから、市民は道路ができりや発展するくらいに思つたんです

### 『病める水系』

宮ヶ瀬ダム問題を素材にした小説。車井戸、ポンプ、水道、さらにダムへと水と人間との永いつきあいを通して未来を考える地域性、記録性の強い創作で、農民文学賞の候補作にもなった。

よ、昼も夜もすごいんですよ。電話なんか聞こえないし、窓も開けられないんです。それでどのくらい騒音があるか調べることにしました。

その頃は市民運動の始まりでね、市役所に「測量に来て」と言ったら、すぐ来てくれました。バスを待たせていても話し声が聞こえないんです。産業道路だから、大きな車を動かす人には重宝だけど我々にはあそこは渡れないし、不便なんです。

この頃は環境、環境つてずいぶん言うようだけど、あの頃に、大きな道路が困ると言ったのは、わたしともう一人だけだったんです。ほとんどの人は、道路ができるのは発展と簡単に思うんでしょうね。反対つて言つたつて、もうすべて決まつてからの説明なんですよね。二四六バイパスは国道だからね、まあ大きい道路は日常生活にあまり用はないんですね。でもわたしは、今と将来を考えて問題視していきます。

聞き取り

二〇〇二年七月二二日

## 二人の息子を満州の地に

清田 せいだ とみ江 え

七八歳の頃

一九二〇（大正九）年  
九月二十九日  
山梨県中巨摩郡大井村生まれ  
厚木市妻田東在住

兵隊さんにあこがれて、兵隊さんに嫁ぎたいというのが小さい頃からのわたしの夢でした。父も兄も兵隊でしたから。

昭和一七年から二二年まで東満州の国境の町東寧<sup>とうねい</sup>の陸軍官舎で仲間の家族といっしょに暮らしました。楽しいことや苦しいことなどいろいろありましたが、わたしにとって満州での生活は生涯忘れることができません。

### 奉祝歌に応募して入選

わたしが三歳のとき弟が生まれ、産後の肥立ちが悪かったのでしょうか、高熱が続き、母は亡くなりました。あとを追うように弟も亡くなったと聞きました。兄六人とわたしの七人きょうだいは父の手で育てられました。父は厳しかったけど、そのぶんかわいがってくれました。小学校のいろいろな行事、運動会や学



芸会には、必ず来てくれました。わたしはかけっこが速かったんです。地区の大会にも代表で出ました。そんなときにも父は、必ず応援に来てくれました。

女子青年団に入っていた頃、『処女の友』という月刊誌があり、毎月とつていました。ふと目にとまったのは、奉祝歌募集の記事でした。紀元二六〇〇年の記念行事だったのです。屁みたいな歌でしたが投稿してみました。

よき年を迎えし我等くにたみの記念事業に携さわりたき

二六〇〇年にちなんで、入選者も二六〇〇人で、優秀作品が一点で、あとはみんな佳作、わたしも佳作でした。

ある日、菊のご紋章のついた桐の箱にピンクのかけ紙、二六〇〇年奉祝歌と書かれた物が届いたのです。大切にとつておいたのですが、満州に持つていつてなくなつてしまいました。

## 兄の紹介で結婚

東京湾要塞司令部に入隊した兄が、横須賀の銃砲隊に勤務していました。その兄に父が、「おめえ、とみ江には女の道はちゃんと教えてあるから、いい兵隊がいたら世話をしてくれ」と頼んでくれたのです。兄がそのことを知人に話すと「おれの中隊に身元がしっかりしているいい兵隊がいる」と言つてくれました。

### 『処女の友』

全国処女会中央部（のち大日本女子連合青年団）の機関誌。創刊は一九一八（大正七）年十一月。

### 紀元二六〇〇年

神武天皇の即位から二六〇〇年が一九四〇（昭和十五年）にあたりとされて、さまざまな記念行事が行われた。一月一日から五日間の式典では、提灯行列や旗行列があり赤飯用のもち米が特配になった。一日からは「祝は終つたさあ働こう」と戦時生活に戻つた。

父も兄六人もみんな兵隊だったし、わたしも兵隊さんといっしょになりたかった。紹介されたのが清田なんです。きびきびした人でした。この人ならいいと思います。

父に二、三日休暇をとってもらって、山梨から清田の実家のある厚木に来ました。家は四方くずしだったけど、きょうだい二人も師範学校へやるくらいだから、いい加減な親じゃあないと思った。父には「おらあ家に行くんじやない。兵隊さんのところへいくんだから」と言つて承知してもらいました。

三回くらい会いましたが、今のように手を握ったこともチュウしたこともないですよ。非常時でしたから、昭和一五年の八月に結婚式は簡単に済ませました。その年の一〇月に満州に新設部隊ができるというので、主人は先に行きました。家族は携行できなかつたんです。「官舎ができたら面会という名目で来い。俺は一人で先に行く」と言い残して。

## 東寧までのひとり旅

自宅送金で暮らしていたわたしもいよいよ昭和一七年の五月に渡満することに決めました。誰も送ってくれませんでした。父もその頃ぼちぼち七〇歳でしたから「満州国は他国じゃあない。一人で行けなくてどうする。口と目があればどこ

四方くずし  
甲府地方の方言。藁葺きの平凡な農家。

### 非常時

非常時という言葉が使われたしたのは、一九三二年秋から。満州事変の開始後、挙国一致体制を図る政府とジャーナリズムが宣伝した。しかし一般の人びとが非常時を認識するのは、日中全面戦争が始まり総動員体制に組まれてからといえる。

へでも行ける」と言い、また「決して知らない人と口をきくな。兵隊さんがいたら兵隊さんに、いなかったら駅員さんに聞け」と。

おつかさんでも生きていれば「満州なんかへ、女一人でやるもんか」と言ったでしょうに。主人が先に行っていたから行けたんです。

東京の兄嫁のところに一泊し、夜汽車で下関へ、そこから関釜連絡船で、大勢乗っていましたよ。風呂までついていたんです。八時間も乗ったんですから仲間もできました。機雷があちこちにあっただけです。危ないなかをやつと釜山に上陸。

釜山から朝鮮鉄道で凶門ともんへ、更に東寧行きの夜汽車に乗ったのは九時過ぎでした。二等車には変な顔の男が一人だけで、とても不気味でした。いよいよ発車という頃になると兵隊さんが大勢乗り込みました。東寧に着いたのは、朝の七時半でした。主人が部下を連れて部隊長の車で迎えに来てくれたんです。「おめえ部隊長の車へ乗れるもんなんか、そうたんとねえよ」と笑いながら言いました。とにかくほっとしましたね。四泊五日の長い長い女の一人旅でしたから。

## 国境の町の官舎で

満州なんていったって日本人ばかりでしたよ。満人なんて、たまに通るくらい。満語なんてわたしは知りません。マンマンデー、ニイデー、ライライ、チャカフェ

満語

マンマンデー 待ってて

ニイデー あんた・お前

ライライ おいで

チャカフェラ 頭が悪い

ラ、たまに覚えて満語で話すと、向こうから「オクサン」なんて日本語で返ってきますよ。満人の子どもたちが歌っていた歌も「兵隊さんのおかげです。お国のために」なんてね。

陸軍官舎には昭和一七年から二〇年八月までいました。長男が生まれたのは昭和一八年三月、陸軍病院でね。産院ではないけれど軍医さんがちゃんと取りあげてくれたんです。ベッドの上でね。設備はともよかったです。お産をした次の日、肉や天ぷらが出たんです。「軍医殿こんなの食べてよろしいんですか」って言ったなら「悪い物なんてくれない」と怒鳴られました。

次男は、昭和一九年一〇月二〇日に生まれ、このときは官舎で日本人のお産婆さんが、取りあげてくれました。内地から来られたいい人でした。ラジオや新聞で内地では空襲があったとか南方の島で玉砕したとか、報じられていたのここは平穏な毎日でした。

## 不可侵条約を信じていたのに

ソ連との不可侵条約が守られていたので、日々の生活は平穏でした。そんな静かな町に、昭和二〇年八月九日の朝、庭で無心に遊んでいた子どもたちに突然機銃掃射が浴びせられました。どこの飛行機かわからないうちに消え去りました。

兵隊さんよありがとう

一九三七年の懸賞入選歌

肩を並べて／兄さんと／今日も学校へ行けるのは／兵隊さんの／おかげです／お国のためにお国のために／戦った兵隊さんのおかげです

東寧の陸軍官舎で



不可侵条約の五文字を信じていたのに。

まもなく一一時頃だったでしょうが、部隊から伝令がやってきて「ソ連参戦。全家族一二時までに関東司令部三九〇部隊に引き揚げよ」との命令でした。一刻の猶予ありませんでした。二人の子どもに身じたくをさせ必要なおしめと着替えの二、三枚を持ち、わたしは着の身着のまま子どもたちを連れ、部隊まで行きました。

そのときお父さんは言いましたね。「それでは、いよいよお別れだね。お母さんの言うことをよく聞いて大きくなれよ」と言い、子どもたちをしつかりと抱いてくれました。わたしたち三三家族は兵隊さんに付き添われて国境を脱出することになったのです。

初めはトラック二台で逃げました。途中何回も機銃掃射を浴びました。そのつど車から降り、草いきれの激しい野原に子どもを抱えて伏せ、息をこらして敵機の去るのを待ちました。ソ連機は容赦なく無差別に掃射します。背中の赤ちゃんとともに命を失った奥さんもいましたが、冥福を祈るまもなく南へ南へと逃げました。

畑に目残しのへぼキュウリがあれば、われ先にと行き奪い合い、先頃までの生活とは、うって変わってしまいました。部隊の兵隊さんも心の動揺を隠せません。そのなかの一人が、内地に同じぐらいの坊やがいるのでしょうか、わたしの子ども

もに「坊や元気で行くんだよ。お母さんと離れちゃだめだよ」と言葉をかけてくれ、羊羹を握らせてくれました。

「歩いてさえいればどこかにたどり着く」を合言葉に昼も夜も歩き続けました。ぬかるみもありました。とにかく広い広い広野です。

やっと町らしきところに着いた。そこは敦化<sup>とんが</sup>という小さい町でした。不気味なほど静かな町でした。それもそのはず八月一七日だったから。一晩泊めてもらった宿のおかみさんから「八月一五日に日本は負けた」と聞かされて声も出ませんでした。敗戦の悲しさを語り合う気力さえありませんでした。

## わが子二人の命を奪われて

わたしたち避難民はソ連の捕虜となり、もと日本人の収容所の建物へと連行されました。八月の終わりといえど、内地では想像もできないほど夜は冷ええました。やっと持つてきた一枚の毛布に親子三人くるまって土間に寝ました。

少しばかりの食事と夜の寒さで体力のない子どもたちは、みるみる衰弱し、ひとり死にふたり死に。その悲しみがついわたしの番になってしまいました。一〇か月の弟のほうに衰弱しきって、泣くことさえもできず死んでしまいました。収容所の庭の片隅に、自分で穴を掘って埋めました。その辛さは今考えても涙が



亡くなった二人の子ども

出ます。その涙も乾かぬうちに、かたことで「お父さんのところに行きたい」と言っていたかわいさかりの兄のほうも一〇日後に、高い熱を出してしまいました。冷やしてやりたくてもソ連兵の監視が厳しくて薬ひとつ与えることもできず、ただおろおろと死んでいくのを見守るしかありません。

九月一〇日と二〇日が二人の命日です。たつた一〇日のあいだに二人の尊い命を失いました。日本へ帰つてこのことを話さなくてはと思い、髪と爪を切り満服といっしょに形見に持つて帰ることにしました。たちまち收容所の移動があり、軍の命令に従い子どもたちを埋めた土地にも別れを告げました。

ふるさと日本に帰れることをただひたすら祈る毎日でした。とにかく生きのびるためにはどうすればよいのか、みんなで話し合い、励ましあつて生計を考えました。わたしは大福や煙草、駄菓子などを仕入れては、日が暮れるまで売り歩きしました。ここで自活の大変さや、敗戦の惨めさを嫌というほど知らされました。

新京につくと居留民会があつて、いろいろな物を放出してくれました。やつと冬を越し満州の雪解けが始まった頃、内地に帰れるとの噂がちらほら飛ぶようになつた。半信半疑ながらもひとすじの光がさしてきたのです。

国境を出てから一年六か月、苦しい毎日でした。一日たりと忘れたことのないふるさと日本へ帰れる日が来たのです。新京から石炭無蓋車で壺蘆島こらというところに出ました。壺蘆島まで内地から引揚船が迎えに来てくれたのです。

#### 居留民

外地で一定の職業に就き、それを申請し認められている者をいう。

日本が見えはじめたとき、佐世保港へ着いたときの喜びは言葉では表せません。乗船したときから数十羽のかもめがわたしたちを見守るかのようにならなりました。「かもめさんありがとう」とつぶやいたことも忘れられません。

## 厚木の住人になって

山梨生まれのわたしは、車窓から富士山がくつきり見えたとき、実家に行こうか厚木に行こうか迷いましたが、厚木に帰ってきました。主人が復員してから、ちようど一年後の昭和二年の十一月一三日でした。

しばらくは公会堂の留守番をしていました。慣れない土地での人間関係はむずかしく、引揚者といっても同情どころではありません。「どこの馬の骨かわからない」と近所に住んでいた人から罵られ嫌な思いもしました。妻田の三家というところに引揚者住宅があると聞いていたので入れてもらうことにしました。主人は横浜の食糧事務所に勤め、わたしも針仕事などして生計をたてました。どうやら暮らせるようになった昭和五年一月長女が生まれ、二六年六月に三男が生まれました。今その三男夫婦といっしょに暮らしています。

平成二年八月一五日、県主婦連の「平和のつどい」に招かれ、厚木市文化会館で終戦前後の満州での生活の体験を発表したこともあります。『歌と評論』という

### 『歌と評論』

短歌の結社、歌と評論社の機関誌。一九二九（昭和四）年に藤川忠治が創刊。戦時中いちじ中絶したが、現在は三馬昭一が編集及び発行人となっており、会員は全国で四〇〇人。

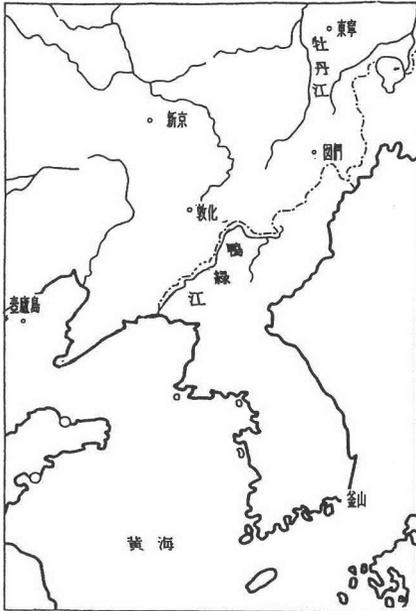
短歌の会に入れていただいてもう二〇年以上になりますが、ついつい満州でのことが忘れられず何首もつくってしまいます。好きな詩吟も総元代範の看板をいただきました。地域の文化祭や桜祭りなどには吟詠させてもらっています。みなさまのお陰で、今はとっても幸せです。

近詠 三首

母ちゃんと飛び出しそうな子の遺影遠き満州の生活思う

年重ね益々募り来満州の土と成りにし子を思う日々

若水を供えて呟く世にあらば遺影の吾子よ五五歳



朝鮮半島・満州国 (1945年頃)

聞き取り

二〇〇〇年二月三日

四月三日

## わたしを育ててくれた生活改善グループ

石井 ミネ

父はわたしが生まれて一か月後に風邪がもとで亡くなったそうです。母は、わたしを一粒種として石井家に置いて他家に嫁いだと聞いています。ですからわたしは、祖父母に育てられたんです。成人になるまでは、おば夫婦が後見人としていっしょに暮らしてくれました。

日支事変が始まった昭和一二年、女学校を卒業したわたしは家の跡取りとして農業をすることになりました。その頃の妻田村（現、厚木市妻田）は養蚕が盛んで田んぼもたくさんあり、とにかく大変でしたよ。終戦後に農業改良普及事業が始まり生活改善グループができ、ここまでわたしを育ててくれたのです。

### 女手だけの農業

娘の頃の楽しみといえば映画を観に行くことでした。厚木のキネマ館や厚盛館、



七八歳の頃

一九二一（大正一〇）年  
三月一五日  
愛甲郡妻田村生まれ  
厚木市妻田西在住

たまに河原口の相模座なんてところにも行ったね。田中絹代主演の「愛染かつら」などは今でも覚えてます。

お裁縫ができないとお嫁にいけないといわれ、町の仕立て屋さんに教えてもらいました。大東亜戦争が始まると召集令状があちこちにきました。兵隊さんの見送りや千人針つくりや慰問袋を送るのは、女子青年団の役目でした。

長い人生のなかで、わたしがいちばん困ったのはやはり終戦前後の頃でした。家の前の田んぼは二毛作で麦や小麦を収穫してから、牛を使って鋤き起こし、水を入れて田植えの準備をします。近所の人に頼むんですが、いつせいに始まるのでなかなか来てくれません。せっかく取った苗も枯れるし田んぼも固くなってしまし困りましたね。当時はまだ機械化されてなかったたので、すべて手作業でやったのです。戦時中のことゆえ女と老人ばかりだったので、わたしが男であつたならとつくづく思つたものです。

## 婿養子と結婚、まもなく戦死

同じ村の又村武男またむらたけおさんのお世話で依知村えちむらの中島重慶なかじまげよしを婿養子としてわが家へ迎えたのは昭和一六年二月。夫は二六歳、わたしは二二歳でした。翌年二月長女が生まれておじいさんは大変喜んでくれました。おとうさん（夫）は厚木町の農業

「愛染かつら」

川口松太郎作が一九三八（昭和一三年）『婦人倶楽部』に連載した小説が、松竹で映画化され爆発的人気を集めた。看護婦と若い医師の恋を描いたメロドラマで、田中絹代と上原謙が演じた。主題歌「旅の夜風」も大流行した。花も嵐も踏越えて／行くが男の生きる道／泣いてくれるなほろほろ鳥よ／月の比叡をひとり行く

会に勤め始めたばかりの四月にもう召集令状がきちゃったんです。八月には戦地に発つというので、長女をおぶつておじといっしょに東京まで面会に行きました。北支へ行つたのです。しばらくして身のまわりの品が送られて来ました。南方へ転戦するということのようにでした。

わが家は祖父母とわたしと長女の玉江の四人になつてしまいました。そのうえ妻田神社の氏子総代をしていた祖父が二〇年一月狭心症で亡くなつてしまいました。七八歳でした。この年の八月終戦となり、満州にいた日本兵は全員シベリヤに送られたとか、五年間は帰れないと聞かされましたが、南方のビルマや仏印方面の兵士は次つぎと帰つて来ました。食糧増産のため裏の桑畑の根っこをおばあさんと掘つていたとき、役場の人が来たんです。不吉な予感が走り、もしやと家に帰つたら、戦死の公報でした。その後、白木の箱が届き、なかには何も入っていませんでした。西部ニューギニア方面へ転戦の途中、敵の魚雷で船が沈み全員戦死したそうです。公報が届いたのは二年だったのでおじいさんはまったく知りません。知らないほうがよかつたかもしれない。北支から夫が送つてよこした日の丸の寄せ書きと軍事郵便の束が唯一の遺品となつてしまいました。物資のないときでしたから香典返しの品も無く、お金でお返しした覚えがあります。

次の二首は、後に詠んだものです。

出征の夫の門出に活けし桜その花に似て夫は散りにき

年老いし父母をたのむと短文の北支よりの便りいまはかたみに

## 亡夫の弟と再婚

男手のないわが家を親戚の人や仲人さんが心配してくれ、戦死した主人の弟、なかしまいさお中島伊冊男と再婚しました。夫は男八人女二人のきようだいです。そのとき玉江は五歳でした。これでよかつたと思つています。夫は柿生の農業会に勤めていました。二二年、物の無いときだったので、町の魚屋へ炭一俵持つて行つて式当日の料理を作つてもらい、すべて自分で自分の結婚式をやりました。

祖母は達者で、男の代わりに鋤を使い、田を耕し、麦蒔きなども先にたつてやってくれましたが、八〇歳のときの九月、身体の調子が悪いと言つて町の医者に診てもらつたんです。なにげなくいつまでも抜けない奥歯のことを先生に話すと「診せてごらん」といつて歯医者ではないのに、その歯を抜いたんです。消毒の薬もなかつたらしく、口の中が化膿し食事もできず、衰弱してしまいましたね。今思えば残念で忘れることはできません。主人が来てくれた年の一〇月一二日に逝つてしまったのです。

四九日の法要が済んでお客様が帰られたあと、陣痛が始まり長男が生まれたんです。予定日が一二月の末だったので何のしたくもしていなかつたけれど、おば

たちに助けてもらい無事出産を済ませました。おばあさんは亡くなるしおとうさんは勤めだし、今までおばあさんがやってくれていた味噌作り、しょう油仕込み、本家としての親戚付き合ひ、なにからなまでにまでわたしひとりです。これから先どうしたらよいものかと途方にくれました。その後、次男、次女と生まれて六人家族になり、今まで女系家族でしたから、二人も男の子ができた、親戚でも喜んでくれました。

### 農地改革で田畑を手放す

農地改革がまた大変で、不在地主の田畑は小作人に安いお金で売り渡すことになりました。わたしが帳面を見ながら、小作米の取立てをしてたんですが、五町歩ほどの貸し付け地は、依知、南毛利、三田と村の外が多くてね。結局、自作地五反歩ほどのほかは、七反歩が残っただけで、妻田村反田の代替地も地図をたよりに見に行き、ここここまでがわが家の所有地だと確認しただけで、解放となつてしまつたのです。田一反七五〇円、畑一反四四六円でした。役所の農地委員会からはたびたび呼び出されました。残しておきたいと思う場所も思うようにはいかず、わたしが男だつたら役場との交渉もできただろうに。地主と小作人とのあいだで闇取引があつたことも聞いているんです。余分なお金は一銭たりとも

もらうことはできませんでした。依知村（現、厚木市依知）では農民組合を結成  
していて、いっさい余分なお金はおき出しと約束していたらしいんです。当時、物  
価はどんどんあがっていましたから、一反何百円ではたかも同然でしたね。

昭和二五年に、農地解放したときのお金を、県の土木出張所よりもらいました。  
夫は「このお金はおじいさんが大切にされていた農地のお金なので、使うわけに  
はいかない」と言つて、祖父母と戦死した夫の墓を作つてくれたんです。「これか  
らは、わたしたちの代だから、子どもたちを育てながら、石井家をしっかりと継い  
でいこう」と決心しましたね。夫が来てくれてまもなく耕耘機を真つ先に買ひ入  
れ、田んぼも畑もこの機械でらくらく耕せるようになりました。

### いちば 市場生活改善グループの活動

昭和二五年、政府が、農業改良普及事業を発足させました。各地区で農業改  
良普及員が県の出先機関として指導にあたつてくれました。

これからの女はただ働くだけでなく、読んだり、書いたり、記録簿をつけるよ  
うにと言われ、まず台所の改善が叫ばれ、かまどの改善から始めました。ところ  
が昭和三〇年、一五〇名もいた妻田村の婦人会員が一人減り二人減りして、ある  
地区は全部ぬけてしまうという状態になつちやっぴんです。わたしたちはその原



市場グループのメンバー

困について話し合った結果、今までは新年会、敬老会だけで、会員一人ひとりの身近な問題を話し合ったりすることがなかったことに気がつきました。そこで生活改良普及員の力を借りて「市場グループ」を誕生させたのです。

その手始めに柿苗五〇本を県の園芸試験場より共同購入しました。植え付け指導に当たられた高橋、鈴木両普及員さんが「この柿の木といっしょに成長してください」と励ましてくださった言葉が胸に刻みスタートしました。しかしグループの歩みはそう速やかにはいきません。「婦人会があるのにもうひとつの会を作るなんて穏やかでない」「地域の平和が乱れるもどだ」という一部の反対もあつて理解を求めるのに苦心しましたよ。まず身近な問題として食生活を豊かにするため、古たくあんを利用しての福神漬け作り、三日間でできる強化味噌作り、イースト菌を使つてのパン作りでお互いその成果を話し合つてきました。衣生活の面では作業衣や、改良寝巻きの作りかた、また家族が気持よく寝るために一人ではできない布団の手入れをしようと綿<sup>わた</sup>無<sup>む</sup>尽<sup>じ</sup>もやりました。二年も続けているうちにグループ員の数もだんだん増え、活動も盛んになってきました。ところが、婦人会とグループと二重に会費を収めるのは大変だから、婦人会をやめてグループだけに入ると言う人が数人出てきました。そこでグループの運営資金は、毎月一人二枚ずつ雑巾を縫つて売り、資金に充てました。それでもグループが発展すると婦人会がつぶれてしまうという意見が出てきたので、婦人会の中の活動ということ



福神漬け作り（一九五〇年頃）

#### 無<sup>む</sup>尽<sup>じ</sup>（無<sup>む</sup>尽<sup>じ</sup>講<sup>こう</sup>の略）

金銭の融通をつけあうための組合。多数の人が定期的に一定の金を出しあい、くじ引き、または入札で当たったものがその金額をもらう。このようにして組合員全員に廻す。

でやっと納得してもらいました。

定例会以外の事業はすべて婦人会へ話し、新しくできた農協婦人部ともいっしょにできることはやると決めました。それからは柿の木を消毒するときも農協から指導員をまわしてくださいとさるし、市場じゅうの柿の木を全部消毒することができてみんなに喜ばれました。社会勉強ということで県の農業試験場の見学や料理実習も市場グループが中心になって計画し、大勢参加してくれました。かねてから要求していた公会堂の調理台も村の男の人たちの協力で立派にできあがりました。そののち、周囲の状況も変わり耕地もだいぶ減り、新しい住宅もたくさんでき、農村から都市へと変わっていきました。いろいろな苦い経験をしながら歩んだいばらの道は、わたしにとつて尊いものになったと思います。福神漬け作りもグループのトレードマークとなり、毎年の発表会には全員参加で漬け込みをしています。

## でこぼこ道を七年間

グループができて七年目のとき、今までの苦しかった道程を「でこぼこ道七年間」と題をつけ平塚の農業会館で発表しました。とても好評で、農業改良協議会から表彰され、区長から五〇〇円、農協からも五〇〇円お祝い金をもらいました。



寸劇「稲ぶらぼ」ちのある風景」より

翌年、おふくろたちの暮らしの知恵を「お茶うけ」という題の寸劇にして農業改良事務所で演じ、外部からも認められるようになりました。

昭和四三年から平成一〇年までの毎年、メンバーの一人である小島すみさんに脚本を書いてもらい寸劇を上演しました。そのときどきの話題や問題について意見を出し合い、まとめてもらったんです。平成一年から三年間の原稿はわたしが引き継いで書きました。

昭和三〇年に発足してから今までのグループの歩みを『なため物語』という冊子にまとめました。農家の主婦として、嫁として通って来た道を振り返りながら。定例会もすっかり暮らしの中に溶けこんできましたし、これからも長く続けるようにと、みんなで書いたんです。五一年には県で、ふるさと指導員制度ができ、わたしは福神漬け、小池一枝さんは酒まんじゅうの指定を受けました。五三年一〇月、県のふるさと祭りのときは、三日間県の行政センター（現、サポートセンター）内で、餡、麴、まんじゅう作りをやり、同時に餅つきのお手伝いもしました。

五四年、厚木市に朝市が発足し、市からの要望でわたしたちも参加することになりました。二月一日の市制記念日には甘酒や紅白まんじゅうも配られ盛況でした。自家製の梅干し、ふき、みょうがなどを自転車に積んでイトーヨーカ堂の駐車場まで持っていき、夫が作ってくれた台の上に並べて売りました。そのときの気持

#### 寸劇の題

息子のお嫁さん（一九六八年）  
持ちつ持たれつ（一九六九年）  
二つの財布（一九六八年）  
川の流れと心の流れ（一九八七年）

おばあちゃんの心配ごと（一九八八年）

猫の新年会（一九八九年）

買い物袋（一九九〇年）

あなたも犯人（一九九一年）

あすは我が身か（一九九二年）

年金を考える（一九九三年）

大地の恵み（一九九四年）

かあちゃんパワーで頑張ろう（一九九五年）

胃袋を外国に預けるな（一九九六年）

土は生きている（一九九七年）

食べ物は命（一九九八年）

稲ぶらぼつちのある風景一

三

（一九九九年～二〇〇一年）

ちはなんとも嬉しく、お金のありがたさも知りました。

## 『村のくらし』の出版と短歌

睦合地区の「文化を考える会」で勉強しているとき、村のくらしなど今書いておかなければと思いつたんです。それでおばたちから聞かせてもらった昔の話も思い出し、あれもこれもと書き始めたのです。農繁期の忙しいときはとても暇はありません。雨の日やちよつとした暇を見つけては書きました。近くの小島夫妻には全面的にお世話いただきました。農家の一主婦が昔の思い出の手記を書いたというので、読売、朝日、毎日の新聞に掲載してもらい、たちまち五〇〇部もなくなり再発行と、思いがけなく多くのかたに読んでいただけました。『村のくらし』『続・村のくらし』『続々・村のくらし』の三冊を自費出版し、厚木市の図書館をはじめ、教育委員会、小学校、公民館にそれぞれ寄付しました。小学校では副読本として使っているようです。

『村のくらし』を出版したこともあって、近頃では子どもたちにもわかしの遊びを教えてほしいとたのまれて、妻田小学校と清水小学校へ、仲間数人で毎年行っています。竹とんぼ、こま廻し、竹馬、竹笛、お手玉、羽根つき、姉様人形、おはじきなどでいっしょに遊んでいます。これももう七年になります。子どもたちか

『なたまめ物語』表紙



話者の著書

『村のくらし』

昔の村の様子・思い出。一九八五年刊。

『続・村のくらし』

農業のこと・村の講中・通過儀礼・伝説・女の暦。一九九〇年刊。

『続々・村のくらし』

戦前の生活・戦時体制・終戦あれこれ。一九九四年刊。

らのお礼の絵手紙が、大きな箱いっぱいになり、うれしくて、お仲間にも廻して見てもらったりしています。

夫も昔の農機具や生活道具など古いものを集めて、保管しています。ときどき小学生が見学に来ます。石臼を廻したり、縄ないの道具やお蕎麦、つくりの機械を動かし、蚊帳のなかに入ったりして遊んでいきます。子どものなかには、藁一本でもめずらしいんでしようか、家に持ち帰る子もいます。

婦人会の活動として、短歌の講座もあり、わたしも参加しました。短歌のご指導をしてくださったのは桐生好先生きりゆうしきです。先生はご高齢でしたが、及川から自転車で市場の自治会館へ来られました。最初は一〇人くらいでスタートしましたが、亡くなられた方もあり、今は四人です。先生の結社『歌と評論』にわたしも入会し今では同人になりました。わたしの作品は、農業を詠んだものが多く日記のような短歌です。先生との出会いは、わたしの一生の宝物です。平成一三年に三〇年間の短歌をまとめ『花菖蒲』はなしょうぶと題し自費出版をしました。

十五夜の月に供えし初生の夫が接いだる豊水五つ

くちなしの黄が鮮やかに染めあげしお節料理の栗の甘露煮

聞き取り

二〇〇二年二月一三日

## 母とわたしと、助産婦二代

金子 喜美子

一九二二（大正一一）年  
一月九日

愛甲郡荻野村中荻野生まれ  
厚木市戸室在住

八〇歳の今日、剣詩舞道の指導に車をとばして必ず通る舗装された妻田路はかつては夜半に迎えをうけたお産を無事に終え、わが家へと自転車を走らせた、たんぼ道でした。夜明けの空に、大役をなしとげた喜びは言葉では言い表わせないなんとも爽やかな気分でした。

養母金子マスは、大正一三年、二九歳で助産婦を開業しました。貧乏生活から始まったのですが、じよじよにその人柄と、当時高まつてきた国策の「産めよ殖やせよ」もあつて、当時自転車で産家（産婦の家）へ東奔西走する毎日でした。

### 金子家の養女となる

マスは自分の子どもには恵まれなかつたものですから、姉であるわたしの母に娘のわたしを養女にという話をもってきました。実母は、いづれ娘は嫁がせるの



聞き取りの日、自宅門前で

だから妹のところならと承知したのですが、父は初めは反対でした。でも金子からの熱心な頼みによく決心したそうです。

わたしが一〇歳、小学校五年になる昭和七年四月、荻野小学校から厚木小学校へ転校したのです。

養母（以後母とする）は頭のきれいな人で口八丁、手八丁、行動力も抜群の人でしたので、田舎でのんびり育ったわたしには毎日が大変でした。ただわが子を育てた経験がないためか、わたしを子ども扱いにしないんです。学校から帰ると、あの頃は、水は共同井戸でしたからバケツを下げて水を運び風呂を沸かし、ご飯を炊き、掃除を終え、と全部やっておいても、きつい仕事から帰ってきた母は、ほめてはくれませんでした。「ああ、よくやっておいてくれたね」という言葉が欲しかったのに。

当時は妊娠中絶は禁止されていましたから女中さんが奉公先で、妊娠しちゃったということが結構ありましてね。お腹が大きくなつてめだつてきますと働いている奉公先にはいられないので、母がその相談をお受けしておりました。病気ではありませんからお産までは家事は手伝ってもらいましたが、子どもが生まれたあとは赤ちゃんを置いて、本人は自分の家へ帰ってしまいます。

母が産家へとびまわっているあいだ、わたしがおむつを替えたり、ミルクをくれたりの世話をしました。これは大変でしたけれど、かわいいなあと思いまし

た。

一方で赤ちゃんを預けるところを探すのも母の仕事でした。赤ちゃんの末を考  
えてどこかよいところへとこれも大きな苦勞でした。

そのうち、母が留守のときに、産気づいたので、その家族が母を迎えに来る  
と、門前の小僧さんとやらで「陣痛の具合はどうですか」とか「母が帰りました  
らすぐ伺わせませう」なんて、女学生のわたしが言ったりするようになりました。  
なかなか母が帰って来ないと、はらはらしながら出たり入ったり待ち続けたこと  
も何度もありました。今の人にはわからないでしょうが、自宅分娩が普通でした  
からね。

その頃、母はたくさんの産家を抱えていて、今日は診察、今日は分娩、沐浴と  
すべて自転車で、まあそれはよく働きました。

出産が相次ぐと、ある産家の陣痛の合間に仮眠するだけで、一〇日も家で寝  
てないということもありましたね。あちらこちら沐浴にまわる途中、どうしよ  
もなく眠くなると、人通りの少ない田舎道で自転車を止めて、サドルにつつ伏し  
て、いつとき仮眠をとったと言っていました。

あの頃の母の労苦や、産家のみなさんの我慢強さ、母への信頼など今、頭の下  
がる思いです。

## 助産婦になるまで

そんな毎日でわたしはストレスがたまる一方で、もう助産婦にはなりたくないと思っただけです。でも昭和一三年に厚木高女を卒業すると、母の心に秘めた強い意向もあつて、東京帝国大学の医学部付属医院看護法講習科へ入学し受講することになりました。家を離れ東京での寮生活に入りました。二年後、看護婦として各科に配属されました。わたしは時間にゆとりがある精神科を選んだのです。脳腫瘍、精神分裂、脳梅毒、鬱病などの患者さんには看護婦協会から派遣された付添いの看護婦さんがいましたね。だからわたしの仕事は、患者の様子を日誌につけたり、検温や注射、血圧測定、患者さんとの対話、入院院の手配などでした。当直でなければ美容寮に帰ります。学校の裏門を出ると不忍の池があり、上野まで足をのせば松坂屋デパートは格好の買い物場所でした。よく本郷座ほんちゆうざに見に行ったり、友だちとボートを漕いだり青春を謳歌しました。

次いで東京府の助産婦試験に昭和一六年合格しました。母は大喜びで、帰省するたびに新しい器具を買い備えて「今度は、これ買ったよ」とコッヘル（止血器）、臍帯剪刀さいたいせんちゆう、気管カテーテル、血圧計、体温計など見せるのです。わたしを待ちのぞんでいるのがよくわかり、期待を裏切つてはと帰郷を決しました。翌

### 本郷座

明治の初め頃は新派の俳優が芝居をしていたが、関東大震災のとき倒壊しバラック小屋で再建。一九三〇年頃松竹系の映画館となり、一九四五年の東京空襲で閉館。

年は保健婦試験にも合格。その後、成瀬村役場（現、伊勢原市成瀬）の保健婦としての勤務も経験しましたが、昭和一八年、神奈川県に助産婦登録をし、母とともに家業を支えることになりました。

## 新郎は国民服で

昭和一八年、戦時中でしたので、母の心づくしの衣装も着ることなく黒の留め袖で式を挙げました。夫は相模原出身の座間<sup>ざま</sup>寿夫<sup>としお</sup>です。夫の兄は厚木ナイロン株式会社の堀家の養子となった元の社長です。夫もここで兄を助けいつしよに働いていましたが、のちにその系列の会社を独立させ経営するようになり、朝早くから夜遅くまで会社人間でした。当初、本人は婿に入るの嫌だということです。母はとても気に入っていて諦めきれず、それなら金子姓にしくてもよいからと、たつての願いで結婚となりました。夫は国民服、衣類も酒も切符制度というときで、とにかく派手なことは極力抑えなくてはならない時代でした。養父はわたしを嫁に出したあとおいおい泣いていたそうです。その養父が亡くなったのちに、一人になった母を思い、夫からの提案でわたしたち一家は子どももいつしよに金子家に籍を移したんです。

一九九年、長男を出産しました。前夜、縫い物をしていて、早期破水し、激しい

### 黒留め袖

既婚女性が礼装に用いる。五つ紋で全体は黒地で裾模様を着物。

### 国民服

国民の着用すべきものとして制定された。太平洋戦争中、男子が広く着用した軍服に似た服。

痛みのあるの出産でした。他人さまのお産を取りあげるばかりだったわたしが、初めて痛みを体験して分娩経過のそのときどきの兆候に応じた介護の気配りを会得しました。母は、一軒おいて隣にわたしたちの家を買ってくれましたので夜、寝に帰るほかは母のところでも面倒を見てもらっていました。

わたしの母乳は不足がちで、そのうえ牛乳も手に入りにくく、行列をして夫が買ってきたりしました。この頃から戦況はいよいよ悪化の一途をたどり敵機襲来は激しくなるばかりでした。

## 産めよ殖やせよ

お産は時を選びませんでしょう。灯火管制の暗い道を産家に向かうときは両側に木がうつそうと茂っているところなど道がまったくわからないのです。ただただ自転車を曳いて空を見ながら歩くより仕方ないんです。おそろしかったのは沐浴をさせた帰り、田んぼの畦で敵の機銃掃射に襲われたことでした。B 29が轟音をたてて編隊を組んで飛んで行くのに迎え撃つ日本の高射砲は一発も当たらないかったですからね。

東京が焼夷弾の雨あられ、焼け野原と化した頃は、この厚木でも駅は艦載機からの銃撃を受け、その流れ弾がわが家の板戸を突き抜け、そばのバケツに絞って

### 灯火管制

夜間の空襲を警戒しすべての電灯を消したり、覆いをして明かりが外へ漏れないようにした。

### B 29

戦争中に登場したアメリカの四基のエンジンをつけた大型爆撃機。ボーイング社製で日本への空爆はほとんど本機による。広島、長崎への原爆投下にも使われた。

### 艦載機

航空母艦などの軍艦に積載されていた飛行機のこと、戦争中日本近海にあって、そこから飛んだ艦載機の編隊に東京をはじめ本土の多くの都市は爆撃された。

あつた洗濯物の中ですくくるまわつて止まつていたんです。二分前までそこでわたしは洗濯をしていたんです。そこにいたら、わたしの両手も無事ではなかつたとぞつとしました。

夫たちは出征してしまい、その妻たちは留守を守り、妊婦であつても夫に代わつて畑や田んぼの男仕事をこなし、しゅうとめにも仕え、その上、何人もの子どもたちの世話で身を粉にして働いていました。診察に巡回すると、脚が象の脚のようにむくんでいる人もあつて、そこで指導しての帰り道かわいそうで泣けました。

産婦は出産が近づき陣痛がきて、痛みに耐えながらまだ家族の食事のしたくをし、お釜に湯を沸かし、沐浴の用意までして、よくよくなりました（ぎりぎりになつて）床に入り出産したんです。

赤ちゃんが生まれると、たらいでの沐浴をすませ、風呂敷で包んで吊し秤に乗せ体重を測つたあと、失明を予防するため硝酸銀を一滴、目にたらしました。淋病が多かつたのです。

おしめは浴衣の着古したものが主流でした。これは布がやわらかくなつていますが、たまには、堅い木綿のごわごわの布団の皮などで間に合わせたりしていました。そのおしめさえ用意できない人には、母は自分の浴衣をほどいておむつに縫つてあげてました。

産めよ殖やせよ

一九四一（昭和一六）年一月「人口政策確立要綱」が閣議決定された。総力戦体制での人的資源の確立を目的とし、大東亜共栄圏建設のため将来の人口を一億人とすることをめざした。

女子の結婚年齢を三年早めること、一夫婦平均五人の子をもうけることが目標。「悪い遺産のない人を選び、なるべく早く結婚せよ。産めよ育てよ国のため」という結婚十訓が作られた。

何軒もの産家を毎日自転車で回りきれませんので三日目（三つ目）、七日目（お七夜）、一日目と産後は三回巡回するんですね。一日目は井戸端参りと川が近くにあれば川端参りといってわたしが赤ちゃんを抱いて行き、米と塩を供えてお参りするのです。お産後三日間は産婦は水を使つてはいけないということとで一日目に床あげをして働き出しますので「水を使わせていただきます」ということと赤ちゃんに水の災いのないようにとの願いでしょうか。

三つ目のぼた餅とか七日目のお七夜は赤飯を炊きお頭付きやお煮しめでお祝膳を用意したものです。一日目お産の費用が差し出されるのです。母が中心でやっていたので、正確な金額はあまり記憶にないんですが、出征された家からはただかなかつたようです。

物資欠乏の時代でしたが、まずお産がうまくいかなかったということはありませんでした。異常分娩で危険な場合は最初から病院へ入院しましたからね。

大きな赤ちゃんでお産が大変だったときのことです。生まれた赤ちゃんはぐったりしていて気管カテーテルで吸い出しても泣かず、重たい赤ちゃんなので逆さにするのは無理、とつさに赤ちゃんの口に自分の口をあてがい息を吸い込みました。鼻からじゅくじゅくと飲み込んでいた羊水が出てきました。すばやく吸い取つてそれを繰り返しました。赤ちゃんは大きな息をして泣き出しました。紫色だった顔に赤みがさしました。「ありがとう、もつと泣いて泣いて」と言いなが

#### お産の費用

一九四三年頃、助産婦の規則で一〇円。しかし一五円から三〇円と地域によつて幅があったようだ。総合病院での入院は一日、二二円ぐらい（都内）。

ら赤ちゃんの胸や足の裏をさすりました。

栄養の面ではひどかったんですが、近所の家も子持ちが多いので、母乳があまり出ないと飲ませてもらうこともよくありました。

隣近所の奥さんが産婦の枕元に来て手を貸したり、汚れ物を洗濯したり、子どもたちの世話をしてくれたり助け合っていました。

夜、母親が添い寝しながら赤ちゃんにお乳を飲ませていて、昼間の疲れから寝込んでしまつてわが子をその乳房で窒息させたということもありました。

また就学前の女の子に赤ん坊を見させ、母親は稲刈りに行つて留守、泣き出した赤ん坊にさつまいもを食べさせて、それがもとで死なせてしまったというようなせつない話もありました。子どもを責めることはできませんね。

当時はどの家庭も子どもが多かつたので、親は一人ひとりを見てはやれなかつたんです。きょうだいはお互いに面倒を見、教え、喧嘩しながらも愛情も尊敬も、さらに社会性もしぜんに身につけていきました。

戦後はミルク万能というときもありましたが、栄養の点ではバランスがとれていたかもしれません。でも母の乳房に替わるミルク瓶のゴムの乳首で育つたミルクっ子たちは、哺乳時に頬に当てがわれていたハンカチやタオルを無性にこいしがりますね。それは母の乳房代わりなのでしょうね。母乳とミルクのそれぞれの長所、短所を見たような気がします。



沐浴のとき

とにかくあの苦しかったときの女性は、今から思うと、みなさん礼節に厚く、子どもたちを愛し、我慢強い、実に見上げたかたたちでした。

## 産児制限が叫ばれて

天皇のお言葉をラジオで聞いて号泣した昭和二〇年八月一日、その日を境にわたしの仕事も大きな変化を余儀なくされることになりました。それまでは「産めよ殖やせよ」だったのに今度は産児制限へと一八〇度の転換だったんですから。食糧不足は相変わらずひどく、女の人が終戦直後しばらくは大事な衣類を食糧と交換してもらいに農家へたびたび足を運んだりしていました。

アメリカのGHQの干渉で、家庭での分娩はだめという通達が来てから、進取の気性に富む母はさっそく自宅を入院分娩ができるようにと改造し、産婦を収容することにしました。入院となると何から何まで母子の面倒を見なくてはなりません。だいたい五日から七日ぐらいでしたが病院とはちがった家庭的な温かさを喜んでもらえました。

こうして一方では産婦のお産を助け、また他方では受胎調節の实地指導の資格を取り、各地区を保健所単位で訪問指導しました。解剖学的にはこんなものなんですよと解説し男の人にはコンドーム、女の人にはペッサリーの挿入指導をした

### 産児制限

人工的に妊娠や出産をさけて人口を制限すること。

アメリカのマーガレット・サンガーが女性を多産による貧困や負担過剰から解放するため提唱し、一九二四年に來日したが、日本政府に拒まれた。戦争中の「産めよ殖やせよ」の結果、子どもさんと食糧不足の戦後は、一転して大歓迎された。アメリカでサンガーと出会い、日本の産児制限運動の中心になったのは加藤シヅエである。

### GHQ

連合国最高総司令部の略。

一九四五(昭和二〇)年、終戦と同時にアメリカ政府が日本に設置した対日占領政策の実施機関。五二年、講和条約発効とともに廃止されるまで、すべての国政がその支配下にあった。

りもしました。一軒、一軒たずねるのは、しゅうと、しゅうとめといっしょだからと嫌がりましてので、希望者には助産所に来ていただいて実地指導をいたしました。厚木には以前からゴム会社の相模ゴムがあり、そういう器具を作っていました。

戦後すぐは、自家用車を持っている家など、まだわずかしかなかったんです。産婦の入退院の送り迎えをわたしができるようにと免許取得に小田急線に乗って東京の鮫州<sup>さめす</sup>まで通い続けました。神奈川県下には自動車教習所は無かったです。その頃は今とちがって砂利道だったり、泥んこ道だったりでやっと産婦の家までたどりついても、お腹の痛い産婦のこと、家ぎりぎりまで車を寄せないとだめなんです。細い道、ぬかるみ、ターンがむずかしいときは、冷や汗のかき通しでした。

わたし自身は昭和二一年に長女を出産しました。その頃親戚が台湾から引き揚げてきて、いっしょに生活していましたから、よく世話してもらい幼稚園に通う子どもたちとの賑やかな幸せだった日々が今も思い出され心が和みます。

児童福祉法の制定により今度は、新生児・妊産婦への訪問指導員となり昭和三七年から二五年間、頑張りました。産後二八日まで二回の訪問による指導をしました。保健所主催の母親教室（妊婦から育児中の母親までが対象）、三か月児、三歳児検診にもたずさわってきました。

#### 相模ゴム

日本で初めてのコンドームの開発、商品化に成功した厚木市内にある会社。一代で同社を避妊具のトップメーカーに育てた松川サクが設立者。

#### 松川サク

（一八九二～一九八六）

厚木市飯山に生まれる。愛甲郡立女子実業補習学校卒。一九三四年、アサヒラテックスゴム化学研究所を設立。一九四四年、相模ゴム工業株式会社社長に就任。

昭和五八年、九〇歳の母マスを見送りました。平成三年、わたしは四八年間の助産婦生活に終止符を打ち、その後は剣詩舞道に専念、現在に至っております。

母は八一歳まで五〇年間、わたしと二人いつしよの三〇年余、ともに教えられ、支え合い、二人合わせて八五〇〇余名の赤ちゃんを取り上げさせていただきました。

最近はまだ母乳のよさが見直され、助産婦さんによる分娩も復活してきたようですね。おかあさんの腕に抱かれて柔らかく温もりのある乳房でお腹をいっぱいにする。人間が成長を始める最初のこの時期、この感触に包まれてこそ人間形成により影響を与えるのだと思います。

聞き取り

二〇〇二年五月二五日

二〇〇三年六月六日

## 視覚障害者とともに

ぬまた  
沼田 美恵子

一九二二（大正一一）年  
一月二〇日  
高座郡海老名村生まれ  
厚木市寿町在住

平成一四年、厚木市ボランティア連絡協議会会長の大役を無事終えることができました。振り返ると五〇歳頃始めたボランティア活動も、今年で三〇有余年になります。子育ても一段落し、さあ何をしましょうというとき「今までご苦労さんだったね。これからはちよつと社会のためも考えて生きねば」と夫が申しました。この一言が発端で今があります。ご趣味は、と聞かれると困りますわね。一直線にこの世界を歩んでいたらほかのことをする余裕がなかったのです。

### 一男五女の末っ子として

わたしは兄とは年齢が一七歳も離れていますのよ。兄のあと女ばかり次つぎと生まれたので、わたしは「女だったら他家にあげよう」なんて言われて生まれてきたそうです。



ボランティア会議で

母、エイが四〇歳過ぎの出産でした。でも兄も姉も未っ子のわたしをとてかわいがってくれましたの。物心ついたら周りは大人ばかりでした。あまり子どもらしくなかったでしょうね。父、上島源治郎うえしまげんじろうは小学校校長でしたし、周りに教員の多い家庭環境でした。兄、上島一夫うえじまかずおは戦前は厚木、横須賀、長野県松本などの旧制中学校の教員をしていました。歳の離れたこの兄を、わたしの父と勘違いしているかたがいらつしやいましたね。兄にとつては少々不満のようでした。

小学校は海老名村立海老名小学校でした。バレーボールを知り夢中になった日々でしたが、六年生のとき母と死別しました。寝込んだこともない母でしたが、脳溢血であっけなく逝きました。まだ五四歳でした。ですからわたしはきょうだいに育ててもらったようなものです。「母親がいないとあんなか」と言われないようにと、思ったんでしょね。父からはかなりきびしく育てられました。

### 大妻技芸学校で白衣を縫う

昭和九年四月、県立厚木高等女学校に入学。四年間バレーボールに熱中しました。炎天下では水水で冷やしながら練習し、日焼けで顔は羽目板のように真っ黒になりましたね。卒業したら女子師範に進むつもりでしたが、父は歳をとつてからできたわたしを早く結婚させたかったのでしよう。教師になったら嫁にいき遅

れる心配もあり、また結婚しても相手が教師であることが多く、とかく世間が狭くなると思ったのでしよう。師範は反対され、大妻技芸学校にしました。

入学は日中戦争が始まった翌、昭和一三年でした。厚木高女からは、わたしだけでした。当時、兄が現在の杉並区阿佐ヶ谷に住んでいましたので、兄のところから市ヶ谷の学校に通学しました。学校では編物や刺繍の宿題があり、課題提出もありました。兄宅では小さな姪二人の世話などで都会の友人のように遊んではかりいられませんでした。それでもここでの二年間、大好きなバレーボールだけは続けていました。大妻で、傷痍軍人用の白衣を縫ったことは忘れられません。女学校の裁縫では考えられないことでしたね。簡単な寝巻きのようなもので縫うのはとてもやさしかったです。市ヶ谷は近くに大本営陸軍部、陸軍省、参謀本部などがあつたし、昭和二三、四年は軍国の気運に追いかけているようでした。

### おたすけ観音に祈る

昭和一五年、大妻を卒業しました。お裁縫の免状を得て座間の小学校で教ええました。知人の紹介でお見合いをし、学校を辞めて昭和一七年三月、沼田滋夫と結婚しました。わたしは満二〇歳、夫は一〇歳年上でした。愛甲郡睦合村及川の人

傷痍軍人

戦闘その他の公務のため傷痕を受けた軍人軍属のこと。

白衣を縫う

一九三八年に国家総動員法が公布されると、女学校教育も軍国色が強くなった。節約貯蓄や心身鍛錬が言われるとともに、軍服や傷痍軍人が着る白衣を製作するなどの勤労奉仕が課せられた。とくに大妻高等女学校・技芸学校は率先して勤労奉仕にあたった。

で、当時、厚木中学校教員から文部省に勤務が変わった頃でした。新婚半年経つか経たないかで、夫に赤紙が来しました。満州から北支、中支と転戦したそうです。本音は反戦論者ですので、幹部候補を断つて一兵卒で通し、だいたいじめられたようですよ。

わたしは夫の出征中、及川の夫の実家にしゅうとめ、妹三人の女ばかりのなかに、子どももない身で置かれました。わたしと一つ違いの妹としゅうとめが家事をし、わたしが家にもどうしようもないので、初めに少しだけ座間の小学校へ手伝いに、その後昭和一八年から二〇年まで小鮎青年学校女子部で裁縫などを教えました。校舎は小鮎小学校を借りていました。このときの校長は久崎輝男先生でした。

夫は出征したまま、戦争はさらに激しくなり機銃掃射を受けて、小学校の窓にも大きな穴があきとても恐ろしかったです。銃後じゅうごがこんなだから戦地はさぞひどいと思ひ、夫の戦死の報も覚悟してました。女ばかりの家で、もし戦死なんてことになったら「わたしは持ってきた物なんか何もいらぬ。みんな置いていきますから、わたしだけ父のところへ帰らせてください」という言葉を心の中で繰り返した日々でした。戦争末期には、横浜やらあちこちから親戚が疎開してきて物置などにも住み、いつとき二四人もの所帯まゝおんじになったんですよ。

あの頃、綾瀬村におたすけ観音で有名な報恩寺まゝおんじがあり、多くの人がお詣りしま

久崎輝男

(一九〇五—一九五八)

昆虫類の採集と郷土史研究に力を注いだ。厚木で、ギフトウの存在を確認した。

銃後

前線に対する言葉で、戦争後方支援基地のこと。一九一三年に桜井忠温の日露戦争の従軍記「銃後」が初出で、太平洋戦争中には「銃後の守り」「銃後の勤め」は女の役割として強調された。

おたすけ観音

綾瀬村(現、綾瀬市)の曹洞宗の陽広山報恩寺の観音さま。第二次大戦中は「死なないで無事に帰ってきてほしい」と切なる願いで、境内は参詣者でいっぱいになった。出征者の情報交換やお参りに来た人どうしの励ましあいの場となったという。

した。初めは妹たちもいつしよに行きましたが、やがてわたしだけが夫の無事を願ひ、安否を知る人を探して何度も何度も通いました。そんななか、夫の弟が結婚し男児が生まれました。子どものいない嫁のわたしはひたすら夫の帰還を祈るだけでした。

昭和二〇年八月一五日の玉音放送ぎょくおんほうそうは小鮎農業会の二階で聞きました。悲しかったです。夫の生死はまったく不明でした。二一年三月、夫が戦地から無事帰還しました。

あらためて結婚生活のスタートです。とはいえ、その間に三人の妹を嫁がせ、農地解放で減った土地を守るために慣れぬ農業もしました。家族も増えました。二三年長男、二七年長女、二九年次女と誕生しました。

### 金曜日はカレーの日

昭和四五、六年は、三人の子どもたちも大きくなり、一段落ついた頃です。夫も文部省から横浜国立大学に移り、哲学の助教授、教授と歩んでいました。

子どもの教育費はまだ必要ですし、自分だけの稽古事はお金がかかるでしょう。それ以外に何か役立つことがしたいと夫と話し合っていた矢先、昭和四七年でしょうか、厚木市の広報で点訳講座公募に出会いました。新聞などで以前か

ら、視覚障害者が点字本がなく読書ができないことを知り、点訳つてどう勉強したらよいのかと思つていたところでした。家族とも相談した上、この第一回点訳講座を受けました。それから毎週金曜日が点訳の日となりましたね、簡単に作りおきできるカレーが、その都度テーブルにのりましたのよ。「今日はカレーの日ね」が、我家の合い言葉になりました。今はパソコン点訳ですが、当時は点字板をコツコツと打つたものです。深夜、宿題で打つあの音は耳につくのですが、家族が理解してくれたので続けられたのですね。

講座を修了するとそのまま、厚木市点訳赤十字奉仕団（以下、点・訳とする）に入団する仕組みになっていました。多くの受講者が「どうして？ 変ね」と言いつつも団員になりました。でもこれがわたしのボランティア活動の入口となりました。三〇年も経ちますと、第一回の受講者は高齢になり、今も在籍しているのは三人くらいでしょうか。

活動をするうちに、視覚障害者がみんな点訳を読め、打てるとは限らないというところ、まして中途失明者にはとてもむずかしいことがわかりました。点訳に替わつて録音がすでに横浜、川崎、横須賀、平塚で、取り入れられていました。情報（情）を耳から伝えるための厚木市録音赤十字奉仕団（以下、録音とする）を、先達（達）のかたがたと厚木市で立ち上げました。昭和四九年四月のことでした。そんなこんなで点・訳グループに籍を置きながら、録音のほうに重点を移していきました。

#### パソコン点訳

パソコン入力して点字プリンターで点字印刷ができるので、効率がよい。全国ネットを通して何部でも点字図書ができる。

講座の指導者側に立ち、後継者を育てるように努めました。なかなかむずかしくてね。録音委員長を一〇余年もいたしました。

録音を始めた頃、せつかくテープを読んで作っても聞いてくださるかたがまだいなくて、あちこちの視覚障害者の情報を集めては自宅に伺ったのです。わたしたちが買える範囲のテープとテープレコーダーを持って「いつまでもお貸ししますので聴いてください」なんて出前ボランティアのようなことをしました。「うちのおじいさん、こんなもの聴かないよ」と、お嫁さんに門前払いをくらったりしながら読者を開拓しました。こんなこと今の録音奉仕団の何人が知っているかしら。録音するのも市役所地下のコンクリートむき出しの寒い部屋などを転々といたしました。平成二年、厚木市総合福祉センターに立派な機材を備えた録音室や点字作成室などを作っていました。

### ボランティアはみんな

日本赤十字社は、皇后さまを名誉総裁に、世界のため国のための奉仕を信条としていた団体です。団員のわたしたちも活動を奉仕といいますが、この言葉には少々抵抗があります。ボランティアという言葉のほうがいいですね。赤十字奉仕団には特殊赤十字奉仕団、青年赤十字奉仕団、地域赤十字奉仕団があります。訓

#### 読者

点訳・録音でも聴くとはいわず、読むとか読者と表現している。

練、技術を要する点訳や録音は特殊奉仕団です。

平成五年一月、厚木市誘導赤十字奉仕団を結成しました。誘導専門の奉仕団は全国で初めてということで、各新聞にも取り上げられ、NHKの取材も受けました。

平成一五年四月から、身体障害者福祉法等の改正により、支援費制度が導入されました。それにもなつてわたしたちのボランティア活動も変化してきました。障害者には、病院、学校、講習会へは、誘導のためのガイドヘルパー制度がありました。しかし、シヨッピングとかレジヤールの場合はガイドヘルパーは頼めなかつたのです。その部分をボランティアが補っていたのです。支援費制度になつてからは、楽しみのことにも何にでも利用できるようになりました。それとともにわたしたちボランティアを利用する人が減ってきました。ボランティア活動も団体誘導、サウンド・テーブル・テニス（通称、S・T・T）、大正琴、編物などの介助がおもになつてきました。

厚木市の四〇以上のボランティア団体が集まつて、厚木市ボランティア連絡協議会（通称、ボラ連）を、厚木市社会福祉協議会のバックアップのもと平成二年に発足させました。この代表を初年度から平成一四年までいたしました。

こうしてわたしなりに続けてきたボランティア活動で気付いたことがあります。最近のボランティア団体は、小さくまとまつて自分たちのグループだけうま

#### 支援費制度

この制度では、利用者が契約に基づいてサービスの提供を受け、利用料を支払う。その費用について支援費という公的助成を受けることができる。

#### 誘導

視覚障害者の外出援助のこと。

#### ガイドヘルパー

視覚・肢体障害者の外出の援助。厚木市では社会福祉協議会が事業主になつているが、地域によっては民間が認可を受けて事業を立ち上げている。原則は有料である。

サウンド・テーブル・テニス以前は盲人卓球といい、音の出る球（普通はピンポン玉の中に金属が入っている）を転がしてゲームをする。介助ボランティアがつく。

く活動できていれば納得するようです。でもね、一人のボランティアよりみんな  
で、一団体より多くの団体が連携してのほうが輪が大きくなり、力になりますよ  
ね。またぼつと思いついてボランティアに入った人のなかには、わたしがこれだ  
けしたのに「ありがとうの一言もない」と不満を言う人もいます。受ける側でも  
ある人は、あまりにも「ありがとう」を連発しますし、ある人からは「わたした  
ちがいるから、あんたたちのボランティアの仕事があるんだ」と言われました。  
障害者のかたからは、ときに重い相談もあり、また「沼田さん、豆ご飯どうやっ  
て炊けばいいの。教えてよ」なんてほほえましい電話をもらうこともあります。  
一言で障害者といいますが、障害も苦しみもさまざまです。わたしたちも、いつ  
そちら側にいくかわかりませんでしょう。ともに生きていくんですよ。

それにしてもわが家の家族はわたしの活動をよく理解し、協力してくれます。  
今日もあと半年ほどで九一歳になる夫を一人家において出てきましたの。「お父  
さん、お弁当を作っております。召し上がってね。わたしも同じお弁当よ」っ  
て。親戚の者が、「美恵さんは、亭主をひっぼつといて好きなことしている」と  
も言っていますが、夫はその非難をおもしろがっているようです。それどころか  
たくさんかかってくるわたしへの連絡電話にきちんと対応し、メモしてくれま  
す。「わたしもボランティアだからね」と言っております。わたし一人がボラン  
ティアをしているわけではないですね。周りの協力あつてのことです。一、二



アイマスク体験

年前から夫を長時間一人置いて出るのが気にかかるようになり、活動も少なくし、携帯電話なんか持つようになりましたの。わたしも八一歳です。夫は運転しないので、わたしが四〇の手習いで運転免許を取りました。車にはもみじマーク（高齢者マーク）が必要になりました。教習所で教習を受けないと更新できないの。もちろんまだ運転していますよ。子どもたちが心配しているので充分気を付けています。

わたしたち夫婦には何も自慢はないんですけれど、どこに行っても、「ぜひわたしたちのように、お二人揃って長生きしてくださいね。健康には充分注意して」と、お話しております。

聞き取り

二〇〇三年二月六日

## 旅館は女商売

古根村 喜代子

一九二七（昭和二）年

三月二日

東京府南多摩郡町田町生まれ  
厚木市七沢在住

七〇年以上封じられていたことをわたしの代で公表しました。昭和六年三月から四月にかけて、あの小林多喜二さんがここ七沢温泉の福元館に一月ほど滞在したことをです。以来全国からお客さんがたずねていらつしやるんです。わたしの今のつとめは、そのかたがたのお相手です。多喜二さんのご供養のつもりでやっています。

## 男勝り人生のスタート

わたしは、昭和二年、町田で七人きょうだいの長女として生まれました。高等科を卒業して母親が学んだ実践女子工芸学校に行くつもりでいたのに、上の兄二人を戦争にとられ泣く泣くあきらめたんです。長女として家も妹たちも守らねばと強く思いました。両親と、百姓など、なんでもやりましたよ。

実践女子工芸学校

一八九九（明治三二）年、下田歌子が実践女学校、実践女子工芸学校を麹町に開校。一年あるいは二年で修業できる専門学部もあった。

七沢温泉  
幕末、七沢村の古根村仙蔵が農業のかたわら浴槽を設けたのが始まり。明治には湯治場として知られるようになった。

植田<sup>うえた</sup>（田植えのこと）なんか朝からほつかぶりをして先頭にたっているの、上の方から「ヤーイ、どこの男衆かよ」「なんだ娘っこかよ」なんて声をかけられたの。ひよとり（日雇い）に来てくれた近所のおじさんたちに負けずに耕したりして「よく仕込んだな」と親はほめられていました。

わたしたちの時代はお針ができれば嫁にはいかれなと言われました。お針自慢の母親に、紋付、袴まで縫えるほど仕込まれました。時には物差しでぶたれましたが何でも縫えるのはきびしかった母のおかげです。

でも若いから青年団なんかに入って運動会の選手になったり、祭りで踊ったりよく遊びもしました。戦後すぐの青年団ではアメリカ人がダンスを教えるから、希望者を募ってくれといわれ、こわごわ先頭に立ってやりましたね。ほんとうに威勢のよい娘でした。

### むささびが飛ぶ七沢へ

結婚は昭和二四年です。叔父（実母の弟）が明治大学の学生のころ、福元館に湯治に来ていて、主人の一番上の姉初子<sup>はつこ</sup>と知り合い、いっしょになりました。主人古根村専蔵<sup>こねむらせんぞう</sup>はたった一人の男子だったので、万が一のことを考えて叔父は古根村の養子にと頼まれたんです。ですから叔父は義兄でもあります。古根村初子は

九二歳、横浜で健在です。

そんな叔父の縁で、たまたまわたしに白羽の矢が立ち、町田からむささびが庭にいっぱいの七沢の山の中に来たんです。親のいうことはきかなければならない昔でしょ。強引でしたね。まあ叔父のつながりで主人の顔くらい知っていましたかね。

結納は「中屋」のおじいちゃんや義姉夫婦たちが来てやりました。もののない時代でも三日間かけて家で結婚式をしました。知り合いがトラックを手配してくれたので、荷物を屏風のように立てその真中に座って七沢に来ました。

当時、旅館は「玉川館」「中屋」と、うちの三軒でほんとうに鄙ひなびた所でした。うちは部屋数は一二部屋ほどで、お客さんは大体三〇人ほど対応できました。

あの頃は食糧がないので、お客さんはしょう油、味噌、塩、米、粉などみんな背負って来ました。持ち込みのものを計って何日逗留できると決め、またそれで食事を作ってあげました。宿泊代は二〇〇円から三〇〇円くらいでしたかね。

宿の仕事は先々代（三代目）のおヤエさんからきびしく躰たられました。浴衣を縫えといわれ一枚縫うでしょう。次の日「今日は何しましょ」と言うと、「二反出してきて」「これ縫って」、三日目に「もう終わりですか」と言うと「まだあるよ」と、三反出されてね。これはわたしの腕を見ているなと思っただね。四日目に「もうないでしょ」と言うと五反積み上がったいたんです。歯をくいしばって夜中の

三時までかかつて仕上げました。次の日「今日は何枚ですか」と言うとお前がそれだけ縫ったんであるわけないよ」って。この先々代の大しゅうとめは小田原藩士の出とかで、近所でも有名なしゅうとめはおとなしい人で、朝から晩までお勝手に入ってお客さんのご注文をきいていました。わたしにも「洗濯物はしておくからおまえは座敷をやりなさい」と言ってくれる人でした。

お客さんが少なかったり、いないときなど、わたしは鍼くわを担いでさつさと畑へ行きました。百姓ならまかしておけてね。お茶畑もあつたんです。こわいおばあちゃんが「喜代子やお茶の手ごしらえを見たいよ」と言うので「そんなことわけないわな、作ってやるわな」って、長火鉢の上で蒸した茶を煎つたんですよ。おばあちゃんはそれを飲むと「いつ死んでもいいや」と言ってくれました。嬉しかったですですね。四、五年前までお茶をこしらえていたけどお客さまも増えて忙しくなつて止めました。わたしは働くことは苦にならず、また何でもできるわという気持があつて「あいよ、あいよ」とやってしまうのね。

## 五代目女将になる

昭和二七年に三代目のおばあちゃんが亡くなるんですが、前年に「おまえがこ

の家をやるのだから身上しんしよはおまえのものだ。これはおまえがしまつておくように」と言つてお金をわたしの前に置いたの。まだ両親がしつかりしているのにお金をしまえるわけがない。「西も東もわからないわたしにどうして」と聞きました。「おまえなら心配ない。この家にはおまえより他にない。おじいちゃん（自分の息子憲司けんじ）は朝から一斗樽の酒を飲んでるし」つて。ほんとうにしゅうとは片口をかかえて一日平均一升五合は飲んでました。でも樽をキューツとしばらく音はなんともいえず粹でしたね。親なので怒るわけにいかずはらはらしていたんですが、七二歳で亡くなりました。

結婚して二、三年で財布をまかされ荷が重かつたですね。おばあちゃんが亡くなつたとき、しゅうとをそつちのけにして葬儀の手配からお返し物までいっさい一人でやりました。当時はご近所のかたにすべてお任せする時代でしたが、伊勢原の「茶加藤」や、まんじゅう屋にも行つて品物を頼みました。近所では孫嫁がでしゃばつてと非難されましたが、家のことをうちでやるのに人に頼むことはないでしょう。風当りは強かつたですよ。

旅館は女商売というでしょう。女が背負っているんです。男はあつてもなくても、仕入れものだけしてくればいいの。結婚したとき主人は二四歳でした。いないなと思うと山で鉄砲打をしてたり、変な音が聞こえると思うとアコーデオンを弾いてたり。趣味人でした。わたしがいくら忙しくても知らん顔、座敷いっ

片口

一方にだけつき口がある取手のない鉢。酒、酢、しょう油などを他の容器に移すとき用いる。

ばい紙を広げて花魁おいらんの絵を描いてるの。祭りの行灯あんどんの武者絵なんか上手でしたね。でもちよつと手伝つてなうと怒るので勝手にさせておいたんです。

そんな主人にも三四年には車の免許をとってもらいました。まだ車はあまりなかったけれど、仕入れや客の送迎にこれからは絶対必要とわたしは考えたんです。しゅうとが許してくれそうもないので、今日はなんとかの会合、今日はなんとかのお役とか、口実をもうけて主人を車の教習に出しました。内緒にするのに大変でしたが免許をとって翌年すぐ車を買わしてもらえました。

### 進駐軍・労組・あれこれの客

昭和二五年くらいから座間の米軍キャンプの外人が風呂に入りに来ました。

三、四人で来るんです。英語はわからないし、びっくりしちゃった。背は高いし、このあたりによく出ていた蛇を手でふり回して軒先に釘で打ちつけたりするの、ともかく恐ろしかった。その外人たち、お金のかわりにタバコを持ってきてビフテキだオムレツだと強引に言うのよ。こんなときしゅうとは達者なもんで豚肉でビフテキを焼き、フライパンをぐるつとまわしてはオムレツを作ってた。

風呂には石けんを身体いっぱいつけたままドップリ入ってしまうの。ダメと

言つても強引でね。寒いときなど掻巻かひまきを着てうろろう歩きまわるの。わたしはいやでいやで逃げ出したくらいでした。他の旅館もみんな困つてましたね。お金のかわりのアメリカのタバコがいっぱいになって防空ごうだった穴に隠しておいたの。あるとき米軍のMPがやってきてみつかつてしまった。事情を十分説明できずに、ヤミ物資を隠していたという理由で、しゅうとは捕らえられ連れて行かれました。ある人が早く帰してもらおうよう口利きしてやるというので、おばあさんが息子大事と三万円もお金を渡しました。でもそれが明らかにインチキでわたしがかけ合つて取り戻しました。しゅうとは四〇日過ぎて無事帰つてきました。そんなこともあつて、おばあちゃんは「喜代子でなければ」と言うようになりました。

だんだん日本人のお客さんが主になるとお客同士の喧嘩に手を焼きました。日頃のうつぶん晴しで、障子を破つたりガラスを割つたりするんです。幹事さんは困つてるし、いくら引っぱつても言うことをきかないときは噛みついたんです。次の日跡が残つていましたよ。でもお客さんはどうしてだかわからないの、それほど酔つていたんです。わたしもまだ若かつたのですね。それとね、お金をもらつてはじめてお客でしょう。「金をもらわないうちは客ではない。だからあんたは帰りなさい」なんて喧嘩する人を追い返したこともあります。今でも幹事さんに頼まれると出ていって静かに注意はしますが。

昭和三〇年代から四〇年代にかけ労働組合が盛んだった頃、自動車関係の組合の幹部がたくさん人を連れて来ました。初めは「ありがとうございます」と頭を下げていたんです。でも一番の幹部が威張ってみんなを泣かすようなふるまいをするの。あんまりなので「黙りなさいAさん、今日はありがとうございますよ。でもあんたね、労組の幹部なのに慰労の場でみんなを泣かすなんて論外だ、帰りなさい。もう来てもらっては困る」と啖呵を切りました。

三無事件さんむの関係者八人ほどが泊まったことがあります。昭和三六年の一月のことです。数日前から刑事らしい三人が泊りこんでいて変だなとは思いましたが、とんでもないことを計画していたようです。

お客さんが来ると芸者さんも呼ばれました。厚木にも芸妓置屋はあつたんですが、うちでは秦野からです。おじいちゃんが懇意にしていた秦野駅前の藤屋さんからタクシーで来ましたよ。

### 「猪電車」が走った頃

三〇年に七沢の四旅館（玉川館・中屋・福元館・玉翠楼）で猪鍋を始めました。おじいちゃんが鉄砲の腕が良く以前から猪なんか仕止めてお客さんにお出ししていました。大々的にするには猪肉の確保、保存、調理など大変でしたがあ

#### 三無事件

一九六一（昭和三六）年一二月一二日発覚した旧軍人・右翼によるクーデター未遂事件。

行動隊に三無塾（無税、無失業、無戦争の三無主義を目指す）のメンバーがいた。主謀者は川南豊作、八名が有罪、その中に福元館に泊った前田準がいた。

#### 「猪電車」

小田急が丹沢の温泉郷で冬の名物猪鍋を囲む日帰り入湯会用と銘打って、一九五六（昭和三一）年一月運行開始。料金は、入浴と鍋で三四〇円。

頃は保健所もうるさくなく、まあなんとかなるだろうと始めました。ガスもなかったので七輪に炭をおこしてやっただけです。うちのタレは山口屋という猪肉屋の直伝です。うちではわたし以外作らせなかったの。おいしいと評判になり、小田急電鉄は「猪電車」を走らせました。新宿から伊勢原駅まで小田急で来て、そこから神奈川中央交通の団体バスで七沢へ、一号車は福元館、二号車三号車はどこそこへと四軒にふり分けられました。本当ににぎやかでした。お客さんのお帰りには赤や青のテープをにぎって「ありがとうございます。またどうぞ」なんてやりました。裏ではね、小田急から添乗員さんが二、三人ついてきて調理場で好きなように飲んだり食べたりしてました。そういうサービスをしないとお客さんをもたえないという頭があつたんでしょう。しゅうとは「おいビール出せ、お酒出せ」でした。こんなブームも五、六年は続いたでしょうか。そのうち、車社会になりお客さんの嗜好も変わってきましたからね。

五二年に七沢観光まつりが始まりました。「七沢音頭」はうちのお客さんが作詞作曲してくれました。歌っているのはまだ新人だった大月みやこさんです。

## 今の生きがい

わたしたちには子どもがいなかったので昭和三七年、喜八郎きはちろう（戸籍上義春よしはる）が



聞き取りの日の女将

伊勢原の高部屋から養子に来てくれました。これが六代目です。五〇年に春代と結婚して孫娘が一人います。みんなよくやってくれます。しゅうとを三九年に、しゅうとめを四二年に、主人の専蔵を五七年に見送りました。その間わたしはきつい女と言われてもいっしょうけんめい福元館を守りました。土地のそこ、ここを削ってバスが通れるようにし、部屋も風呂も増改築して大きくしました。新館は当時はまだめずらしい鉄筋で建てました。

甘えてはいけない。負けてはいけないとつつ走って来ましたが、今の生きがいは小林多喜二さんのご供養をすることです。多喜二さんの足跡をたずねていらっしやるお客さまに好物だったというおはぎを作って差し上げることです。

わたしは多喜二さんのことは直接知りません。義姉の初子だけが姿を見、その歌声を聞いています。からだ中傷だらけでおばあちゃんが彼岸花の根をすつたぬり薬で手当てをしてあげたことなど知ってるそうです。

多喜二さんは義姉が通っていた厚木高女の女の先生に「難儀をしている若い作家をしばらく預かってもらえませんか」と頼まれて一か月ほど離れにお泊めしたそうです。その先生のこととは関西からいらしたことを以外はよくわかりません。そのあと「このことが知れるとお手々が後ろにまわることになる」とおばあさんが口外を禁じました。以来七〇年間古根村家の秘密でした。わたしは嫁いだときうすうす知らされました。

女将の案内する多喜二滞  
のはなれ



小林多喜二

(一九〇二—一九三三)

日本の代表的なプロレタリア作家。奴隷労働の実態を描いた「蟹工船」「不在地主」など多くの作品を残した。

福元館では「オルグ」を執筆。治安維持法違反で捕えられ、二九歳で警察で虐殺された。

嫁の春代は離れが多喜二さんの滞在したところと知り「壊してはいけない。今に誰かが何か言ってくる」と言うのです。八〇円切手にもなっている偉い人だからと思ひ、そのまま残しておきました。

平成一二年三月突然の電話。「七沢温泉で小林多喜二が滞在していた旅館を探しています」。わたしは頭のなかが真白になりながら「それはうちです」と答えました。この時代だから、今、言わなければと思つたのです。

さあ、それからが大変、全国からのひっきりなしの問い合わせ、訪問者、訪問者です。今は隠れて滞在された離れを大切に保存し、若くして虐殺された多喜二さんのご供養をするのがつとめと思ふ日々です。

聞き取り

二〇〇二年一〇月六日

二〇〇三年五月二〇日

二〇〇三年五月二七日

## 「お千代さんは働き者」といわれ

くまさか  
熊坂 千代

一九二七（昭和二）年

四月一三日

愛甲郡柵沢村生まれ

愛川町中津在住

旅行先の旅館にて



父親が畑で一服するとき、よく昔話をしてくれました。お茶を飲みながら聞くのが楽しみでね。あたしは長女ですから中津村（現、愛甲郡愛川町中津）へお嫁に行くまでずっと家にいて、畑の手伝いやお蚕さんの世話をしていたんです。家のことも世間のこともあたしがきょうだいのなかで、一番知っているでしょうね。嫁いだ家は、他人の倍も働く人たちだったんです。あたしも気が強いでしょう、本腰入れて頑張りました。牛を一頭二頭と増やしてね、土地も借金しながら一町歩自分のものになりました。その土地は子どもたちに分けてやりました。ただただいっしょうけんめいまっすぐに生きてきましたよ。

## 家族全部で一四人

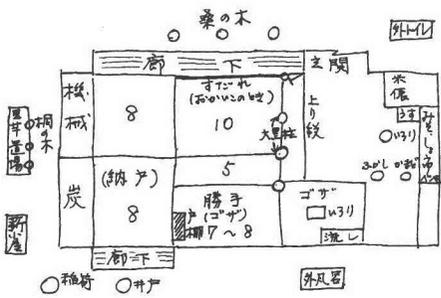
あたしの家は柵沢村（現、厚木市柵沢）で一五代続いている農家なんです。田

の字型の家でね、座敷が一五畳、奥が八畳、納戸が八畳ね、お勝手が七畳で、台所は土間になって一五畳あるの、その奥のほうに味噌、しょう油のおいてある部屋。上がり段は三間の長さで高さは一尺、土間には米俵が積んであったの。そこであたし育ったわけ。畑も山もあつたんで、子どものやることはいっぱいありました。あたし、八人きようだいの総領でしょう、学校へ行く前は戦争のよう。高等科二年の頃ですよ。妹たちには「廊下の雑巾がけをしなさい、台所を掃きなさい」って命令してね。あたしは庭で干し物を干すの、筵むしろを七〇枚も八〇枚もひろげてね。ゆっくりなんかやつてられないからどなりまくってさ、それを八時までにして学校へ駆け足で行くの。帰って来ると親は待っててね、妹や弟をおぶつてお風呂の水汲みをしたんです。

昭和一九年に父親の弟二人が相次いで戦死したんですよ。二人とも結婚していらんで残されたおばさんや子どもを預かつたんです、二年間でしたけどね。家族全部で一四人。まるで宿屋みたい。あたしたちきようだいは一五畳の座敷に頭を並べて寝ました。預かっている子どもは納戸でね。

四升釜にさつまいもを早蒸かしにのせて朝蒸かすの。大勢だから誰かしら食べちゃってね、夕方にはなくなつちゃうんですよ。お米は月に二俵ないとたらなくてね、台所の隅に床をあげて一年分、二四俵積んどきました。もち米も三俵ないとお餅がつけないんで作りました。

柏木家  
一九四五（昭和二〇）年頃



## 父親の教え

父は一八歳のとき、自分の父親と弟をチブスで亡くしたんです。そのとき九〇歳過ぎの祖父父母ときょうだいが残されてね、妹たちは学校も二、三年で終えて子守奉公に出したつて言つてました。だから「おじさん、おばさんが来たときは笑顔でおもてなしをしろ、でないとおちがあたりぞ」つていつも言い聞かせられて育つてきたの。おばさんたちが来るとそれなりの笑顔でね、迎えました。

第二人が戦死したときはさすがに力を落としていました。親代わりに父が育て所帯を持たせたんですから。「俺はなんちゅう因果だんべ」つてこぼしましてね。「おとつちゃん、ものは考えようだよ、戦死した人は何の楽しみもなく早く世を去つたじゃない。いくら面倒見るんでも苦しいことばかりじゃない、元気でいれば子ども多くいるし、おふくろさんも元気だし楽しいことあるんだから、自分はいあわせだと思つて過ごさなきゃあ」つて一八、九歳の娘のあたしが意見しちゃつたの。

父は器用な人でした。当時は外風呂だつたんで水汲みは大変だつたんです。子どもの仕事でしたからね。父は裏の竹藪から孟宗竹を取つてきて半分に分けて井戸から風呂場に繋げてね、つるべ井戸から汲んだ水をそれに流せば運ばないですむでしょう。わたしたちが楽に仕事ができるようにつて工夫してくれました。

田植えも一六歳のときから父に教わつてやりました。父が村会議員をやつてたんで代播しろなききは近所の人に頼んでやつてもらいましたけど、「人を頼まないでやろうよ」つて言つてね、植えるのは二人でしました。苗は前の日おふくろさんと二人で取つちやうの、ザブザブゆすいで根つこは全部切つちやつてね、ひつくり返してパカンと口が開くように取るのがコツなね。そうすると田植えがしやすいでしょ。家では紐は使わないで蟹みたいに横歩きに植えていくんです。四角になるように始終目をそこにやつていれば縦から見ても横から見ても斜めから見てもまつすぐになるでしょう。目見当でやりましたけど最初の列は父が植えて手本を示してくれて、この九株をみてればどうやつてもまつすぐ植わるから大丈夫つていわれてね、まるで海軍の旗みたいになつて仕上がりがとても綺麗でした。

## お蚕さん

昔、よまよまんんばりばりつて言つて奥行き四間の長さの厨子ずしが二階と三階にあつたんです。座敷の一五畳と台所の天井になるんですけどね。丸竹を渡して縄すだれで簾すだれみたいすだれに編んでありました。二階の両端に畳一畳分の板戸があつて、棒の下のほうを外へ押し出して風通しをよくしてありました。お蚕さんの無いときは三間梯子をかかけて、小麦わらを運んでその板戸からなかに入れたんです。屋根をふく材料なん

### 代播

田植え前の田に水を満たし、  
鍬または馬鍬を使つて土を砕  
き田面を平らにする作業。

### 厨子

萱または麦殻ふき屋根の屋根  
裏部屋。

です。三階も同じようにできてましたけど、三角の窓と格子があつて、それは明り取りと風通しに利用しました。お蚕さんの時期になると繭を作る場所になつたんですよ。自転車競走ができるくらい、お蚕さんが五〇貫育てられるだけの広さでした。

お蚕さんは春蚕（五月）、初夏蚕（八月）、晩秋蚕（九月）と一年に三回やりました。忙しい盛りは茅ヶ崎の製糸場から若い女工さんを借りて、手伝つてもらつたのを覚えています。

お蚕さんが始まると、一五畳の畳全部上げて細い和紙でまわりの障子を隙間がないように目張りをしました。天井にも油紙を敷いて空気を逃がさないようにしたんです、火を熾おこしたとき効くでしょう。部屋には炉が三つ掘つてありました。初めは一つの炉に一俵の炭を入れて火を熾し、外で燃した藁を冷まして箕みでそうつと持つてきてその炭の上におくんです。お蚕さんが育つにしたがつて炭を増やすの。これはおふくろさんの仕事でした。炭は家の山から父親が切つてきて、あたしとおふくろさんがやせ馬で下の炭焼きの家へ運びました。二窯焼くと二年分ができるんです。

お蚕さんは簞かばに蚕座紙さんざしを敷いて、その上に幼虫をのせて育てるんですよ。一二段の棚があつて手前に簞を引き出して桑をくれるんです。これはあたしの仕事でした。籠出していうんです。父親やおふくろさんが「お前はいやつて言ったこ

#### 箕

穀類をおおつて、殻、塵などを分けて除く農具。竹、藤、桜などの皮を編んで作る。

#### やせ馬

関東、東北地方で「しよいこ」のこと。

とがないな」って誉めてくれました。うれしかったですね。

お蚕さんは四回脱皮するんです、一眠、二眠、三眠、四眠とね。四眠は青虫の最後で、二日くらいは桑をやらす石灰をかけて乾かすんです。四眠のあとは柔らかい桑を食べさせてね。春蚕のときは桑の枝のままお蚕さんにのせるんですが、初秋蚕と晩秋蚕の桑は葉を摘むんです。そうすると来年までに良い桑ができるんですね。

青虫が赤くなつて透き通つてくるとそれをひきると言うんですが、家ではそのとき三本の大きな桑が活躍するんです。東向きの家なんでちょうどそれが午前中日除けになるんですよ。今日蚕がひきるといついときに父親が庭へポンポンと切り落とすの。最後の桑です。畑まで取りに行かないですみません。手を省くためなんです。父は一八歳のときから苦労していたからいろいろ考えました。

ひきたお蚕さんは拾つて篩ふるいのなかに置いてあるお盆のなかに入れるんです。それに綱をつけてスルスルつと二、三階の厨子へと送るんですよ。箆こもに菰こもを敷きそこへひきたお蚕さんをのせて族まぶしを置いてね、そうするとお蚕さんが好きなところへ行つて自分で繭を作るんです。春蚕は四〇日で繭になります。繭ができるとそれをざるに取るんです。繭かきつていうんですけど、良い繭、うすつかわ、たまん繭に分けてね、良い繭だけゆたんでいう繭の袋に入れて、牛車に積んで父親と運びました。厚木や中津の蚕の出荷所へね。

まぶし

蚕具の一つ。藁などを束ねて作りよく成長した蚕を入れて繭を作らせるもの。

うすつかわ

薄皮繭といって、蚕はなかに入っているがフニヤフニヤして繭の層の薄いもの。

たまん繭

玉繭といい、一つの繭のなかに二匹の蚕が入っているもの。

あたし、女らしいこともやっただんですよ。一七、八歳からおふくろさんに教わって糸取りや機織を覚えしました。厚木の加工組合で繭を白地にもらい、染物屋さんに染めてもらったり、秦野まで染め粉を買いに行つて自分でも染めました。伸子張りを庭に張つてね、三枚でできるんですよ。歳をとつても着られるように地味な色に染めました。なんでも手作りだね、ものがない時代だったから。今でも自分で染めて縫つた着物をきています。二一、二歳の春、二、三、四月と荻野へお裁縫を習いに行つて、夜具布団、ひつかえし、羽織、長襦袢、雨コート、ねんねこ半纏とひと通り覚えしました。

### 三番叟を舞う

お嫁にいく前は女子青年団で支部長をしていました。会合はほとんど夜でした。戦時中のことで服なんか持つていかなかったの。着物着て半幅帯ちよこつと締めて出かけました。

村のお祭りで踊るでしょう、毎晩練習に行きましたよ。公民館とかよその家の物置とかで、レコードかけてやぐさ踊りとか習つてね。棚沢の皇大神宮の鳥居ができたときのお祝いに選ばれて三番叟をしたんです。唄は先生が、わたしはおふくろさんのひつかえしを着て「高砂の 松は日出る国に太平 鶴は千年亀は万年



ゆたん（油単）  
ひとえの布・紙に油をひいたもの。風呂敷にも用いた。  
娘のとき、糸から織つて仕立てた着物。

結ぶ末広祝杯の席 本日ここに慰労会を祝す」って舞いました。

戦時中は出征兵士の見送りがありました。相模原のほうから演習のためにトットと何台も戦車が通つて尼寺原（現、厚木市緑ヶ丘）のほうへ行くんです。国防婦人会の人は通り端へ戸板を並べて麦茶なんかを出してましたよ。演習の途中で家へ兵隊さんが泊まったこともありました。台所に筵を敷いて休んでもらつたのを覚えています。おにぎり作つたり、炊き出ししたりしてね。馬もいっしよだったから庭の木に繋いでね。ついでに桑の葉も食べられちゃつて困つたこともありました。

当時、馬耕ばこうの講習会がありましたね、棚沢の農業委員の人が出てみないかつて。棚沢で一人でした。「ああ行くよ、何でもやるよ」って言つて家で飼つていた朝鮮牛を連れて長坂（現、厚木市下川入）の耕地へ行つたんです。赤いたすき、手甲てこうま脚絆あしづま姿でね、棚沢から下りて川入を通つて長坂まで牛を引いて歩いて行つたんです。そういうの楽しいの、好きだから。女が三人、男が五、六人でした。講習会では男の人が馬でやつてみせてね。牛引つ張つて来て馬鹿見たなつて思いましたけどね。

わたし牛の世話は自分でしてました。おとなしい牛だったんで、よく言うことを聞きましたよ。新宿しんじゅく（現、厚木市下荻野）のかざりやさんて屋号の精米屋さんに母親と米、麦、小麦を三俵牛車に乗せて行くんです。リヤカーより楽でしょ

う。娘だからほつかぶりしてね。一俵の精米に三〇分かかるので待つてるあいだ、かざりやさんのおばさんの繕い物をしてやったりしてました。

## 棚沢村から中津村へ

中津村へ嫁いだのは昭和二四年でした。初代は裸一貫から始めたそうです。おばあちゃんはよその仕事を手伝い、おじいちゃんは河原の土手を作るじゅかご蛇籠、太いはりがねで編んだのあるでしょう、あれを作ったりひょうとりをしてお金を貯めてね。田代（現、愛川町田代）の古い牛舎を買って牛を飼い始めたって聞いています。乳牛を一頭、二頭つて増やしてね、それでしんしよ身上を作ったって言ってました。

お見合いでね、結納のときまであの人がそうかなって。いいかげんなもんでしよう。青年団の副団長だつて聞いていたので、馬鹿じゃ人がさせてくれないと思つてあたし、返事したんです。結婚話があつたときおふくろさんを連れて、相手の家がせいが菫菫小学校の先輩の家の近所なので様子を聞きに行きました。あたしここまで来たんだから「相手の家のなか見ってくる」って行ってきました。向こうの両親が二人でいましてね。「ちよつと卵買いに来たんですけど、この辺で卵売つているところありますか」って聞いたら、かき餅とお茶がちゃんと用意してあつてね、知っていたみたい。「卵はうちにないけど近所へ聞きましようか」って言わ

### 蛇籠

竹や針金などで丸く細長く編んだ籠のなかに、小石や碎石などをつめたものをいう。河川工事の護岸などに用いた。

いたの。だけど「自分で捜します」って言って、かき餅とお茶を一杯ごちそうになりながら、台所を見たら俵がいっぱい積んであるの。「これだけあれば食べんに困らないだろう」と思ってね、一町五、六反百姓をしてらんでいうから安心して母親に話し家に帰りました。

生活改善が叫ばれて、派手なことはいけないうって言われたけど、筆筒、張り板、下駄箱、長持ち、たらい、裁ち板、全部用意しました。筆筒ひとつをお米一俵で買う時代でしたけどね。

結婚式の朝は四時半からしたくし始めました。高島田に腰までの模様を着てね。質素にということでしたが親が作ってくれたんだから、もしも中津村に入つていけないって言われたら、裸になるからいいよって度胸を決めました。

棚沢のご近所に暇乞いとまごいをしました。隣組と付き合いのある家一五軒、青年団の友だちのところ、全部歩いてお昼までかかりましたね。お供に親戚の人や近所のおばさんが付いて来てくれたんですけど、お嫁さんがいちばん歩くの早いつて。嫁ぎ先の中津へも歩いて行つたんです。その日はちょうど中津小学校で村民大会だったんですよ。中津じゅうの人が集まつたの。あたしかまわずそこを歩いて行つたら、子どもがぞろぞろついてきて花嫁行列。楽しかった。嫁入り先の家に着いたのは三時頃でしたね。家に入る前に近所四〇軒歩いたの。廻り終わつて松明たきまわとばしをしてなかに入り挨拶してから、今度は本家のおばさんに連れられて隣組

暇乞

別れを告げること。厚木のほうではお嫁に行くときに使う。

へまた挨拶に廻つたんです。夜にはなるし、雨は降ってくるしで、蛇の目傘さして畳のついた駒下駄に履き替えて歩いたんですよ。暗くて道はでこぼこして草だらけでしょう、鼻緒の前がポツンと切れちゃって、近所の人に直してもらったの。それを知つてた人は、悪いことがなければいいがって心配してくれました。

### まっすぐに生きて

しゅうと、しゅうとめは近所でも評判の働きもんだつた。遠い畑へもリヤカー引いてね、しゅうとの後について早足でタツタツとあるくでしょう。足のふくらはぎが毎晩痛くて、でもあたしきついからそれに耐えてね。婦人会も趣味のこともいっさいしませんでした。する時間もありませんでしたしね。昼は畑仕事、夜はほうれん草こしらえていっしょうけんめい働きました。夫も働き者で、畑だ、田んぼだ、牛だつて。嫁いで一二年間、手拭い一本買えなかつたし一円のお金も自由にならなかつた。もう疲れきつて裏の土手に行つて一時間ぐらい泣いた、辛くてね。しゅうと、しゅうとめがぎびしかつたから、夫にも人にも言えない。自分ひとり宿命かかつて思つて泣き明かしたこともあります。ただね、子どもを母なし子にしたらかわいそうだと思つて、しつかりしなさいって自分をひっぱたいてやってきました。二〇代、三〇代まで。だから親に何を言われても口返しひ

とつしなかつた。ただ黙って涙こぼして。

その後は、しゅうとが病気になつてね「お前に全部渡す、いつさいまかせるから」って通帳渡されたの。まかされた以上は、一円のお金も返答できないと困ると思つて家計簿つけ始めました。

働き過ぎでしょうね、五〇歳すぎて腰骨が飛び出しちゃつてまつすぐ歩けなくなつちやつたの。どこの病院行つても治らない。その上昭和五一年娘を嫁にやつた年、おばあさんがよその葬式に行つた帰りに道で倒れちゃつたんです。その場で息を引き取つて、八三歳。おばあさんを亡くしておばんしもやんなきやんないし疲れきつてね。忘れもしない五五歳のとき、心筋梗塞一歩手前の狭心症で春日台の病院に入院してね、それから四二日寝つきり。面会謝絶で死ぬかと思つたわ。次の年も二回目の発作がおきて二六日入院しました。もう痩せちゃつてフラフラでした。

その後はもう楽にしようと思つて家を改造してね。夫を平成四年に見送つてからはもうストップ、百姓はやらないつて言つて、農機具やいろいろいつさいがっさい処分しました。お父さんが亡くなつてからほんとうに思うんです。今は誰に何を言われようとも、恐れるものはない。自分でまつすぐに生きてきたんだから、これからは自分の人生を精一杯生きようと思つて、気持ちを変えました。昔のことをぐちぐち言わないことにして。

おばんし  
夕飯のしたく。

近所の人がああとき、心臓で亡くなっていたらかわいそう過ぎるって言ってくれるの。元気になってよかったねって。心臓の薬は二〇年飲み続けておりますが、お陰様でからだも丈夫になりました。

何が嬉しいって子どもが横道にそれないで真面目にやってくれるのが一番嬉しいです。その子どもたち四人全員大学へやりました。

あたしたちは学校行かれないから、せめて子どもだけはしっかり勉強させてと思いい「お前なんか今の世の中はな、英語でも何でもできなきゃ生きていけないから」って言ってお父さんといっしょけんめい働きました。末の子がソロバンやりたいと言ったときも「ソロバンやるからには月謝払うんだから、雨が降ろうが雪が降ろうが始めたことは一回でも休んだら、母さん辞めさせるよ、守るか」って言ったなら「守る」って言うんで行かせたんです。とうとう休まずやり通しました。ほかの子どもたちも大学へ入ると夏休み、春休みはアルバイト。汗だくでやる工場で働いたり、家庭教師したりして頑張りました。ですからあたし増やした土地は子どもに分けてやりました。

お陰様であたしは長男といっしょに暮らしてはいますが、ほかの子どもも元気にやっております。あたし、今までどこへも出ていませんでした。六六歳になつて初めてご詠歌を、翌年からは老人会に入つて詩吟とカラオケをしています。からだがよくなくてね。くよくよ言っている暇なんか無いの。

ご詠歌の仲間と



聞き取り

二〇〇二年五月二四日

## 磨けば光る心と教室

やまだ  
山田 富美枝

一九二八（昭和三）年  
一月六日

愛甲郡南毛利村長谷生まれ  
愛甲郡清川村煤ヶ谷在住

玄関前にて

二年前、最初に受け持った生徒のクラス会に呼ばれました。「先生の好きな言葉覚えていますよ。磨けば光る心と教室でしょ」と声をかけてきた子がいました。心の教育としていつも黒板に書いておいた言葉を覚えていてくれたのです。昭和一九年、一六歳の秋、わたしは愛甲郡小鮎村小鮎国民学校（現、厚木市立小鮎小学校）の教壇に立ちました。そして、平成一五年三月に一二年務めた愛甲郡清川村の教育委員を退くまで、六〇年近く教育にかかわることができました。

### あわただしく教壇へ

わたしは昭和三年、愛甲郡南毛利村長谷（現、厚木市長谷）で父神崎又平と母キヌの三男九女の七女として生まれました。親は「何にしても教育は財産だ」といって、その時代にある教育をみんなにしてくれましたからね。九一歳の姉も、今、実家を継いでいる兄もみんな師範学校を出ているんですよ。だから大変だった



たと思います。父は学校の先生をしていましたが、辞めてからは農協の組合長や村長代理をしていた頃もありましたね。

厚木高等女学校を卒業したわたしは神奈川県国民学校訓導養成所へ進みました。入試は横浜師範の女子部で受けました。厚木高女からは四人行きました。授業は鎌倉師範で六か月間毎日、朝から晩までびっしり受けました。全教科ですからね。二年間で教わる分を半年で仕込まれたという感じでした。教育実習もやりました。もっと勉強したいという思いもありました。しかし戦争が激しくなってきました。男の先生は戦場へ駆り出されました。それで現場は忙しくなっていましたからね。

養成所へは小町の下宿から通いました。その下宿は大巧寺だいせうじという安産祈願のお寺でした。父の知り合いで、きょうだいみんながお世話になった家です。兄と二人で厚木から自転車で三時間ほどかけて布団を運びました。大変だなんて思いませんでした。休みには電車で大船まわりか藤沢まわりで厚木に帰って来ました。自転車で帰って来たときもありました。昔はみんな足を鍛えてあったのよね。

## 生徒と心を一つにして

小鮎国民学校は当時、男女共学で一年から六年までと高等科の二年までありま

した。一学年三クラスずつでしたから、六学年で一八クラス。高等科は二クラスずつで四クラスありました。一クラスは四五人ぐらいでしたね。わたしは五年生を受け持ちました。先輩の師範出の先生がたが、ぱりつと高等科をやつてらしたわね。高等科になると先生と生徒が同じくらいの体格でしたよ。

教科は国語、算数、理科、社会、体育、図工、音楽、なんでも教えました。女子はなぎなたですよ。運動会ときにはオルガンを運動場の真ん中に出して、先生が弾いて、踊りも教えました。拡声器も先生が取り付け、何から何まで全部先生がやっています。子どもたちのために夢中でしたからね。高等科では勉強のほかには作業時間には炭焼きをしていました。炭を灰にしないように火を止めるときは土を練つて窯の前と後ろを塞ぐことも覚えめました。豚を飼つたり、牛を飼つたりもしましたね。

校舎は第三校舎まであつて第一校舎、第二校舎はどうか教室として使えましたが、今までのようにはいかなかったわね。小鮎にも横須賀から、田舎に親戚がない学童と引率の先生が疎開してきました。第三校舎はその人たちの教室になったり、学校を守るために入つて来た**団部隊**が使つたり、軍の食糧が入つていたりしていました。そこには番兵がいて先生は入れませんでした。小鮎の子どもたちは、横須賀の子どもたちを、自分たちの仲間としてよく受け入れてくれました。

その辺は先生が指導しなくても親がうまくやつてくれていましたよ。

#### 団部隊

敵軍の本土上陸作戦に備えて厚木には**団部隊**が玉川、南毛利、小鮎、荻野など各小学校に分駐した。しかしこの部隊は老年兵が多く、武器は銃剣だけという貧弱なものだった。それでも村人たちは期待し、信頼をかけていた。

一時、空襲が多くなったので安全を期して地域別の分散教育になりました。近くの神社などで勉強を教えました。短い期間でしたが、心細いつたらありませんでしたよ。それまではすごく楽しい学校だったのに急に変わっていききました。教師として自分が責められているような感じがしましたね。

「日直の先生は空襲になっても逃げちゃいけない」と言われていましたので、自分が日直のときは校長の机の下に隠れていました。ある日、第三校舎から煙が出ました。火事になったら困ると思つてずいぶん心配しましたが、置いてあつた煙草に機銃掃射の弾が入つて、ぱあつと煙がでたんですよ。大事には至りませんでした。第二校舎の柱全部に弾が入っていました。後日、日直の先生はその状況をくわしく書いて、愛甲地方事務所へ報告に行かなきゃいけないのです。それも小鮎から自転車ですね。一日仕事でした。

その頃は時間の隙間を見つけては教育していく感じでしたよ。「時間をかけてやりましょう」なんていう教育はできなくなつてしまつたんですよね。当時の学校には奉安殿があつて天皇、皇后の御真影が納めてありました。朝は必ず子どもたちも先生もそこに向かつて最敬礼をしました。こうして先生と子どもたちは心一つにしていっしょうけんめい勉強しました。それでも戦況がどうのこうのという細かいことは全然伝わってきませんでした。

最近、農協が「タイムスリップ」という企画で、新聞に現在の写真と古い写真

#### 奉安殿

天皇、皇后の写真、教育勅語などを安置するために学校の敷地内に作られた施設。一九二〇年代後半から一九三〇年代にかけて普及。

をいっしょに載せてくれることになりました。小鮎地区は忠霊塔ちゆうれいとうの前の石段で撮った、わたしのクラスの写真を出してくれました。その写真を見たとき、たんに気の毒になつてね。子どもたちは親の作つてくれた衣服で、冬なのに裸足に下駄よね。それでもぐちぐちいう子どもはいませんでした。たくましかったですよ。わたしが着ているものも兄が使つた袴を自分で背広に直したものでした。わたしも自分が着るものは全部自分で作っていました。

長谷から小鮎まで自転車を通つていましたが、冬は大変でした。途中の尼寺原は霜柱がひどく、タイヤに泥が絡んでしまつて走りづらいです。時々自転車を降りて棒で泥を落としながらペダルを踏んで行きました。あまりにひどい日は行き帰り一時間ずつ歩いたときもありました。一番怖かつたのは職員会議で帰りが遅くなつたときです。明かりは提灯ちようちんでした。懐中電灯だと相手を照らすことができますが、提灯は自分を照らすだけです。誰かが後ろから追いかけて来るような気がして、提灯を消し、走つて家に帰つたときもありました。人家はぼちぼちでしたからね。それでもなるべく明かりのある道を探して帰りました。

わたしが二一歳のときに母が脳溢血で倒れました。家族のみんなもよく見てくれました。二年後、こんどはわたしの番と思ひ教師を辞めて母の看病をすることになりました。

#### 忠霊塔

戦死者の遺骨が納めてある塔で忠魂碑と同義。今も小鮎小学校の木立の中に建っている。

#### 背広

今というスーツ。女性のスーツを当時は「背広」と言っていた。

## 大切な手紙といっしょに嫁ぐ

結婚は二六年の春でした。嫁入りじたくを始めた頃、衣類は全部点数制で、一人何点と決まっていました。その券と交換でしか買うことができなかつたのです。わたしは小鮎にあつた呉服屋さん「反物が入つたら取つておいてね」と頼んでおき、自分がいつどこへ嫁いでもいいように早くから少しずつ買い揃えておきました。

母は寝ていても頭は冴えていましたので、「どこが何寸」「どこまでやつたかな」なんて言いながらわたしに着物の仕立てかたを教えてくださいました。すごいんですよ。縫い物は「これくらいいいかしら」なんて言つてもだめでしたね。結局ひつかえしも、お布団も全部自分で縫つてきました。綿入れは和裁の好きな姉に手伝つてもらいました。下手でも何でも自分でやつて、身に付けておこうという気持ちになりましたね。頑張つてお花のお免状も取りました。

母は倒れる前に帯一本と絹物一反を織つておいてくれました。きょうだいが多かつたのにみんなに用意してありました。親はありがたいですよ。

主人、山田正美<sup>やまだまさみ</sup>は二五歳でした。小鮎小学校で一年間、同僚として働いていましたが、翌年「もう少し勉強したい」と言つて早稲田の英文科へ編入しました。

東京では下宿生活でしたので、わたしはまめに手紙を書きました。一週間に一回

### 衣類の点数制

一九四二(昭和一七年)二月一日実施。一年間の割当では年齢、職業に関係なく都市部で一〇〇点、郡部で八〇点。三つ揃いの背広で五〇点、国民服・学生服三二点、ワンピース一五点、スカート二二点、ブラウス八点。五一(昭和二六年)一月三十一日廃止。七月一九日自由販売になる。

ぐらいいは出しましたね。主人も返事を書いてくれました。家に帰って来るときは本厚木の駅でよく待ち合わせをしました。話をする場所は、いつも煤ヶ谷行きすすのバス停近くで立ち話でした。時間はあつと言う間に過ぎて最終バスで帰って行きました。一度、兄と二人で東京の下宿へ訪ねたこともありましたね。わたしたちを支えてくれた大切な手紙の束も行李こぶりの中へ入れて嫁いで来ました。あの当時は恋愛結婚なんて言えませんでしたからね。両仲人があつたほうがいいということ、山田の親類と、姉の夫にお願いしました。

結婚式の当日は朝四時頃、厚木の萩原さんで高島田を結って、姉が縫った江戸褌たいまつを着せていただきました。式は主人の自宅でした。松明とぼしというのがあつて、男の子と女の子が雄蝶おちよう、雌蝶めちようになり松明を持つて、たとえ火の中、水の中と言つて蛇の目傘をさしながら歩きました。お客様は玄関から上がりましたが、お嫁さんはお勝手のほうから入ったんですよ。お料理は魚屋さんが二人、泊まり込みで作っていました。

披露宴の一日目は親戚の者、二日目は主人の友だち、三日目は村会議員をやつていたしゅうとのお付き合いの関係者でした。あの頃は三日もかける結婚式はなかつたですよ。生活改善運動で簡素化がいわれた時代でしたので、「江戸褌などは着ちやいけない」と言われましたが、「お姉さんのお古だよ」といつて着ちやいました。公民館で式をされたかたも、五〇〇円会費でされたかたもあつたんで



結婚式の当日

すよ。でもそれは役員をやっていた家庭くらいでしたから、その形式はすぐ、くずれちゃいましたね。「うちの子はかわいそうだった」なんていう親もあつたりね。まあ、いろいろでした。

きょうだいがみんな田舎へ嫁いでいるので「わたしぐらいは変つたところへ行きたい」と言つていましたが、一番田舎へ来てしまいました。

## 一日の始まりは四時から

二六年の四月から煤ヶ谷村立煤ヶ谷小学校（現、清川村立緑小学校）へ復職しました。家では養蚕を春蚕はるし、夏蚕、秋蚕と年三回やっていました。家の中は座敷から台所まで養蚕室になつてしまいます。家中作業場です。忙しかったですよ。

朝は必ず四時に起きました。一日の始まりです。まず自分の身じたくをして、お釜でご飯を炊いて、囲炉裏で味噌汁を煮て、そのあいだに掃除をしてというように二つ三つの仕事を同時に進めていきました。朝食のあと片付けもして学校へ出かけました。

お夕飯もわたしが帰つてきてから蕎麦を作りました。二食はご飯で夕食は必ず蕎麦でした。疲れているときは蕎麦粉に少しお湯を入れました。こしがなくなり、おいしくないのですが、機械をまわすとき手首が楽なのです。「今日はこし

がないけど我慢してね」といつて食べてもらいました。夕食後はあと片付けをして、ポンプでお風呂に水を入れて、沸かして、しゅうとから順に入ってもらいました。翌日のために水がめにも水を汲んでおきました。おやつもよく作りました。焼きもち、お饅頭、炭酸饅頭、うどん粉を練っておせんべい風に焼いたりもしました。主人は家事を手伝う人ではなかったの、家族のこと全部がわたしにかぶさってきました。人の倍やらなければ勤めには出られなかったのです。

一番厳しいと思ったのは、嫁いで幾日も経たないのに、しゅうとめから「はい、男物縫つて下さい」、「はい、女物縫つて下さい」と反物を出されことでした。わたしは、試されたなと思いましたよ。

## 夫と暮らした一〇年

結婚した年の一二月に長男が生まれました。その月末に「教頭先生が担任を持つておられるので、いつから出て来てくれますか」と言われて、翌年の正月からもう出勤です。あの頃は代わりの先生が来てくれなくて、産休が無いに等しかったのです。母乳が止まってしまいました。栄養が足りなかった赤ん坊は肺炎にかかり、生後八か月で亡くなりました。短い命でしたよ。

そういうことがあって、わたしはまた勤めを辞めることになりました。三年

後、今、家を継いでいる息子が生まれました。年子で女の子も生まれました。二人とも母乳で育てましたので体力もあるし病気もしたことはありません。お産はいつも家でしました。しゅうとめも気持よく面倒をみてくれましたのでありがたいかったですよ。

昭和三五年、主人は東校（現、神奈川県立厚木東高等学校）で英語を教えていました。休みには必ず子どもたちを遊びに連れて行ってくれた子煩悩な人でした。この頃がわたしたちにとって一番楽しい日々でしたね。

普段は元気な人でしたが、その歳の暮に「疲れて背中が病める」と言つて、医者へ行きました。「胃が悪いのでは」ということで手術をしましたが、すい臓でした。医者はそのことをわたしにだけ告げました。五月に手術して六月に退院。

七月、八月と静養をして九月に学校にいましたが、一一月に入つて「疲れるから」とまた休みを取りました。その月の一五日に二人の子どもの七五三のお祝いをやりました。主人はその姿を見て、「これで成人して、よそになんてくれてやるのはいやだな」と言ったのよ。その言葉は忘れられないね。それから何日もなかつたね。二八日の夕方昏睡状態になり、翌朝息を引き取りました。

一家の財布を握っていたのはしゅうとめでした。もとは農家だったのでお米がたくさん売れても食べていくのがやつとだつたでしょう。結局、山を売つて主人の教育費を出していたみたいです。結婚したとき主人は「親に教育してもらつた

から親孝行がしたい。一〇年は給料を親に渡してやりたい」と言っただけです。それから一〇年でした。親に孝行しただけで、亡くなってしまいました。

### 三たび教壇へ

これからは子どもたちのためにと思ってまた復職することにしました。辞めて七年過ぎていましたので、新採用のときと同じように試験を受けることになりました。それに復職できるのは三五歳まででしたから、ここで受からないと、もう学校へは勤められないということになります。必死でしたね。努力のかがいがある前に勤めていた緑小学校へ勤めることになりました。

家ではお蚕さんから野菜に転向してきゅうりを作っていました。早くもいで一箱に一〇〇本入ったのは売れるけど、太目の八〇本入りは売れなくなるのです。ここでも時間との戦いです。それを自転車に乗せて出荷に行くのもわたしの仕事でした。

しばらくして、きゅうり作りをやめて、しゅうとは村長に出馬しました。選挙は家族がまともらないとできないことなのです。「やりたいことをやらせてやろう」ということで家族みんなで手助けをしました。わたしは学校の帰りに教習所へ通って車の免許を取り、しゅうとの運転手をやりました。

## 製茶業を始める

清川村でお茶づくりが始まったのは昭和四〇年頃からです。山々に囲まれて霧のかかる清川村はお茶の栽培が適しているということでした。それまでは米や野菜を作っていました。品質が悪く、うまくいかなかったようです。政府の減反政策の勧めもあり、お茶に転作していきました。

お茶の木は七年経つてやっと成木になります。三人一組になって機械でお茶の葉を刈りながら袋に詰めていきます。そして一輪車で畑から運び出し、蒸れないように送風機の前に置いておきます。この送風機が無かった頃は、夜一時間にお勝手の仕事を終えると作業場へ行ってお茶つばを上下にかき混ぜ、夜中の二時から三時にまたかき混ぜます。寝ていても始終ぱつと起きるといふふうでした。お茶つばを蒸したり、乾燥させたり、撚よったりして、やっと荒茶になります。その荒茶を切断機で葉つばと粉茶に分けて、精茶に仕上げていきます。

お茶の生産高が上がってきたこともあって、ますます忙しくなりました。その頃からしゅうとめの痴呆症も進んできましたので、昭和六二年三月厚木第二小学校を最後に退職しました。

学校に勤めながら、お蚕さん、畑、製茶、しゅうとめの看病と、土曜、日曜も無い生活を送ってきました。ときどきわたしの人生は何だったのかしらと思うと

### 減反政策

一九七〇（昭和四五）年一月七日実施。米価の内外価格差が大き過ぎる（国際価格は日本米価の三分の一）ため輸出で処理する政策がとれないので需要量に合わせて生産高を抑制した。今日まで一貫して続けられている。

きもあります。これもからだか丈夫だからやつてこれたことで「わたしがやらなければ誰がやる」という気持ちで続けてきました。

わたしが実家へ里帰りしたとき、母からのお土産はいつもぼた餅でした。厚木あたりでは座りぼた餅といい「長くないなさいよ。苦しくてもすぐになんか腰をあげるもんじゃないよ」といつてもらってききました。そのお陰でここまで頑張つてこれたような気もします。

退職してから三年目に清川村の教育委員の話をいただきました。それを務めながら趣味も広げてみました。大正琴を始めて、もう一三年になります。琴の音色は心をなごませてくれます。今年、講師の資格もいただきました。絵手紙にも夢中です。全国大会に出してみたらハガキ大賞をいただきましたので、ますます張り切っています。まあ、こんなことをやりながら日々楽しんでいきます。

今、名刺に「人生航路、夢を描きつつ」と書いています。どんな夢でも、今までできなかったことを、ちよつとでもできるようになつたら、嬉しいですよ。

「自分の人生は自分で広げていかなくっちゃ」と思っています。



#### 教育委員

清川村で二人目の女性教育委員。教育委員五人中女性は一  
人。二〇〇二年から委員長。

#### 聞き取り

二〇〇二年一〇月一七日

二〇〇三年三月二七日

# 厚木の花街を支えて

篠田 道子  
しのだ みちこ

一九三二（昭和六）年  
三月二十六日  
東京市麻布区生まれ  
厚木市元町在住

厚木はわたしの第二のふるさとね。水が合ったんでしよう。来たのが昭和三一年ですから五〇年近くここにいます。当時は製糸業も盛んで半原のほうからのお客も多かった。その後は豚屋さん、砂利屋さんや土建屋さんね。世の中の景気もよかつたし、あの頃のお客さんは、お金に糸目をつけなかつた。けちな人はいませんでしたよ。

わたしも昼間は芸事に励み、お声がかかると出かけました。「大島屋」とか「静本」「銀鱗閣」が多かつたですね。

## 一六歳で下地つ子したじ

「麻布の金庫職人の篠田」っていうとちよつと有名でね、わたしの父親なの。器用な人で腕はよかつたらしいんですが、遊び人でね、博打も打つてました。戦

### 「大島屋」

一八八九（明治二二）年創業。  
関東大震災で全焼。その後再  
建し、材木商をしながら営業。  
鮎やスッポンの鍋料理が看板。  
厚木では老舗の料亭の一つだ  
つたが二〇〇三年、閉店。

### 「静本」

一九一九（大正八）年創業。  
厚木でうなぎといえは静本と  
いわれるほど、うなぎ料理で  
知られた料亭。八二年閉店。

時中は家の二階を博打場にしてたんですよ。出入りする人がいろいろなものを持ってきましたから、わたしたち姉二人、兄、弟のきょうだいは食べ物には困りませんでした。母は、二階の博打場でおにぎりを売ったりして、小銭を貯めてました。

戦災で家が焼けたんで、父だけ残して母と姉、わたしと弟で上の姉のいる岐阜へ疎開したんです。姉はその頃、岐阜の笠松で芸者をしていましたから。母はこつこつ貯めた大金を持ってね。それまで父から頭をおさえられていたせいかわらばあつと使っちゃったのね。「篠田の茂ちゃんの身元だし」なんて姉の名前をだされておだてられてね。

終戦後はみんな東京へ戻ってきました。ところが家のあつた場所は焼け野原でしょ、「ここが篠田の福太郎の土地だ」と明記しておけばよかったのに、他人の家が建っちゃってたの。その頃は三千円でバラックができた時代ですけど、父は「博打で儲けた金で、家や土地を買ったり建てたりしちゃあいけない」っていう男でね。そのくせ八千円の借金があつたもんだから、しかたなく知り合いに二階を借りて一年ぐらい暮らしました。

すぐ上の姉も戦争花嫁でハワイへ行つてしまいましたし、家には娘はわたしだけだったから「下地っ子」として近所の「恒の家」という置屋さんに入つたんです。一六歳のときでした。

#### 「銀鱗閣」

一九五七（昭和三二）年創業。  
結婚式場、割烹旅館、高級料理店、ヘルスセンターといつた多角経営で繁盛したが、七四年に火災にあい、店を閉める。

#### 戦争花嫁

この場合は太平洋戦争後、進駐軍兵士と結婚した日本女性のこと。

#### 「下地っ子」

芸妓見習いのこと。置屋にいて芸妓の手助けをしたり、出先へ物を届けたりしながら、踊りや三味線などの稽古に励む。

「恒の家」では姐さんたちの部屋を掃除したり、着物をたたんだり、身の回りのことを手伝いました。

芸者衆でもお泊りというのがありましてね、たのまれて着物を持っていくと、お客さんが「おい、チビ、ちよつと来いよ」と、おいしいものをくれたり、お小遣いをくれたりしてね、そんなことが身についてくるんですね。踊り、三味線、お作法、お茶、お花などのお稽古は厳しく仕込まれました。一通りの芸を身につけないと一人前になれないんです。一九歳でお座敷に出るようになるとお客さんからお呼びがかかるようになりました。

この頃子どもができ、そこをやめて実家へ戻りました。三田<sup>みた</sup>の病院でお産をしたんです。相手は新興成金の旦那でね、籍は父が入れたんでしょうね。二年間親たちと同居しましたが、きょうだいといっしょでしたから居づらくなつたんでしょうね、旦那はときどき居なくなりましたね、「別れたほうがいい」って父が言うもんですから、協議離婚しました。当時はなんでも親の言うなりでしたね。

いったんお産で退いていた「恒の家」に戻ったんですが、「おかあちゃん」と言つて子どもが来るんですよ。家と置屋が目と鼻の先でしょ、わたしが一本になつたときは、「かわいい、いい奴だ」と騒がれていたのに「なあんだ、あれは出戻りか」ということで、あまり売れなくなつちやつたんです。でも借金はかさむでしょう、「じゃあ俺の知つているところへ」という父の口利きで子どもをお

#### 置屋

芸者屋ともいう。芸者を抱えておく家で、料理屋からの要請で芸者をその座敷に侍らせた。ふつうは五年以上芸者を務めると、一定の金額を払つて置屋をもつことができた。

いて沼津に行つたんです。昭和二八年のことでした。でもね、お客がつくと義理人情がからんできて、それが重荷になつてきたんです。わたしの借金を返してくれた旦那、その旦那を紹介してくれた料理屋のお姐さん、そこのお三味線のお姐さんという具合にね。「この妓がいい」って言われると、だんだん苦しくなつてきて、自由がきかなくなるのね。もう芸者は辞めようと思つたんです。

沼津では、海岸が近かつたのでその頃幼稚園へ通つていた娘もよく遊びに来ていました。三年後、また麻布へ帰つてきました。

## 厚木は第二のふるさと

その後工場や飲み屋などで働いたこともありましたが、でも一度芸者をしちゃうとね、花柳界の雰囲気はほかと違うでしょう。話すことも好きだし、芸事も好きだし、やっぱりわたしは、芸者が性にあつていると思うようになったんです。それでまたどこかで働こうと移つて来たのがここ厚木です。

「万千<sup>まんせん</sup>」という置屋がありました。その千丸という芸者さんの母親とわたしの父親が知り合いでね、博打仲間だったんでしょかね。昭和三年春、娘は母に預けて一人で来ました。それまで厚木なんてまったく知りませんでしたね。

美千奴<sup>みちやうこ</sup>という名前を貰つて「万千」には一年半住み込みました。ここのおかみ

一九五〇年代の厚木の花街

軍需景気、生糸景気、土地成金等、開発景気で厚木町の料亭は大尺遊びで大繁栄した。芸者は一〇〇人以上にのぼり料亭二七、置屋五三を数えた。

さんは、「二福いちふく」っていう名前で芸者をしていたそうです。鬼瓦みたいな顔をして、目の周りが真っ黒で、どてらなんか着ていると酒呑童子しゅてんどうじの鬼婆だなんて口の悪い人が言っていましたけど、根はとつてもいい人でね、寿司屋と置屋を兼業していたんです。

初めの半年くらいはわたし、売れませんでした。「みつちゃん、お座敷だよ、静本だよ」と呼ばれれば「はあーい」といって着物を着て出て行くんです。声のかからないときは、週刊誌を読んだり、ラジオを聞いたり、たまには見番けんぱんへ顔を出したりしました。お稽古は昼間だけ、踊りが主でね、太鼓、三味線もありました。お稽古代は置屋のおかあさんがだしてくれました。お稽古をしないと価値が落ちるわけ。踊りは一〇代から鍛えられていましたから、厚木に来てもすぐやれましたね。

「万千」には一〇畳の部屋に五人芸者がいました。全員がここにいるようではいけないんです。部屋は狭く、布団もよくないの。こんなボロ布団に寝ることはない、お呼びがあれば、いい布団へ寝られるんだということだね。粹なお客さんは料亭で食事をしたあと、自分は帰ってもそこへ泊まれるようにしてくれました。からだが楽でしょう。一週間泊まるなんてこともありましたよ。

着物は全部自前でね。一年に五、六枚作りました。夏は船遊びがありました。船ではいつも浴衣でしたから、ひと夏やはり五、六枚ね、「のほら呉服店」が多

#### 見番

芸者屋の取締りをするところ。また芸妓の取次ぎや玉代の精算などするところ。

#### 「のほら呉服店」

一九四六（昭和二一）年創業。創業者は野原博。厚木市寿町に店をかまえた。花街の近くにあり、芸者の出入りも多かった。

かったですね。置屋のおかあさんにお金を借りて作ったこともありました。

お風呂はいつも三時頃、近所の「竹の湯」さんに行つてね、五時がお客さんとお約束の時間でしたけど、景気よかつた頃は、お客さんがお昼を食べに来て芸者を呼んじやうの、そのままずうつと夜までね。

その頃は糸や繭の製糸業の人で、みんな半原、中津からですよ。それから砂利屋さん、土建屋さんなどからお声がよくかかりましたね。土建の人はみんなここで談合をやるんですよ。朝の一〇時からお呼びがかかっていました。

### 置屋を持って一本立ち

芸者をかかえなくても一人で置屋を持てたんです。五年経つて五万円出せば功労賞といつて功労看板をね。わたしは五年経たずに持つたんで、その分高く十何万円出したの。

お披露目は「万千」のおかあさんが付いて回つてくれてね、「竹の湯」のそばに「新万千」という看板をだして一本立ちしました。昭和三四年でした。四年生になつていた娘を引き取ることができたんです。三味線のうまい芳香よじか姐さんの長男の受持ちの先生がいいからつて、厚木小学校の同じクラスに娘を入れてもらつてね、ようやく親子が一つ屋根の下に暮らすことができるようになりました。

一本立ちになり、芸者のときより収入は多くなりました。芸者は看板料という名目で月額二万五千円から三万円を置屋に払っていましたね。見番は手数料を三〇円、五〇円と取っていたんじゃないでしょうか。厚木へ来た当時のわたしの玉代たまぐは一時間手取り一八〇円、客下げが二三〇円だったと思います。でも最後のほうは一四〇〇円ぐらいだったかな。料理屋さんがなかなか上げないですよ。置屋さんも「上げて上げて」というんですけど、上げると芸者衆が呼ばれなくなるからと言ってね。やはり強いものには勝てなかった時代なんですね。

見番に入るとすぐ前に縦六〇センチ横一五〇センチくらいの大きな板が置いてありましてね、芸者衆の名札が並んでいるんです。下に名札を入れる木枠があって、右端から三味線の人、次は古い芸者さんから順番に置くんです。その上にお線香を立てる穴がありました。昭和の初め頃までそれを使っていたんだそうですよ。消えるのに三〇分かかるんで、それがお座敷の目安だったそうです。周りに焦げた跡がありましたね。

わたしたちはお線香のかわりに料理屋で伝票に時間を書いてもらい見番へ持つてくるというやりかたでした。どうしてもこの芸者というとき、前のお客さんの時間が過ぎても帰らなかつたりすると、ごたごた揉めたりしましたね。見番にはいつも事務員さんが二、三人いてね、男衆もいました。

その頃見番へ入るお金はかなりの額だったんですね、それが災いとなり、揉め

玉代

花代、線香代などともいう。客が料理屋で遊興するとき座敷に呼ぶ芸者の代金。

客下げ

客が払う遊興費いっさいのこと。

て揉めてとうとう三業組合さんぎようから分かれて二業組合にぎようができたんです。「万千」のおかあさんの旦那が二業組合を作ったんで、わたしは看板持ったばかりだし、義理があつて二業組合にきました。芳香さんは三業のまままで別れ別れになりました。今まで呼ばれていた「大島屋」や「静本」には行けなくなり、「三樂」「銀鱗園」「丸花」系になったんです。組合には芸者衆も役員に入っていましたけど、呼ばれる立場だからね、おかあさんから「余計なこと言っちゃあいけないよ」って止められていたわけですよ。生意気なこと言うと呼ばれなくなるんで、誰も何も言わなかつたんでしょね。

## 「厚木音頭」は応援歌

宴会では最初に踊りね、季節で決まったものがあるんです。一月「鶴亀」、二月「五郎」、三月「花見踊」というふうだね。後は賑やかに「奴さん」や「かつぼれ」「深川」など踊りました。そして最後に「厚木音頭」でしめるんです。出だしの「ハアアア」これが「東京音頭」といっしょなんですよ、元気がでるんです。お客さんと揃って手拍子でね。これは大勢でないと面白くないの。

「厚木音頭」はわたしの応援歌だと思つています。元気が次につながるよ。うな気がするの。この唄は子どもを引き取つてから唄うようになりました。

三業組合  
芸者、置屋、料亭の三業種が作った組合を三業組合といひ一九五四（昭和二九）年九月結成。厚木の花街は隆盛をきわめた。

二業組合  
厚木三業組合の運営に関して内部の意見が分かれ、一部が脱退して二業組合を作つた。以後は三業と二業に分かれて営業した。

「厚木音頭」  
最初「厚木音頭」は一九〇五（明治三八）年、江戸情緒を伝える清元調の曲で花柳界のメ次によつて作られた。のちに発表された厚木音頭と区別するため、これはのちに「厚木小唄」として唄われる。  
現在の「厚木音頭」は、栗原白也作詞・大村能章作曲で、一九三四年に発表された。

娘が通っている小学校で参観があるでしょう、先生がたもお客で知っていましたから「今日は美千奴がくるぞ」というわけです。娘も友だちから「た、か、こ。た、か、こ」って言われたりしてね、運動会、授業参観とかさずに行きましたね。隣組の人も子どもが同じクラスだったりすると、家へ来て飲んだりしてね。お座敷に呼ばれたお客さんが遊びに来て、娘は手をつないで歌ったりして平気でしたよ。そんなわけではじめられることもなかったみたい。たとえあつたとしても、わたしが仕事をしていましたから、いちいち親にも言わないで消化しちゃったんでしょね。明るい子でしたから。

### 大家族を抱えながら

その頃両親は厚木と東京を行ったり来たりしていましたが、父は昭和四二年、前立腺の病気になつて厚木の病院に入院、その年、母も東京で倒れて中風になつたんで家に引き取つたんです。父は一年後亡くなりました。翌年、学生結婚した娘がお産をしたんでその世話と、母の介護が重なつてね、でも若さつてすごいと思ひましたよ。健康にも恵まれました。当時の福祉は今のようではなかったですけど、全然苦じゃなかった。大人の汚物は浴衣から作つたおしめだけでは駄目でしょう、その頃はすべて今と違つて自分で買わなければならぬのでそれが大変

〔東京音頭〕

一九三三（昭和八）年、小唄勝太郎が唄つた「東京音頭」は全国的な大ヒットとなつた。

だったわね。八年間、寝たきりの母を世話しました。昭和四九年、当時の石井忠重市長さんが親孝行都市を宣言され、第一回目に表彰されました。孝養表彰記念として大きな花瓶をいただきました。励みになりましたね。それから一年後の昭和五〇年、母も亡くなりました。

ハワイにいた姉が離婚して相模原でスナックをしていたのもその頃ですが、うまくいかず子ども四人を連れてわたしの家へ来てました。二業組合も下降気味でしたし、わたしは働かなきゃならない。そんなとき二業をやめてまた三業に移ったんです。まだ芳香さんも元気でしたし、昔のお馴染みさんもいました。これなら大丈夫と思えました。それからまもなく二業はいつ潰れたともわからないようにつぶれたんです。

その頃飯山温泉に活気が出てきて、飯山温泉組合が昭和四六年一二月にできたんです。お客さんが山里の自然や温泉を求めるようになったのね。二業と三業に芸者さんを入れてくれと飯山から申し入れがありました。飯山は同じ厚木なのに二つの組合ともそれを断ったんです。上の人たちは、厚木の芸者衆もお得意さんも取られると思っただんですね。わたしにも置屋を移して飯山に来ないかと誘いがありました。厚木の町の暮らしがよくってね、断りました。

そんなこんながあり、昭和五七年三月二六日三業組合も潰れたんです。しかもその日三業組合の事務をしていた姉が心臓麻痺で急死したんです。飯山が活気を

#### 石井忠重

元厚木市長（一九五九〜一九七九在任）。

親孝行宣言都市を提唱。

人間の生命をはぐくみ育ててきたのは親であることを再認識し、子は親に感謝する人間性の涵養を市民運動として展開する。当時マスコミの反響が大きかった。

#### 孝養表彰

寝たきりの高齢者を五年以上看護している人を対象とする。第一回は二二名、第二回は一七名が表彰される。

呈してきたのと、厚木の花街の衰退はおおいに関係あると思いますよ。

とにかく芸者衆が一〇人くらいになっちゃいましてね、まだ料理屋さんは何軒かありましたが、上の人たちが考えたすえ、新たに「三業クラブ」を発足させることになりました。この年の秋です。新聞にも出ましたよ。わたしが代表でずっとやってきました。

### 手古舞<sup>てこまい</sup>でお神輿の先導

「みっちゃん、手古舞を出してくれないか」と厚木市から要請があつたのは、昭和六〇年、市制三〇周年を記念してということでした。お天王さんのときお神輿の先導をするんです。それまでは手古舞はやっていなかつたんです。記念事業だから「二日間がいい」って足立原茂徳市長<sup>あだちはらしげのり</sup>さんが言われたの。

市からは交付金として二五万円、足立原先生が力を入れて下さつてね。事務所は商工会議所で、ここからは二〇万円もらつたかな。でもそれだけではとても足りなくて、わたしたちが寄付金集めに毎日毎日歩いたんです。今までお得意さんだつた建設業界、旅館などに協力をお願いしたら四〇〇万円も集まりましたね。それで衣装を作りました。衣装は自分たちの物だけど、鬘<sup>かつら</sup>、顔師<sup>かおし</sup>などいろいろで一〇〇万円はかかるんですよ。

### 手古舞

江戸時代の祭礼の余興に出た舞で、もとは氏子の娘が扮した。芸妓が男鬘に右肌ぬぎで、伊勢袴、手甲、脚絆、足袋、わらじをつけ、花笠を背に掛け鉄棒を左に突き、右に牡丹の花を描いた黒骨の扇を持って、煽きながら「きやり」を唄って、神輿の先駆をする。

### 足立原茂徳

前厚木市長（一九七九〜一九九五在任）。

### 教育文化都市を提唱。

一九八二（昭和五七）年には婦人会館開館。八七年を婦人行政元年と位置づけ女性の地位向上や社会参加を推進した。

### 顔師

顔<sup>かほ</sup>ごしらえを専門にする人。

手古舞は七人でやるんです。わたしたち手古舞が四人、若衆が三人でね。手古舞の衣装を着て鉄棒かねぼうを持って、お神輿の前を歩くの。本当は踊りはないんですが、わたしたちは町の中心で踊りました。当時は地域の人の協力でお水が出たり、お弁当が用意されたり、場所を提供してくれたりしましたが、一〇余年続けてきた手古舞も、やる人がいなくなりました。お子さんを出さないんです。夏休みでも炎天下に鬘をかぶって歩くのは大変でしょう。一日で倒れちゃうの。不景気になったしお金も出なくなっただし、この辺でやめようと決めました。せちがら世の中でさびしいものですよ。わたしたちがだらしないのね。今は保存会という名前だけ残っています。

### 和風スナック「みっちゃんのお店」

わたしのしあわせって今、現在ですよ。平成元年、厚木市元町に「みっちゃんのお店」を出しました。商売そのものはまあまあですが、この歳になつてもみなさん「みっちゃん、みっちゃん」って言ってくださるし、とてもしあわせ。お客さんはご夫婦、お医者さん、学校の先生、女の友だち同士、元市会議員さんいろいろです。最高齢は九〇代ですよ。この地に水を得て、お金に換えられない財産になりました。



手古舞での美千奴（一九九三年）

毎週月曜日は小唄のお師匠さんが東京から見えて、数人でお稽古しています。お稽古のあとはお食事をしたりしてね。ふだんは八時頃起きて一〇時半に買い物に出ます。帰りに「のはら呉服店」に寄ってお昼をご馳走になるときもあるんですよ。一二時から昼寝、三時には近くの風呂屋さんへ、とても疲れがとれるわね。後はしたくに入り五時開店です。閉めるのは一〇時か一一時頃。でもお客さんが居られれば、いつまでも付き合っただけで夜中にもなりますよ。お酒もお客さんに合わせます。お店を閉めてから「みっちゃん、お寿司でも」とお客さんとお馴染みのいつもの寿司屋へ出かけたこともあります。年中来ているお客さんでも隣同士で腰かけることはしません。「いつしやおく」といつて椅子一つ間をおくのね、後から来られたお客さんに失礼になりますから。

お店を開いてから一五年、早いですね。五周年のときは足立原先生もいらして盛大にやりました。昔からのお馴染みさんも来てくださるし、なつかしい話で盛り上がる日もありますしね。この厚木に来て、ここの人になってほんとうに深いご縁ですよ。



「みっちゃんの店」で

聞き取り

二〇〇三年七月二十七日

# 参 考 年 表

西 曆・元 号	二〇人の年譜	郷 土 の 動 き	世 界・国 内 の 動 き	
<p>一八八三 (明治一六)</p> <p>一八八四 (明治一七)</p> <p>一八八五 (明治一八)</p>	<p>前場コウ出生 (高部屋村)</p>	<p>板垣退助が清源院で遊説、聴衆八〇〇名</p> <p>愛甲婦女協会創設</p> <p>神崎正蔵ら相愛社設立</p> <p>景山英子、荻野村でオルグ</p>	<p>大阪事件で各地の民権家が検挙される。そのうち相州関係者は、天野政立・大矢正夫・難波惣平・山川市郎・山本與七・霜島幸次郎・黒田黙耳・佐伯重三郎・難波春吉</p> <p>大日本帝国憲法発布</p> <p>教育勅語発布</p> <p>日清戦争始まる(厚木市域戦没者二一名)</p>	
<p>一八八九 (明治二二)</p> <p>一八九〇 (明治二三)</p> <p>一八九四 (明治二七)</p> <p>一八九七 (明治三〇)</p> <p>一八九八 (明治三一)</p>		<p>厚木町宝来亭で活動写真上映</p> <p>杉山フク、厚木町で産婆業開始</p> <p>厚木町に県蚕糸検査所設置</p>		<p>奥村五百子、愛国婦人会設立</p>
<p>一九〇一 (明治三四)</p> <p>一九〇二 (明治三五)</p> <p>一九〇三 (明治三六)</p> <p>一九〇四 (明治三七)</p> <p>一九〇六 (明治三九)</p>		<p>県立第三中学校開校(現、厚木高等学校)</p> <p>愛甲郡立女子実業補習学校設立</p> <p>愛甲郡立農業補習学校設立</p> <p>日露戦争始まる(厚木市域戦没者五二名)</p>		

一九〇七(明治四〇)

大下トシ出生  
(小鮎村)

神奈川県女子師範学校設立

義務教育六年制となる

一九〇八(明治四一)  
一九一〇(明治四三)

愛甲郡町村青年会連合会を結成  
愛甲郡高峰村処女会発会  
愛甲郡立女子実業補習学校、愛

戊申詔書発布  
大逆事件おこる  
韓国併合

一九一一(明治四四)

鈴木トヨ出生  
(厚木町)  
中野タエ出生  
(横浜市)

甲郡立実業女学校と改称  
厚木町に処女会発会

平塚らいてうら、『青鞥』創刊

一九一二(明治四五)

鈴木ゆき江出生  
(厚木町)

愛甲郡三田村処女会発会

一九一三(大正二)

愛甲郡立実業女学校、愛甲郡立  
実科高等女学校と改称

第一次世界大戦始まる

一九一五(大正四)

後藤フミ出生  
(相川村)  
川口せん出生  
(玉川村)

愛甲郡小鮎村処女会発会

一九一八(大正七)

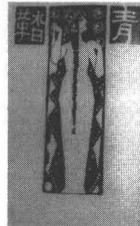
中倉千鶴子出生  
(厚木町)  
山本多満出生  
(厚木町)

愛甲郡青年団発足

富山県で米騒動おこり、全国に波及



愛甲郡立実科高等女学校



『青鞥』

<p>一九二四 (大正一三)</p>	<p>一九二三 (大正一二)</p>	<p>一九二二 (大正一〇)</p> <p>一九二二 (大正一一)</p>	<p>一九二〇 (大正九)</p>	<p>一九一九 (大正八)</p>
<p>大野テイ出生 (比々多村)          甘利千代子出生 (大和村)          小島すみ出生 (東京府)          清田とみ江出生 (山梨県)          石井ミネ出生 (妻田村)          金子喜美子出生 (荻野村)          沼田美恵子出生 (海老名村)</p>				
<p>厚木幼稚園創立          愛甲郡下川入、棚沢村処女会発会</p>	<p>厚木町で大被害          関東大震災発生、          愛甲郡立実科高等学校、厚木実科高等学校と改称          愛甲郡煤ヶ谷村処女会発会          愛甲郡女子連合青年団結成          神奈川県青年団連合会 (神奈川県連合女子青年団) 『武相の若草』創刊</p>	<p>『武相の若草』  </p>		
<p>国際連盟に加盟          第一回国勢調査 日本総人口、七六九八万八三七九名          (内地人口、五五九六万三〇五三名)          市川房枝・平塚らいてうら、新婦人協会設立</p>				

一九二五 (大正二四)	前場コウ結婚		普通選挙法公布 治安維持法公布
一九二七 (昭和二)	古根村喜代子出生 (町田町)	小田急電鉄新宿—小田原間開通	金融恐慌おこる
	熊坂千代出生	相模厚木駅 (現、本厚木駅)・愛甲石田駅設置	神奈川県連合女子青年団成立、一〇月に発会した大日本連合女子青年団に加入
一九二八 (昭和三)	山田富美枝出生 (南毛利村)	厚木実科高等女学校、厚木高等女学校と改称	世界大恐慌、日本に波及 満州事変勃発
一九二九 (昭和四)	篠田道子出生 (東京市)	愛甲郡青年団『愛青』創刊	「満州国」建国宣言
一九三一 (昭和六)	大下トシ結婚	神中鉄道厚木—横浜間開通	五・一五事件おこる
一九三二 (昭和七)	鈴木ゆき江結婚	大日本義勇飛行会厚木飛行場開場 (金田河原)	大日本国防婦人会発足 国際連盟脱退
一九三三 (昭和八)	鈴木トヨ結婚	玉川小学校で御真影紛失事件	二・二六事件おこる
一九三四 (昭和九)	鈴木トヨ結婚	厚木町女子青年団、すき毛を集めて国防献金	前畑秀子、ベルリンオリンピックで優勝 (水泳)
一九三五 (昭和一〇)	小島すみ・中野夕子結婚		日中戦争始まる
一九三六 (昭和一一)			
一九三七 (昭和一二)			

<p>一九四六（昭和二二）</p>	<p>一九四五（昭和二〇）</p>	<p>一九四四（昭和一九）</p> <p>一九四三（昭和一八）</p>	<p>一九四二（昭和一七）</p>	<p>一九四一（昭和一六）</p>	<p>一九三八（昭和二三）</p> <p>一九三九（昭和一四）</p> <p>一九四〇（昭和一五）</p>
<p>金子喜美子結婚 中倉千鶴子・ 大野テイ結婚</p>	<p>沼田美恵子結婚</p>	<p>石井ミネ結婚 清田とみ江結婚 後藤フミ・</p>	<p>山本多満・ 甘利千代子結婚 川口せん・</p>	<p>厚木保健所開所</p>	<p>厚木保健所開所</p>
<p>六月、愛甲郡三田村・林村・妻 田村・下川入村・及川村・棚沢 村が合併して睦合村になる</p>	<p>松川サク、厚木町に相模ゴム工 業株式会社設立 厚木に横須賀の小学生など疎開 児童を受け入れる</p>	<p>足立原マサ・浅葉スミ・山本ト シラ、大日本婦人会厚木支部設 置</p>	<p>厚木保健所開所</p>	<p>厚木保健所開所</p>	<p>厚木保健所開所</p>
<p>東京大空襲 広島・長崎に原爆投下 ポツダム宣言受諾、敗戦 農地改革始まる 日本国憲法公布 戦後初の総選挙で、婦人参政権行使（女性議 員が三九名当選）</p>	<p>学徒勤労令・女子挺身隊勤労令公布</p>	<p>日独伊三国軍事同盟が成立 紀元二六〇〇年祝賀行事 大政翼賛会成立 小学校を国民学校と改称 日ソ中立条約締結 真珠湾攻撃・太平洋戦争始まる 日本本土初空襲</p>	<p>国家総動員法発令 第二次世界大戦始まる</p>	<p>厚木保健所開所</p>	<p>厚木保健所開所</p>

<p>一九四七（昭和二二） 一九四八（昭和二三） 一九五六（昭和三一）</p>	<p>一九四九（昭和二四） 一九五〇（昭和二五） 一九五一（昭和二六） 一九五五（昭和三〇）</p>	<p>古根村喜代子・熊坂千代結婚 篠田道子結婚 山田富美枝結婚</p>
<p>新制中学校、市内に八校開校 浅葉スミ、厚木町会議員に当選 旧制中学校・女学校、新制高等学校となる 厚木高等女学校、厚木女子高等学校と改称 第一回厚木鮎まつり</p>	<p>厚木町章制定 厚木女子高等学校、厚木東高等学校と改称 県立厚木病院開院 二月、厚木市誕生 厚木町と睦合村・南毛利村・小鮎村・玉川村合併（人口、三万一二九五名） 続いて七月に愛甲郡依知村・中郡相川村も厚木市に合併 浅葉スミ、厚木市初の女性議員 愛甲郡荻野村、厚木市へ合併</p>	<p>教育基本法・学校教育法公布（六・三制） 学校給食始まる</p>
<p>日本、国際連合に加盟</p>	<p>朝鮮戦争始まる サンフランシスコ講和条約締結 日米安全保障条約調印</p>	

## 主な参考文献

- 『神奈川県の歴史 県史シリーズ14』 中丸和伯  
山川出版社 一九七四年
- 『神奈川の歴史』上・中・下巻 読売新聞社横浜支局編  
有隣堂 一九六六年
- 『神奈川県の百年 県民百年史14』 高村直助ほか  
山川出版社 一九八四年
- 『神奈川県教育史 通史編』上巻 神奈川県立教育センター  
編 神奈川県教育委員会 一九七八年
- 『厚木市史料 厚木市史年表』 厚木市史編さん委員会編  
厚木市役所 一九八二年
- 『厚木近代史話』 厚木市史編纂委員会編・発行  
一九七〇年
- 『厚木近世史話』 厚木市史編纂委員会編・発行  
一九七二年
- 『厚木郷土誌文庫 七集』 続 読物厚木の歴史 鈴木茂  
県史史談厚木支部 一九七八年
- 『平成4年度 厚木学体系化調査事業 地名』 地域の文化  
を考える会編・発行 一九九四年
- 『厚木の民俗9・10 食生活1・2』 厚木市文化財協会編  
厚木市教育委員会 一九九七―一九九九年
- 『厚木産業史話』 厚木市史編纂委員会編 厚木市役所  
一九七六年
- 『厚木の商人』 鈴木茂 神奈川情報社 一九八〇年
- 『厚木市躍進の十年と現勢』 遠藤徳英 鏡浦書房  
一九六六年
- 『厚木の徳育』 厚木市教育委員会社会教育課編 厚木  
市教育委員会 一九七六年
- 『厚木市文化財調査報告 荻野山中藩の調査』 厚木市  
教育委員会社会教育課編 厚木市教育委員会 一九六九年
- 写真集『厚木市の昭和史』 厚木市の昭和史編集委員会・  
地域文化研究会編 千秋社 一九九三年
- 『愛甲郡制誌』 愛甲郡役所編 名著出版 一九七三年
- 『藤沢市史 第一巻資料編』 藤沢市史編さん委員会編  
藤沢市役所 一九七〇年
- 『千代田区女性史』全三巻 千代田区・千代田区女性史編  
集委員会編 ドメス出版 二〇〇〇年
- 『夜明けの航跡―かながわ近代の女たち』 神奈川県立婦  
人総合センター・かながわ女性史編集委員会編 ドメス  
出版 一九八七年
- 『共生への航路―かながわの女たち45〜90』 神奈川県  
立かながわ女性センター・かながわ女性史編集委員会編  
ドメス出版 一九九二年

- 『女の一生を書く―評伝の方法と視点―』 江刺昭子  
日本エディタースクール出版部 一九九四年
- 『地域女性史入門』 折井美耶子 ドメス出版  
二〇〇一年
- 『明治・大正家庭史年表』 『昭和・平成家庭史年表』  
下川耿史編 河出書房新社 二〇〇〇―〇一年
- 『物価と風俗135年のうつり変わり―明治元々く平成  
13年―』 アカデミー編 同盟出版サービス  
二〇〇一年
- 『物価の世相一〇〇年』 岩崎爾郎 読売新聞社  
一九八二年
- 『戦前・戦中用語ものしり物語』 北村恒信 光人社  
一九九一年
- 『解説 国勢調査』 総務庁統計局 二〇〇〇年
- 『国勢調査 宣伝歌に関する諸資料』 鳥取県の祐生出会  
いの館所蔵
- 『草莽崛起―荻野山中藩御陣屋焼討事件―』 露木国寛  
一九九一年
- 『北洋の開拓者―郡司成忠大尉の挑戦』 豊田穰 講談社  
一九九四年
- 『戸籍と身分登録』 利谷信義ほか 早稲田大学出版部  
一九九六年
- 『初任者のための戸籍研修問題と解説』 日本加除出版  
編・発行 一九九〇年
- 『戸籍って何だ 差別をつくりだすもの』 佐藤文明  
緑風出版 二〇〇二年
- 『教科書でみる近代日本の教育』 海後宗臣ほか 東京  
書籍 一九七九年
- 『明治・大正・昭和の世相史』 上・下巻 山路健  
明治書院 二〇〇一年
- 『神奈川の自由民権運動』 大畑哲 新かながわ社  
一九八一年
- 『自由民権運動と神奈川』 大畑哲 有隣堂 一九八七年
- 『よみがえる群像―神奈川の民権家列伝―』 『続よみが  
える群像』 大畑哲 神奈川新聞社 一九八八―八九年
- 『みおつくし』 創立90周年記念誌 創立90周年記念誌編  
集委員会編 神奈川県立厚木東高等学校 一九九六年
- 『阿夫利嶺にこだまして―神奈川県立厚木高女学徒勤労  
動員の記―』 厚木高女青葉会記念誌実行委員会編 青  
葉会 二〇〇〇年
- 『芸能人物辞典 明治・大正・昭和』 日外アソシエー  
ツ編・発行 一九九八年
- 『松竹映画の栄光と崩壊―大船の時代』 升本喜年  
平凡社 一九八八年

嶋地孝麿編

『日本映画俳優全集 女優編』  
キネマ旬報社 一九八〇年

『日本映画人名辞典 女優編』下巻 掛尾良夫編

キネマ旬報社 一九九五年

『助産婦の戦後』 大林道子 勁草書房 一九八九年

『モノの原価がわかる本』 ㊟情報取材班編 青春出版

社 二〇〇一年

『小田急よもやま話』上・下 加藤一雄 多摩川新聞社

一九九三年

『三島事件と類似の三無事件』 宇都宮忠 新風書房

二〇〇二年

『日本風俗史辞典』 日本風俗史学会編 弘文堂

一九七九年

『うた 人 ヨコハマ』 読売新聞横浜支局

230クラブ新聞社 一九九六年

『大阪事件の研究』 大阪事件研究会編 柏書房

一九八二年

『あつぎ女性フロン21』 厚木市教育委員会社会教育部婦

人会館編 厚木市 一九八九年

『文芸あつぎ』 第一八号 村尾利久編 文芸あつぎの会

二〇〇一年

『厚木市立玉川小学校 百年のあゆみ』 記念誌委員会  
編 玉川小学校百周年実行委員会 一九九二年

『体験記集 横須賀の学童疎開』 横須賀市教育研究所  
編・発行 一九九七年

雑誌『蒲田』7号 橘弘一路編 蒲田雑誌社 一九三五年

『県史談』二九号・三〇号・三四号・三六号 県史史

談会編・発行 一九九〇―一九九七年

『身体障害者のスポーツ 指導の手引き』 日本身体障

害者スポーツ協会編 ぎょうせい 一九九七年

『私たちの昭和史』『続・私たちの昭和史』 玉川公民館

集一・二 玉川地区文化振興会編 厚木市立玉川公民館

一九九三―一九九五年

『記録集・小林多喜二没後69周年 講演と映画の夕べ』

多喜二ゆかりの七沢を知らせ歴史と文学をひろめる会編

・発行 二〇〇二年

『今昔あつぎの花街』 飯田孝 市民かわら版

二〇〇三年

CD『君が代のすべて』 キングレコード 二〇〇〇年

『産経新聞』『毎日新聞』『神奈川新聞』『しんぶん赤

旗』など

旗』など

協力者・協力機関・「さねさし」の仲間たち（五〇音順 敬称略）

協力者

飯田 孝  
大畑 哲  
長田かな子  
森山 敬子

協力機関

厚木市文化財保護課  
市史編さん係  
厚木市企画部  
女性政策課

指導  
江刺 昭子

「さねさし」の仲間たち

飯田 節子  
石井 ミネ  
内山 良子  
神谷 智子  
亀井喜美子  
椎名 清代  
清水三重子  
中倉マキ子  
中村 碩子  
深沢かをる



あつぎの女性20人  
—— 聞き書き集 ——

---

定価 1,000 円

2004年4月1日 発行

編 集 さがみ女性史研究会「さねさし」  
代表 内 山 良 子

印刷所 有限会社ユニオン印刷







